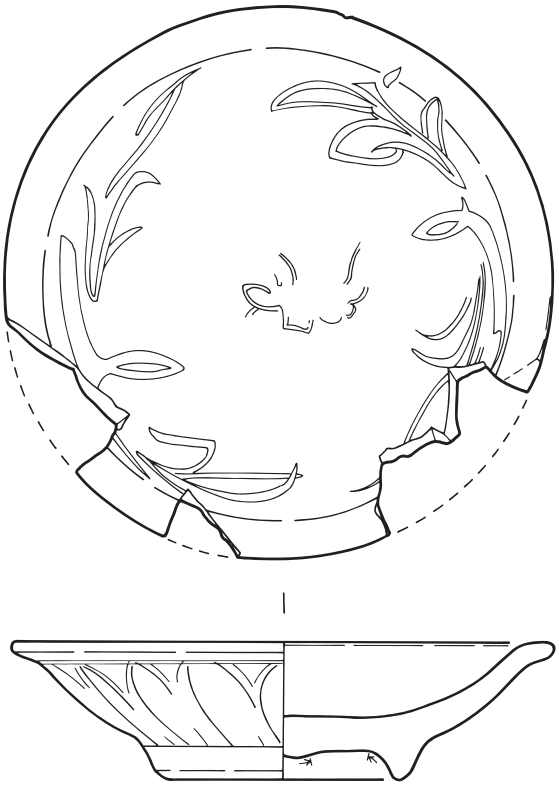
今帰仁村文化財調査報告書第25集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ



2008年　3月

沖縄県今帰仁（なきじん）村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第25集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ

－今帰仁ムラ跡　西区屋敷地5の調査－

平成20年（2008）３月

沖縄県今帰仁（なきじん）村教育委員会

巻頭図版1　空から見た今帰仁城跡と今帰仁城跡周辺遺跡（北から南）

巻頭図版2　屋敷地5遺構完掘状況

巻頭図版3　屋敷地5 SR1遺構検出状況

序

本報告書は、史跡今帰仁城跡の保存修理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものであります。

収録したのは、平成16年度に実施した史跡指定地内の調査および、史跡指定地外で今帰仁城跡周辺整備事業として実施した調査についてであります。具体的には、平成16年度の第１次外郭調査、第11次今帰仁城跡周辺遺跡調査として実施された今帰仁城跡の城外地区の調査報告書であります。

平成12年12月に本村の今帰仁城跡は県内８遺産とともに、「琉球国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産登録されており、グスクにとどまらずその周辺地域についても関心が高まっているところであります。

今帰仁村では今帰仁城跡周辺地域が史跡今帰仁城跡と一体となる文化財として保護・活用を図ることを目指しており、本調査によって発掘された出土資料は地域の住民に公開され活用していくことを計画しております。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁文化財保護部記念物課、沖縄県教育委員会文化課、沖縄県立埋蔵文化財センターをはじめ、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員の先生方に心から御礼申し上げます。

平成20年３月

今帰仁村教育委員会
教育長　田港　朝茂

例　　言

１．本報告は、今帰仁村教育委員会が、国・県の補助を受けて、平成16年度に実施した、「史跡今帰仁城跡保存修理事業」で、2004年４月～2005年３月に実施した「第１次今帰仁城跡外郭調査（城外北西区）」の発掘調査。および平成16年度に「第11次今帰仁村内遺跡発掘調査」で、2005年１月～３月実施された試掘調査に伴う埋蔵文化財の発掘調査の成果を主に収録したものである。

２．発掘調査、資料整理等で次の方々のご指導、ご協力を得た。記して謝意を表する。
脊椎動物遺体のコメント：樋泉岳二（早稲田大学非常勤講師）
炭化種子の分類分析：赤嶺信哉（株式会社イーエーシー）・喜名政英（〃）
石器・石製品の石質の分類：神谷厚昭（金城町石畳地質研究所）
　その他遺跡全体の調査に係ること：安原啓示（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、冨田裕次、赤嶺和雄、上原静、渡辺美季（今帰仁城跡調査研究整備委員）
　この他にも、発掘調査等にあたっては本中眞（文化庁記念物課）、玉田芳英（〃）、坂井秀弥（〃）、禰宜田佳男（〃）、島袋洋（沖縄県教育庁文化課）、盛本勲（〃）、金城亀信（〃）、中山晋（〃）、新垣力（〃）、知念隆博（〃）、瀬戸哲也（〃）、當眞嗣一（沖縄県立博物館）、松川章（浦添市教育委員会）、黒住耐二（千葉県立博物館）、ほか多くの先生方からご指導ご鞭撻いただいた。記して謝意を表する。

３．発掘調査は今帰仁村教育委員会によって実施された。本報告の執筆は下記の11名であたり、もくじに文責を記した。なお、陶磁器の分類と本書の編集は金武の指導のもと宮城が中心となって行った。
金武正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー）
宮城弘樹・玉城靖（今帰仁村教育委員会文化財係）
与那嶺俊・具志堅亮（今帰仁村教育委員会文化財係臨時職員）
赤嶺信哉・喜納政英（株式会社イーエーシー）
樋泉岳二（早稲田大学非常勤講師）
高橋誠一（関西大学）・松井幸一・松僚平（同左大学院博士課程）

４．資料整理は下記のメンバーで行った。
上間 恵子　　松本 綾子　　玉城 亜紀　　玉城 静香　　中馬 直実　　山城留利子

５．現地での写真撮影は、金武、宮城、玉城、与那嶺が担当した。
遺物撮影は、玉城、与那嶺、具志堅が担当した。

６．出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会において保管する。

７．報告書の引用・参考文献は第Ⅴ・Ⅵ章については章末に、その他についてはⅦ章末にまとめて掲載する。また図表番号についても、第Ⅴ・Ⅵ章には章毎に連番としている。

も　く　じ

第Ⅰ章　序　言　　（宮城弘樹・玉城　靖）
第１節　調査に至る経緯 ・・ 2
第２節　保存と整備 ・・・ 2
第３節　保存と整備のための委員会 ・・ 3
第４節　調査体制 ・・ 4

第Ⅱ章　調査概要　　（玉城　靖）
第１節　調査地域 ・・ 5
第２節　調査経過 ・・ 5

第Ⅲ章　遺跡　　（玉城　靖・宮城弘樹）
第１節　位置と環境 ・・ 9
第２節　層　序 ・・・14
第３節　遺　構 ・・・16

第Ⅳ章　遺物　　（宮城弘樹・玉城靖・金武正紀・赤嶺信哉・喜納政英・樋泉岳二）
第１節　土器・・21
第２節　カムィヤキ・・21
第３節　瓦質土器・・・21
第４節　青磁・・21
第５節　白磁・・22
第６節　青花・・22
第７節　黒釉・・22
第８節　瑠璃釉 ・・23
第９節　黄釉・・23
第10節　褐釉陶器 ・・23
第11節　備前 ・・・23
第12節　タイ陶磁 ・・23
第13節　不明磁器質製品・・23
第14節　玉類 ・・・23
第15節　遊具 ・・・24
第16節　銭貨 ・・・24
第17節　金属製品 ・・・24
第18節　石器 ・・24
第19節　土製品・・・25
第20節　骨製品・・・25
第21節　貝類遺体 ・・・25
第22節　脊椎動物遺体 ・・25
第23節　炭化植物遺体 ・・25

第Ⅴ章　今帰仁城跡と首里城跡出土の陶磁器について　　（金武正紀）・・・・・・・・・・・・・・・40

第Ⅵ章　今泊の集落景観と保全　　（高橋誠一・松井幸一・松井僚平）・・・・・・・・・・・・・・・57

第Ⅶ章　総括　　（宮城弘樹）・・・80

図　版 ・・・83

第Ⅰ章　序　言

今帰仁城跡外郭城外北西区は、今帰仁城跡の城外の地区にあたる。この地域には今帰仁ムラ跡と呼ばれる集落が展開していたと想定されており、現在今帰仁ムラ跡という遺跡名称で発掘調査等が実施されている。本報告では平成16年度に実施されたこの今帰仁ムラ西区跡屋敷地５において検出された遺構、遺物についての調査成果を収録したものである。

第１節　調査に至る経緯

国指定史跡今帰仁城跡の近傍に駐車場や便益施設等を設置する計画が持ち上がった。目的は、史跡指定地内の駐車場撤去の代替として計画されたものである。事業は北部振興策事業によって今帰仁村が主体となって実施された。平成17年7月には整備を完了し今帰仁村グスク交流センターを開館させた。これら新たに設置された施設によって城内の駐車場が撤去され、史跡が機能していた往時の姿へと復元されつつある。他方、城外に設置された駐車場はこれまでの位置からはやや離れた場所に位置するところとなり、史跡までのアクセスが課題となった。これに対してその途中、即ち駐車場から平郎門へ向かう導線上に、史跡の理解を促すためのガイダンス広場を創出することが計画された。村では、北部振興策事業の一環として、今帰仁城跡の地形模型（S=1/100）を中心とするガイダンス広場を設け、今帰仁城跡および周辺地域の現況を一瞥できるように工夫した。このガイダンス広場の候補地となったの場所が今回調査対象となった地域である。

ガイダンス広場は城外に位置しているものの一部史跡内に所在している。また、この地下には遺構が確認されており、ガイダンス広場の整備は埋蔵文化財の保護と、史跡の活用の中ですり合わせを行うところとなる。最終的には史跡の活用に資することを目的に、発掘調査を実施し整備委員会をはじめとする関係機関の指導を得て行うこととした。なお、当初良好な遺構等が発見された場合はこれらの復元等を含めた整備も計画されたが、次章以降紹介するように調査によってプランが確認されるような遺構の発見には恵まれなかった。このため当該地域は遺構を確認し記録を作成、遺物を回収し埋め戻して調査を完了した。

第２節　保存と整備

外郭の整備事業は城外を東西、城内を東・西及び中央の概ね５つの地区に大別される。このうち今回整備対象となるのは、城外の西地区の一部である。この西地区は駐車場と近接しており、更にクバの御嶽の遙拝所である「サカンケー」が所在し、これより西側は狭い平坦地が広がりその先は急勾配の崖となる。狭い平坦地の地下には遺構が埋没していると考えられ、周辺遺跡で実施された調査結果を踏まえると往時の屋敷地に相当するものと考えられる。前節で紹介したとおり当該地域の整備の主目的は地形模型の設置にあった。このため、遺構完掘後は砂を敷き均し遺構の保護を計った後、地形模型の設置を行っている（写真1）。

第３節　保存と整備のための委員会

昭和56年に調査研究整備委員会を発足させ、年１回の整備委員会を開催。必要に応じて年数回の整備指導をいただいている。委員は次の通りである。なお、事業全体については、本中眞（文化庁)、島袋洋・盛本勲・新垣力（県文化課）のご指導をいただいた。

〈平成16年度〉

委 員 長　安原　啓示（京都造形大学客員教授・造園学）
副委員長　大嶺　英恭（今帰仁村助役・行政）
委　　員　冨田　裕次（海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画）
委　　員　赤嶺　和雄（設計同人ＧＡＮ・建築学）
委　　員　上原　　静（沖縄国際大学・考古学）
委　　員　金武　正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学）

〈平成19年度〉

委 員 長　安原　啓示（京都造形大学客員教授・造園学）
副委員長　與那嶺幸人（今帰仁村長・行政）
委　　員　冨田　裕次（海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画）
委　　員　赤嶺　和雄（設計同人ＧＡＮ・建築学）
委　　員　上原　　静（沖縄国際大学・考古学）
委　　員　金武　正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学）
委　　員　渡辺　美季（東京大学東洋文化研究所・歴史学）

写真1　地形模型の活用状況

第４節　調査体制

調査体制は今帰仁村教育委員会が主体となって実施している。事業全体の総括責任者は教育長、課長、補佐までが担い、調査担当者は宮城弘樹、玉城靖の専門職員による。なお、当該職員だけでは事業の遂行は困難であることから、補助員として与那嶺俊、具志堅亮らによって現場・資料整理の調査補助を行うと共に、随時発掘調査アドバイザーとして金武正紀に遺跡の総括的な評価などについてご指導をお願いする体制を整えている。また、実際の現場、資料整理については複数名の臨時職員にご尽力いただいた。

〈平成16年度・発掘調査〉

事業主体	今帰仁村教育委員会	
事業責任者	教育長	山城清光
	教育長代理	吉田克己
	社会教育課長	諸喜田展生
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原弘哲
事務総括	文化財係長	當山清巳
	文化財係主事	玉城　寿
調査担当者	文化財係専門員	宮城弘樹　玉城　靖
発掘調査アドバイザー		金武正紀
調査補助員（臨時職員）		与那嶺俊
発掘作業員（臨時職員）		新垣正司　大城ヒデ子　嘉数美保子
		城間宏子　新城豊子　新城　光　祖堅弘子
		玉城京子　田港朝史　仲宗根淳　仲宗根直美
		金城 慶一郎　仲田トミ子　仲原シズエ　仲原美代子
		仲尾次元太　平安兪美子　福居　慶　宮里初子
資料整理（臨時職員）		上間恵子　玉城美都　知念亜紀乃　仲里なぎさ
		西谷麻希子　松本綾子　与那嶺いずみ

〈平成19年度・資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会	
事業責任者	教育長	田港朝茂
	社会教育課長	松田朝雄
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原弘哲
事務総括	文化財係長	田港朝津
	文化財係主事	金城　研
調査担当者	文化財係専門員	宮城弘樹　玉城　靖
発掘調査アドバイザー		金武正紀
調査補助員（臨時職員）		与那嶺俊　具志堅亮
資料整理（臨時職員）		上間恵子　玉城亜紀　玉城静香　中馬直実
		松本綾子　山城留利子

第Ⅱ章　調査概要

第１節　調査地域

調査地域は今帰仁城跡の城外北西地区として実施した。当該地域は今帰仁城跡外郭の石積みの城壁直近にあたり、城壁に囲繞された空間の外側の地域にあたる。しかし城外からも集落遺跡と目される遺構が調査され成果を上げており、当該地域においても同様な成果が期待された。

対象とした北側地域は、次章で記すように、中生代三畳紀の石灰岩丘陵頂部にグスク、その緩斜面一帯に集落という構成となる。城外の北側地域はいわゆる集落遺跡（今帰仁ムラ跡）が立地する。この集落は17世紀前半頃にムラ移動し、現在の海岸部の集落へと展開しているものと考えられる(第４図)。このため遺跡所在地の現況は耕地もしくは原野となっている。しかし残念ながら調査地域の北側の大半は道路の敷設によって地下遺構も含めて大きく毀損しており、保存状況は良好であると言えないような状況であった。

対象となる地域の調査地区の設定については、これまで今帰仁城跡周辺遺跡で行ってきた座標を基準とする地区設定を基に実施した（第1・2図)。即ち、国土座標第15系（平成14年４月１日に施行された改正測量法に基づく）のX=76,800をM、76,790をN、以下南へ10m毎にO・P・Q･･･と英数字を振り、Z以降については、AA・AB・AC･･･として表記した。Y軸は、Y=42,500を原点10とし、10m毎に東へ11・12・13･･･として算数字を振り、その組み合わせによってM-10(X=76,800－Y=42,500)、AG-20（X=76,600－Y=42,600）のように呼称し、交点の杭はそれぞれ北西のグリッド区画を指示することとした。なお、調査区の設定や個々の遺物の取り上げについても国土座標系で取り上げ、ファイルを作成して整理している。

遺物の整理に関しては２つの事業によってそれぞれ実施されたために、今帰仁城跡外郭第１次調査（1次今外）と今帰仁城跡周辺遺跡（11次今周）を付しグリッド名と層序、遺構、遺物回収Noを付して注記することとした。

第２節　調査経過

実施した調査は史跡内外によって２つの事業で実施されている。史跡内は平成16年度の史跡整備事業の範囲で発掘調査を実施した。他方、史跡外については平成16年度に今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査（平成17年1月20日～平成17年3月31日）によって実施されている（第1表)。前者は今帰仁城跡外郭第１次調査として実施、後者は今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査第11次調査（平成17年1月20日～平成17年3月31日）として実施された。11次調査はⅢ区ａの東南側道路部分である。既に実施されたⅢ区ａの調査によって遺構の一部が道路部分まで延びていることが想定されたため、一度道路部分を撤去して確認調査を実施した。また、第１次外郭調査（史跡整備事業）の成果と合わせて、城外に展開した集落遺跡の一部であることが推定され、11次調査地域と第1次外郭調査地域を概ね西区屋敷地５として認識しうると考えられる。

平成16年度「史跡今帰仁城跡保存修理事業」2004年4月21日～2005年3月31日

今帰仁城跡第１次外郭調査（城外北西区）

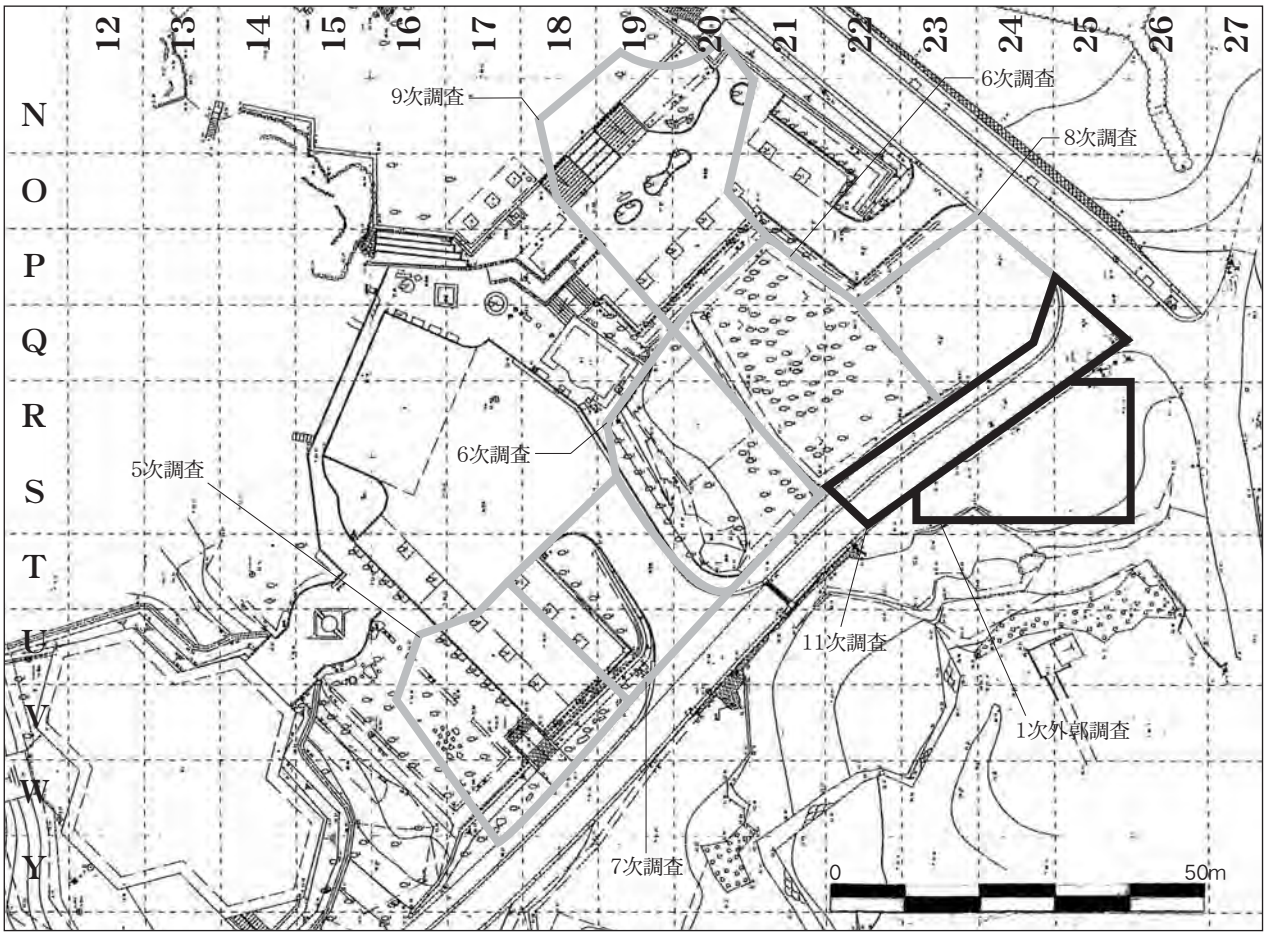
１次調査は史跡指定地内の屋敷地５とした地域約500㎡を対象として村教育委員会が実施した。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたった。まず土層確認のためのトレンチを入れ、断面を確認しながら掘り進めた。調査はトレンチ断面の図化後、全体を掘り下げていった。史跡内のため重機等は使用せず、すべて人力によって掘削を行っている。途中、周辺整備事業に伴う8・9次調査を行ったため本格的に調査を始めたのは12月に入ってからである。グスク時代相当の遺物包含層は表土層除去後速やかに行い、1月13日には包含層を除去し遺構検出面まで掘り下げ、並行して遺構平面の実測・所見を行った。遺構精査は1月17日より開始、3月31日に完掘し写真撮影を行い作業を完了している。

平成16年度「今帰仁村内遺跡発掘調査」2005年1月20日～2005年3月31日

第11次今帰仁城跡周辺遺跡調査

11次調査はⅢ区aの東南側道路部分に当たる。また1次外郭調査の北側で隣り合う地区の為（史跡外）、1次外郭と並行して作業を行っている。道路敷下では約200㎡を対象とした。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として与那嶺俊があたっている。当該地区は道路下であった為に重機による掘削をかなり受けていた。しかし重機掘削を受けなかった低い位置において土留め石積みを確認することができた。残存していた遺構や破壊を受けた箇所は屋敷地３と屋敷地５の境界にあたる。1次外郭調査と同様、3月31日に完掘し写真撮影を行い作業を完了している。

なお一部については4月25日まで実測・遺構精査の為、補足調査を実施している。



第1図　今帰仁城跡周辺遺跡調査箇所位置図（S=1/1000）

第2図　発掘調査箇所位置図（S =1/2000）

		史跡整備事業等に伴う発掘調査				今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査				
年度	西暦	事業名	調査地区	調査面積	期間	調査	調査地区	調査原因	調査面積	期間
昭和55年	1980	第１次発掘調査	志慶真門郭（２区、３区Ｂ（西半分））	約200m²	9/1～12/22	0次	周辺遺跡	表採、持ち込み資料等		
			旧道	約20m²	〃					
昭和56年	1981	第２次発掘調査	志慶真門郭（１区、４区、５区南半分）	約200m²	9/1～12/24					
昭和57年	1982	第３次発掘調査	志慶真門郭（３区Ａ、（東半分）５区、６区）	200m²	8/23～10/27					
		第４次発掘調査	主郭（俗称本丸）	約500m²	10/29～12/18					
昭和58年	1983	第５次発掘調査	大隅郭	約200m²	10/5～2/9					
		第６次発掘調査	主郭（俗称本丸）		10/31～2/29					
昭和59年	1984	第７次発掘調査	主郭（俗称本丸）		8/13～1/22					
昭和60年	1985	第８次発掘調査	主郭（俗称本丸）		9/25～12/9	1次-1	西区	重要遺跡確認	35箇所（152m²）	1/21～3/31
昭和61年	1986	第９次発掘調査	主郭（俗称本丸）		11/28～12/2	1次-2	東区・ミームングスク・シニグンニほか石積み遺構	重要遺跡確認	踏査	12/16～1/17
昭和62年	1987	主に整備・資料整理								
昭和63年	1988	主に整備・資料整理								
平成元年	1989	主に整備・資料整理								
平成2年	1990	主に整備・資料整理	主郭東側城壁（２次）写真測量に伴う崩落石除去（直営）	約40m²						
平成3年	1991	主に整備・資料整理								
平成4年	1992	主に整備・資料整理								
平成5年	1993	主に整備・資料整理								
平成6年	1994	志慶真門郭東側石積基礎調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約6m²	9/12～9/13					
平成7年	1995	志慶真門郭東側石積土質調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約20m²	9/13～1/13					
平成8年	1996	志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部北側アザナ調査	約20m²	9/2～9/14					
		志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部南側アザナ調査	約20m²	10/7～10/19					
平成9年	1997	志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約2m²	6/25～9/12					
		志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約5m²	2/16～3/24					
平成10年	1998	外郭石積遺構調査	外郭西地区石積み遺構調査	約10m²	5/11～7/29					
平成11年	1999	志慶真門外壁遺構調査	志慶真門	約10m²	4/13～2/29					
		階段遺構確認補足調査	主郭西側階段遺構	約3m²	9/30～10/1					
		主郭東側石積遺構確認調査	主郭東側調査（３次）	約10m²	3/17～3/26					
平成12年	2000	主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（４次）		11/13～2/22					
		大隅城壁修理工事に伴う事前確認調査	大隅城壁調査	約10m²	9/26～3/31					
平成13年	2001	主郭東側崩落石撤去工事に伴う立会調査	主郭東側調査（５次）		9/21～12/19					
平成14年	2002	主郭東側城壁内壁試掘調査	主郭東側調査（６次）	約40m²	9/2～9/20					
		主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（７次）		2/6～3/27					
平成15年	2003	主郭南側城壁崩落石撤去	南側城壁調査（１次）		9/1～10/31	2次	西区Ⅰ区・Ⅱ区ｂ	公園整備（記録保存）	1300m²	4/24～11/7
						3次	ハラクブ	公園整備（範囲確認）	41箇所（5,000）	5/14～7/25
						4次	東区（1・7区）	遺跡範囲確認	2地点（30m²）	9/24～10/28
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	Z-３０	8m²	9/30～10/1	5次	西区Ⅴ区・Ⅳ区の一部	公園整備（記録保存）	400m²	10/27～1/7
						6次	西区Ⅲｃ・Ⅳ区（旧称Ⅲd）	公園整備（記録保存）	800m²	12/8～2/25
						7次	西区Ⅳ区	公園整備（記録保存）	400m²	1/14～1/26
平成16年	2004	**第１次外郭発掘調査**	**城外北西区Ｒ-23～26、Ｓ-23～26**	**400m²**	**4/21～3/31**	8次	西区Ⅲa	公園整備（記録保存）	400m²	5/13～11/10
						9次	西区Ⅲｂ	公園整備（記録保存）	600m²	5/13～12/4
		工事に伴う立会調査	主郭東南アザナ調査		11/12～3/21	10次	西区Ⅱa	公園整備（記録保存）	200m²	12/21～1/21
						11次	**道路敷下**	**公園整備（記録保存）**		**1/20～3/31**
		墓撤去立会調査	U-２４	9m²	2005年4月	12次	東区（7区）	遺跡範囲確認	200m²	12/2～3/31
平成17年	2005	第２次外郭発掘調査	試掘、東区Ⅸ区Ｒ-２８～２９、Ⅲ区･-３３ほか	800m²	8/9～3/31	資料整理				4～3月
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（２次）南西アザナ基礎調査	10m²	6/22～8/22					
		主郭東側工事に伴う立会調査（工事）	主郭東側調査（８次）		1/26～3/31					
平成18年	2006	第３次外郭発掘調査	東区Ⅲ・Ⅳ区U-33～36、T-33～36ほか	1000m²	4/24～3/30	補足	大川原遺跡	法面崩落（記録保存）	20m²	4月～3月
		第４次外郭発掘調査	外郭東区城壁基礎調査	200m²	4/24～3/30	資料整理				4月～3月
						確認	今泊集落内	遺跡範囲確認	4m²×3箇所	6/27～6/29
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（３次）上段部基礎調査	20m²	5月～7月					
平成19年	2007	第５次外郭発掘調査	東区Ⅵ区Ｓ-33、Ｒ-33・34、Ⅷ区Ｑ30～33ほか	1000m²	4/23～3/30	13次	親泊ムラ跡（4983番地）	遺跡範囲確認	43m²	9/19～10/10
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（４次）下段部基礎調査	20m²	5月～6月	14次	志慶真ムラ跡（4853番地ほか）	遺跡範囲確認	32m²	12/1～12/28

第1表　今帰仁城跡及び周辺遺跡のこれまでの調査

第Ⅲ章　遺跡

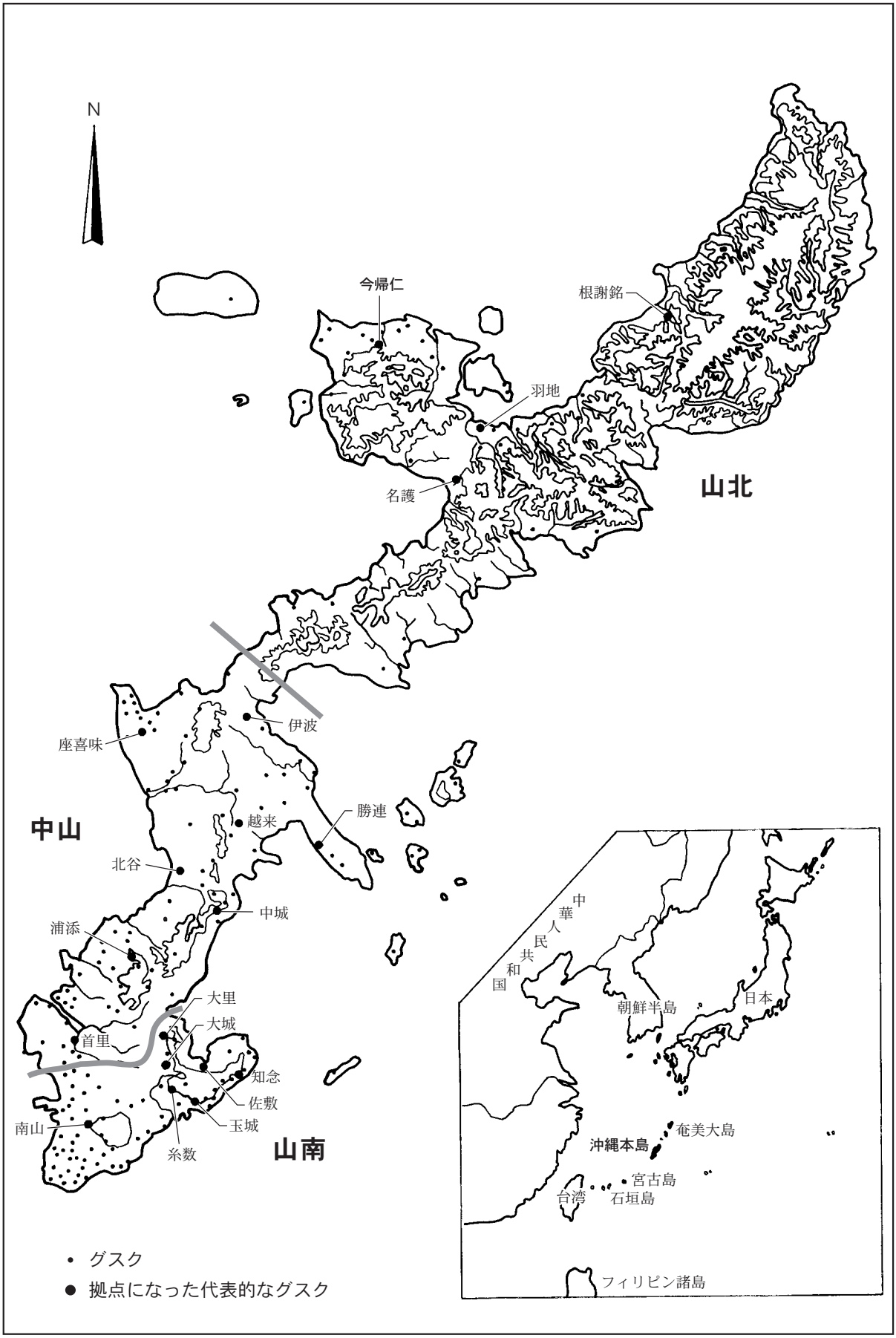
第１節　位置と環境

今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,500人の自治体である。本島北部地域一帯は中南部に比して全体的に山地主体となっているため「山原（やんばる）」と呼称されている。今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城地の立地する丘陵は標高約100mを計り、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、与論島を望むことができる良所にある。本部半島の地形的特徴は概して山地部にみられる今帰仁層・本部層（与那嶺層）という中生代初期頃に堆積した地層群と、低地・海岸部にみられる琉球層群の２つのブロックに大別される。今帰仁層群は中生代三畳紀に堆積した地層で、今帰仁城跡の立地する丘陵一帯から本部町の大堂・浜元付近までの地域に広がっている。特に今帰仁城跡の立地する北西部には、結晶化が進んで硬質、厚さが平均して20cm前後で割れやすい特徴の層状石灰岩が基盤岩となる。

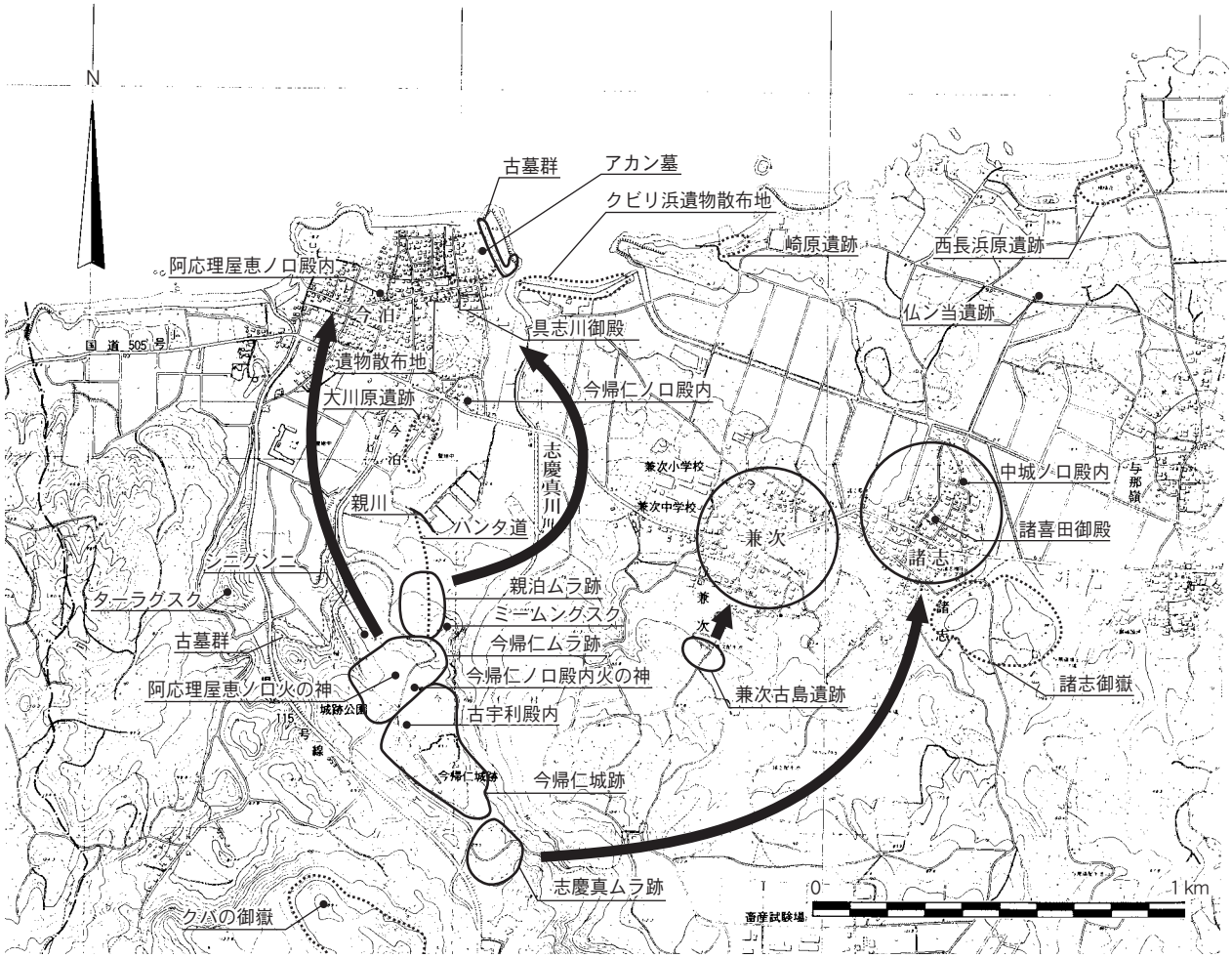
一方、今帰仁城跡周辺遺跡の名称はこの関連遺跡群の総称である（第４図）。この今帰仁城跡の周辺には集落遺跡、拝所、御嶽、石積み遺構など今帰仁城跡を中心に展開する。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、面積は7.9ha（史跡指定面積）の広さを持つ大規模なグスクである。最高所の標高は約100mとなり、基盤岩の中生代石灰岩の丘陵上に位置する。丘陵の頂上部が主郭、大庭、御内原となり、その東は70～80mの深い渓谷をつくり天然の要害となる。東側の谷筋は志慶真川が蛇行して流れ、西側の谷筋はタキンチャガーラが流れ東シナ海に注いでいる。今帰仁城跡御内原の郭に立つと志慶真川の渓谷を脚下に、遠く伊是名島、伊平屋島、伊江島、古宇利島を望み、晴れた日には遠く与論島を眺望することができる。今帰仁城跡の城壁は立地する基盤岩の灰色の硬い石灰岩を積み上げた石垣で、県内でも有名なグスクである首里城跡、中城城跡、勝連城跡などの白い琉球石灰岩の石垣とは雰囲気が異なる。今帰仁城跡の石垣の総延長は約1.5㎞を計り、屏風状に曲線的に積み上げられている。城壁で囲まれた空間は先の主郭・大庭・御内原以外にもカーザフ、大隅、外郭、志慶真門郭など概ね10の郭からなり、石畳や石段で各郭は結ばれている。10の郭のうち最も北側にある広い郭が外郭である。城外から外郭へのアクセスを行ったと考えられる門の部分は道路の開削などがあって不明瞭ではあるが、概ね現在道路に分断された地点にあるものと考えられる。

今帰仁城跡の歴史は、琉球が３つの勢力（第3図）に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代に山北（北山）として、中国明代に琉球国中山王、山南王とともに記録に登場する。これまでに確認されている史料をたよりに概述すると、最古史料の一つに『明実録』があげられる。太祖實録巻一五八・洪武一六年一二月庚午朔（1383年12月15日）「琉球國山北王帕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。賜衣一襲。」と記され、山北王「帕尼芝」の名称が記述されるのを似って嚆矢とするようである。以後記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王・帕尼芝が６回、山北王珉が１回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたようである。

しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年（1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、城地には中山王の子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部やんばる地域を管理している。それは1665年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる。この監守時代の間、1609年には薩摩軍によるいわゆる琉球入りがあり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記「琉球渡海日々記」に



第３図　今帰仁城跡位置図



第４図　今帰仁城跡周辺の遺跡分布図(S=1/20,000)

第５図　今帰仁城跡周辺の現況地積図と明治の地積図の重ね図

記されている。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とあり、実質的な廃城は監守引き揚げよりも早い、1609年頃にあったと考えられている。

今帰仁城跡は昭和47（1972）年には沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、昭和55（1980）年より今帰仁村が主体となって環境整備事業が進められている。この中で、平成12（2000）年には世界遺産として登録されたことによって、周辺地域が景観保全地区に指定され、歴史公園として活用されている。

指定されたのは今帰仁城跡であるが、城郭外は景観保全地区に指定している。今帰仁城跡の周辺には集落遺跡や石積み遺構、現在も参拝地として利用される拝所が点在している。これらの遺跡群を総称して「今帰仁城跡周辺遺跡」と呼称している。特に今帰仁城跡北側一帯には区画する石積みなどを残す良好な集落遺跡が展開していることが確認されており、これまで重要遺跡確認調査や駐車場建設等に伴う緊急発掘調査が実施され、その性格や時間的位置づけが確認されている。機能していた時代はおおよそ今帰仁城の機能していた時代に該当し、特に14世紀後半～16世紀の遺物を多出していることから盛期は三山鼎立の時代から監守の時代に展開した集落遺跡と考えられている。今回調査された地区で検出された遺構及び遺物群は、これらの集落遺跡の一部と考えられる。

なお、今帰仁城跡の内外には多くの祭祀施設が所在している。具体的には今帰仁城跡内にある城内の御嶽、カラウカー、古宇利殿内、レコーラのウーニーや、城外ではクバの御嶽、あるいはクバの御嶽への遙拝を行うサカンケーがそれである。「サカンケー」は「参詣」もしくは「坂迎え（あるいは酒迎え）」という語意と解され、南西方向にあるクバの御嶽を遙拝するための香炉がおかれており、今回の調査地点に近接する拝所の一つである。

発掘される遺構や遺物による歴史空間の復元とともに、これらの現在確認される祭祀空間や連続する土地利用との関係を探ることも重要な視点であると考えられる。今帰仁城跡の周辺には、幸い大規模な開発によって失われることなく、景観が今日まで多く残されていると考えられる。このことと合わせて今帰仁城跡の立地する今泊（旧今帰仁・親泊）をはじめ、具志堅（旧具志堅・上間・真部）、諸志（旧諸喜田・志慶真）などの村落祭祀の重要な参拝地であるとともに、「今帰仁上り」と称される拝所・旧跡めぐりの重要な参拝地となっていることは重要である。

時代区分				今帰仁城跡主な出来事
先史	貝塚時代			
古琉球	グスク時代 三山時代		I	13世紀末　今帰仁城の土地に人が住みはじめる。
				1314年　この頃沖縄本島は山北、中山、南山の３つの勢力に分かれる。
			Ⅱ期	1322年　帕尼芝、中北山を滅ぼし山北王となると伝わる。
		山北王時代	第Ⅲ期	1383年　山北王帕尼芝、明国に使者を派遣し交易を行う（６回）。
				1395年　山北王珉、明国と交易をする（１回）。
				1396年　山北王攀安知、明国と交易をする（11回）。
				1416年　攀安知、尚巴志に滅ぼされる（一説には1422年）。
		第一監守時代	第Ⅳ期	1422年　尚巴志、次男の尚忠を山北（今帰仁）監守として派遣する。
	第一尚氏時代			1429年　南山王が中山に滅ぼされ、三山が統一される。
				1440年　山北監守の尚忠が尚巴志を継いで王に即位する。
				尚忠を継いで弟の具志頭王子が山北監守になったという。
				1469年　第一尚王統が滅び、山北の第一監守も離散する。
				山北監守に大臣を交代で派遣する。
	第二尚氏時代（前期）	第二監守時代（前期）		1490年　その頃、尚真王の第三子の韶威を山北監守に派遣する。
近世琉球				1609年　薩摩軍の琉球侵攻で今帰仁城は焼き討ちにあい克祉死亡する。
				その頃、今帰仁村と志慶真村が城下に移動したため、今帰仁城内にいた山北監守（今帰仁按司）も城下へ移り住む。
	第二尚氏時代（後期）		（後期）	1665年　山北監守（今帰仁按司）は今帰仁から首里に引き揚げる。
		今帰仁間切時代（前期）		1742年　蔡温による今帰仁間切の竿入（御支配・検地）がなされる。
				「今帰仁旧城図」が整えられる。
				1749年　今帰仁城内に山北今帰仁城監守来歴碑記が建立される。
近代沖縄	沖縄県			1872年　琉球国が琉球藩となる。
				1879年　沖縄県となる。
			（後期）	1882年　上杉県令今帰仁城跡を訪れる。
		村政時代（前期）		1915年　今帰仁城跡の管理を今泊に委任する。
				1924年　北山城参詣道が完成する。
				1929年　北山今帰仁城趾碑建立される。
				1930年　今帰仁城跡の入口に鳥居がつくられる。
				1943年　北山神社の建設計画がなされる。城門からの道が壊される。
				1945年　沖縄戦、沖縄県は壊滅状態。アメリカ軍の統治下に置かれる。
戦後沖縄	アメリカ統治時代	村政時代（後期）		1952年　旧正月二ヶ字住民総出で三日間、城跡の大隅を開拓して蜜柑の台木を1400本植える。
				1955年　今帰仁城跡、記念物として琉球政府から指定を受ける。
				1962年　今帰仁城跡、琉球政府から有形文化財の指定を受ける。
				1962年～65年　琉球政府文化財保護委員会によって門（平郎門）から展望台までの石垣が修復される。
				1972年　本土復帰。今帰仁城跡、国の史跡として指定される。

時代区分		日本の歴史事象主な出来事
古代	平安時代	1167年　平清盛、太政大臣となる（平氏政権樹立）
		1185年　平氏滅びる
中世	鎌倉時代	1192年　源頼朝、鎌倉幕府を開く
		1333年　鎌倉幕府滅ぶ
	南北朝	1338年　足利尊氏、室町幕府を開く
		1392年　南北朝統一
	室町時代	1404年　明との勘合貿易始まる
		1467年　応仁の乱。戦乱が全国に広がる
	戦国時代	1543年　ポルトガル人、種子島に漂着（鉄砲伝来）
		1560年　織田信長、今川義元を討つ
		1573年　室町幕府滅ぶ
		1582年　信長死す（本能寺の変）
	安土桃山	1590年　豊臣秀吉全国統一
		1592年　秀吉、朝鮮に出兵（文禄の役）
		1600年　徳川家康、石田三成ら、西軍を破る（関ヶ原の戦い）
		1603年　家康、江戸幕府を開く
近世	江戸時代	1639年　鎖国の完成
		1825年　外国船打払令
		1853年　ペリー提督、浦賀に来航
		1860年　桜田門外の変
		1867年　大政奉還
		1868年　明治維新
		1871年　廃藩置県
近代	明治	1889年　大日本帝国憲法発布
		1894～95年　日清戦争
		1904～05年　日露戦争
		1910年　日韓併合
	大正	1914年　第一次世界大戦
		1923年　関東大震災
	昭和	1931年　満州事変起こる
		1937年　日中戦争起こる（蘆溝橋事件）
		1941～45年　太平洋戦争
		1945年　ポツダム宣言受諾
現代		1946年　日本国憲法公布
		1964年　東京オリンピック開催
		1970年　万国博覧会、大阪で開催

第1表　今帰仁城歴史年表

第２節　層序

屋敷地５全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のⅠ層で、この下にグスク時代の遺物包含層であるⅡ層が堆積する。特徴的なのはⅡ層の下層に堆積するⅢ層が造成層的な堆積層として観察された点である。また、このⅢ層の下部にはもう一枚遺物包含層（Ⅳ層）が認められる。なお、最下層のⅤ層は所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で地山となる。

Ⅰ層：【褐色土層】現代の工事等の造成層・旧表土層・耕作土層・ほか。Ⅰ層は腐植土からなる表土層、耕作土層で調査地のほぼ全域が耕地であったために形成された層である。耕耘が繰り返されるため地下深くに耕耘が及ぶ地域では下位の包含層や地山を掘削しており、特に北側では道路造成に伴って深く抉られている形となる。時期的には近年まで耕作が繰り返されていたと考えられガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。

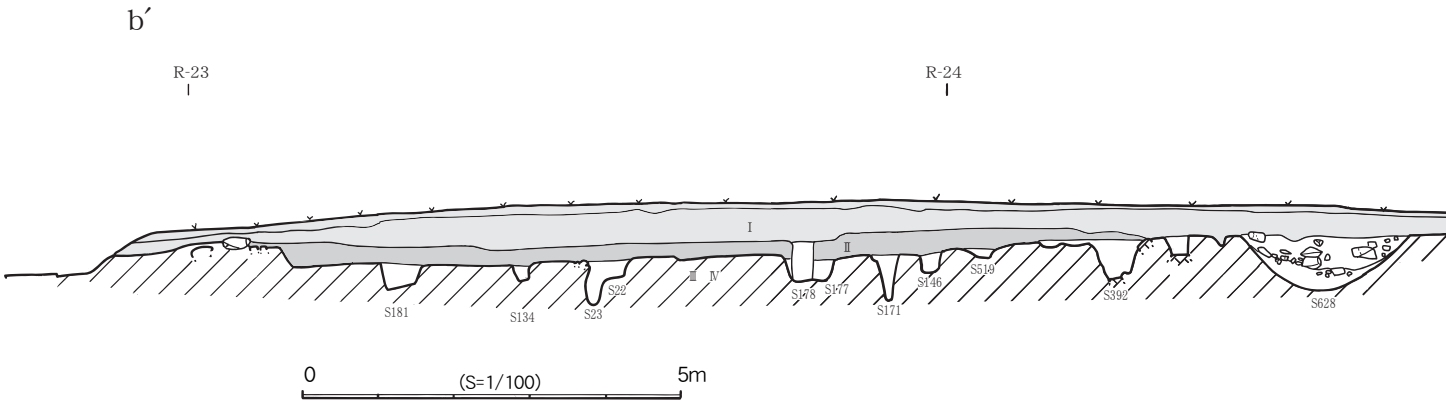
Ⅱ層：【黒褐色土層】当該遺跡の遺物包含層で、遺跡全体を覆う状況にはなく、北側に一部残る程度である。

第6図　基本層序柱状図

Ⅲ層：【褐色土層】当初地山とも判然としないような堆積層で、北側の道路によって削平された断面によって確認することができた造成層である。当該地域一帯を平坦にするように人為的に造成されたいわゆる造成層と考えられ、断面では、互層となる箇所が認められる。

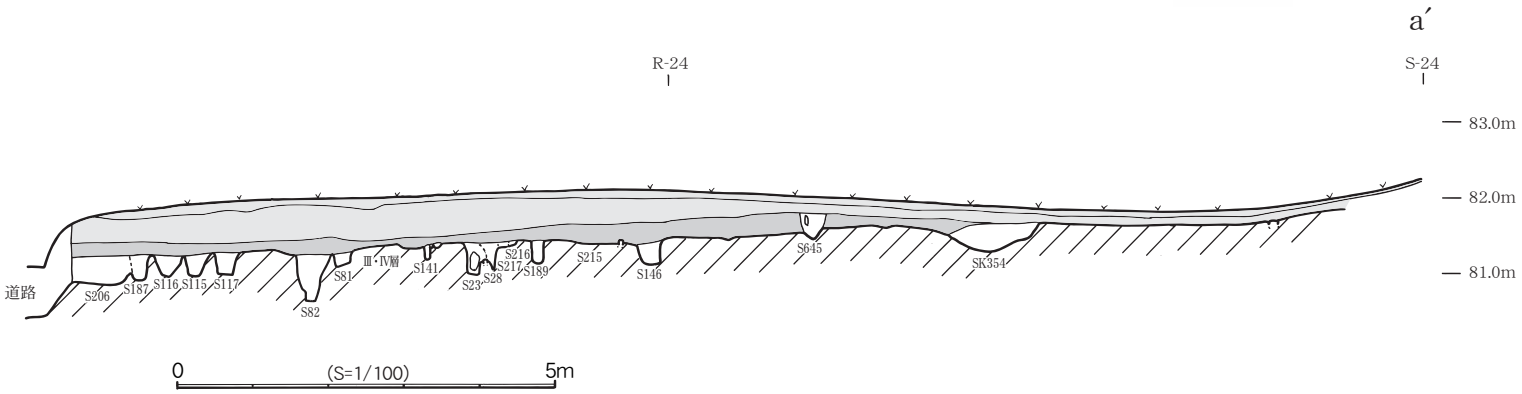
Ⅳ層：【黒褐色土層】当該遺跡の形成期の旧表土層と考えられ、Ⅲ層の下に薄く認められる遺物包含層である。遺跡の調査はⅢ層の上面までで、Ⅲ層上面で検出された柱穴等遺構の完掘をもって記録保存としたため、Ⅳ層は北側で壊された部分における一部の発掘で留まっている。

Ⅴ層：【赤褐色土層・石灰岩】地山。Ⅴ層は地山で明るい赤褐色の土層である。古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭している。

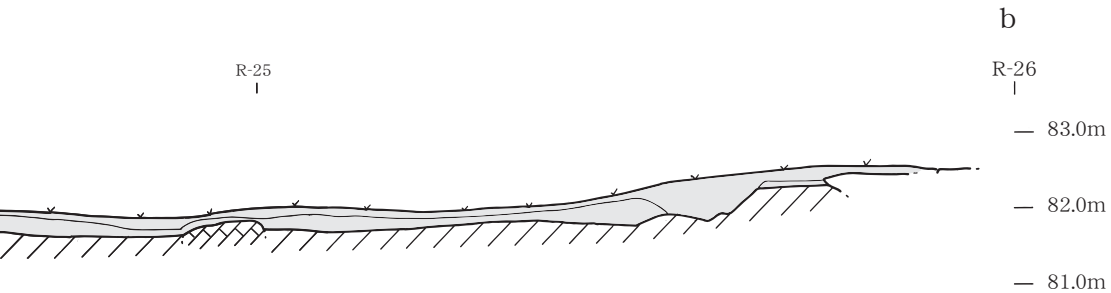


第9図　屋敷地5　土層断面図

第7図　屋敷地5　平面図（土層断面図位置図）



第8図　屋敷地5　土層断面図



第３節　遺構

屋敷地５は地積では今泊4787（984㎡）及びその周辺地域が該当する。大部分が今帰仁城跡の史跡地域にあたる。残念ながら北側半分は道路工事によって過去に大きく破壊されている。このため、建物プランの把握には至っていない。

検出された遺構は柱穴453基、土坑５基、集積を含む土坑が４基認められる。遺構のほぼ全てが地山もしくはⅢ層上面において検出された遺構である。この他に西側に石積み遺構が１基、北側の屋敷地３との境界となるラインに石積みが１基認められるが、それぞれの年代については特定できるような検出状況でなかったため、暫定的な所見となる。詳細は後述する。今回の調査は残念ながらこれから復元できた建物跡は無く、建物の様子は判然としない。それでも調査地域全体を俯瞰すると、柱穴の分布はR-24の地域に密に分布し、北側と西側の石積み遺構に区画されていることから、当初北側に傾く地形だったところに、北側の屋敷地３との境界ラインに土留め状に石積みをつくり、Ⅲ層の造成層を敷き均し、この上平坦地に居住地がつくられ、R-24の柱穴密集地域に建物が配置され数回にわたって建て替えがおこなわれたものと想定される。

種類	遺構数
・掘立柱建物跡	０基（※プランの推定を行えるものが無かった）
・柱穴	453基
・土坑	５基（SK100,SK354,SK275,SK313,SK206）
・集石を含む土坑	４基（SK628,SK521,SK184,SK627）
・土留め石積み	１基（SR648）
・石積み遺構	１基（SR647）

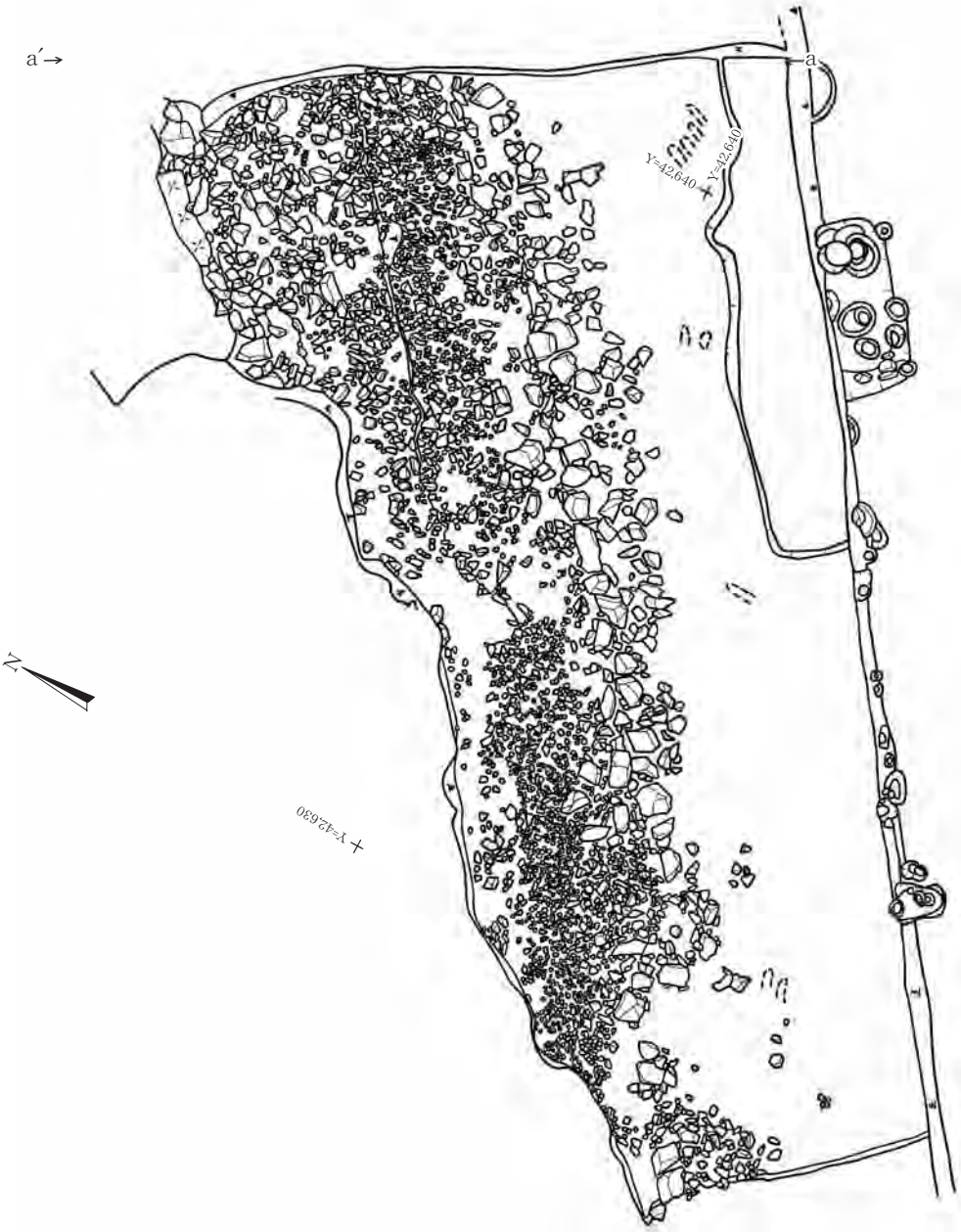
第10図　屋敷地5位置図

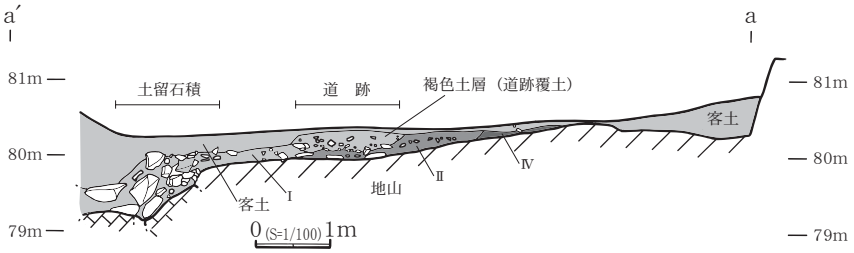
SR1
N
Y=42,640
Q-24
R-24
Q-25
R-25
Y=42,650
X=76,760
SK313
Y=76,750
R-25
S-25
R-26
S-26
SK521
SK354
SK628
0
(S=1/100)
5m

〔名称〕 屋敷地３と屋敷地５の境界：SR１（土留石積遺構）
〔位置〕 今帰仁城跡城外道路下（R-23・R-24・Q-24）
〔検出面〕 Ⅱ層
〔遺構構成〕 区画土留石積・道跡１基
〔規模〕 東西約16m×南北5m×高さ1～1.3㎝
〔所見〕 屋敷地５と屋敷地３を区画すると同時に土留めの機能も有した石積み遺構。調査地区の客土を剥ぎ取ると北側半分から東西に延びた土留石積遺構を確認。調査地区外まで延びると考えられるため全体は不明。幅は約5mあるが南側が道路敷きによる破壊を受けているためもう少しあったと思われる。高さは約１～1.3m。屋敷地５と屋敷地３の遺構検出面高低差が約1.5～２mあるため、標高の低い屋敷地３付近は遺構の破壊は免れている。

石積みは比較的大きい40～50㎝大の古期石灰岩を雑に積み上げ、裏込めは一回り小さい礫を用いる。遺構上面（褐色土層）では数㎝大の礫を大量に敷き詰め、またその南側では縁石のように比較的大きい礫が東西に雑然と配されている。明治36年の地積図（第5図）に載っている道跡であると解される。

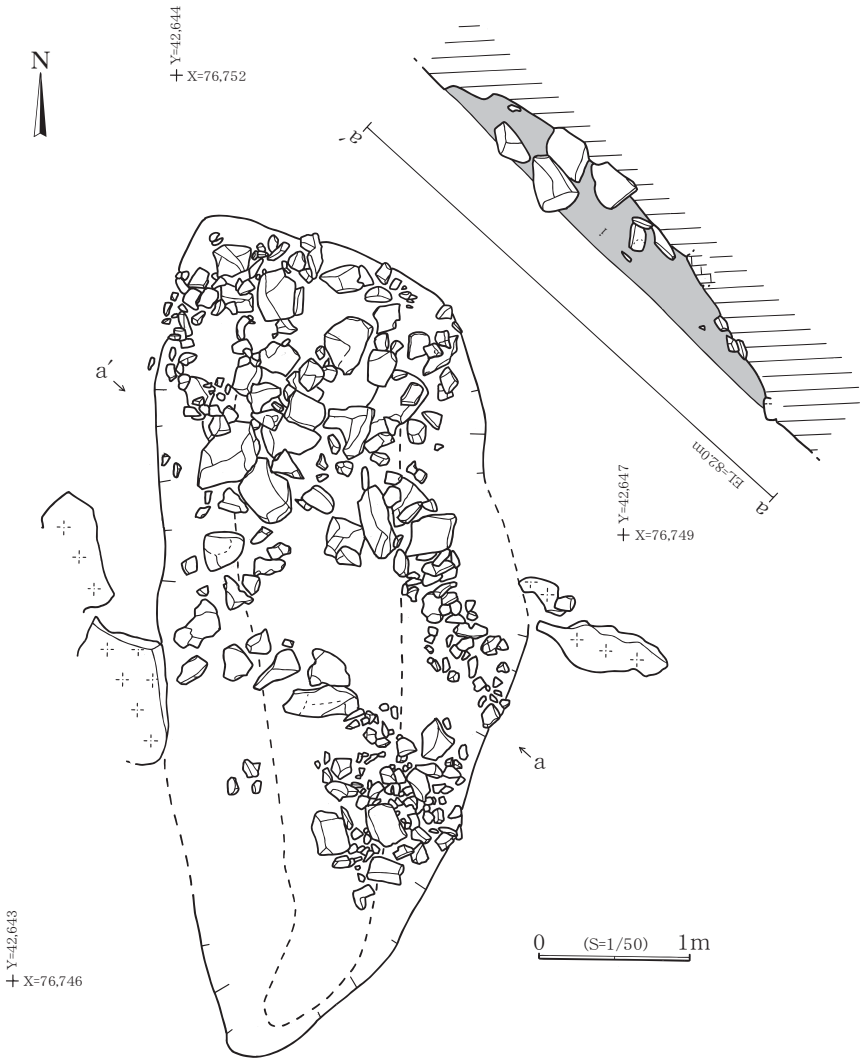
〔遺物〕 青磁碗（4・15～17・24・42・46・48・52)、粗製青磁（64・66)、青磁皿（73・77・78・89)。





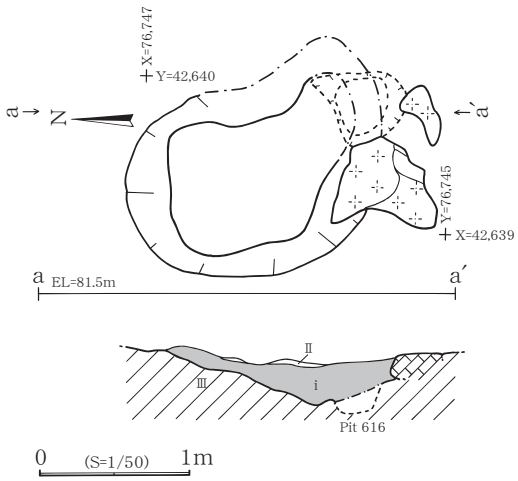
第12図　屋敷地5　遺構詳細図（SR1）

〔名称〕 屋敷地５：SK628（集石を含む土坑）
〔位置〕 今帰仁城跡城外西区（R-25・S-25）
〔検出面〕 Ⅲ層（造成層上面）・Ⅴ層（地山）
〔遺構構成〕 土坑１基
〔規模〕 長軸約550cm×短軸210cm×深さ約40cm
〔所見〕 屋敷地５南側に所在する溝状の落ち込み。旧称SX01不明の集積遺構としたが、後日628の番号を付して整理する。土坑底面は地山、広く長い溝状の遺構である。遺構はⅠ・Ⅱ層を掘り下げた造成層面で検出された。礫を多く含む性格不詳の土坑で、切り合い関係は柱穴635を切っている。
〔遺構内堆積層〕 遺構内の覆土はi層褐色（Hue7.5YR4/4）の土層。
〔遺物〕 土器（3）、鉄製品（210）、（211）、土製品（218）など



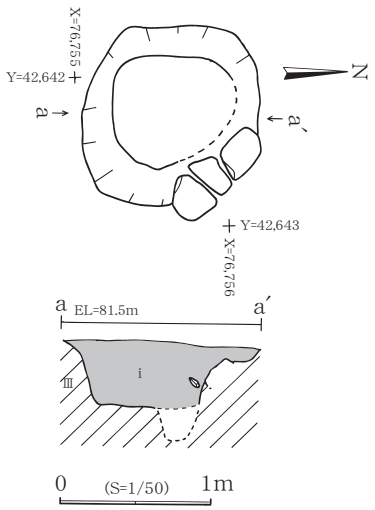
第13図　屋敷地5　遺構詳細図（SK628）

〔名称〕屋敷地５：SK354（土坑）
〔位置〕今帰仁城跡城外西区（S-24）
〔検出面〕Ⅲ層（造成層上面）
〔遺構構成〕土坑１基
〔規模〕長軸約180cm　短軸約121cm　深さ約22cm
〔所見〕屋敷地５南側に所在する楕円形の浅い落ち込み。土坑底面は不定形で、平面観が楕円形。遺構はⅠ・Ⅱ層を掘り下げた段階でⅢ層（造成層面）で検出された。遺構は柱穴311・312に切られる。
〔遺構内堆積層〕i層単一層暗褐色（Hue7.5YR3/3～3/4）炭を微量に含む。
〔遺物〕 龍泉窯系青磁碗（62）、ほか



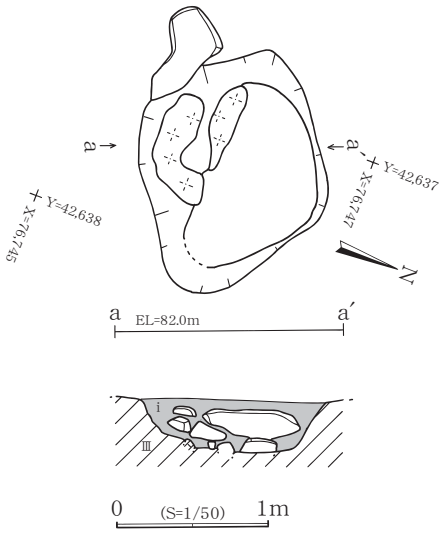
第14図　屋敷地5　遺構詳細図（SK354）

〔名称〕屋敷地５：SK313（土坑）
〔位置〕今帰仁城跡城外西区（R-25）
〔検出面〕Ⅲ層（造成層上面）
〔遺構構成〕土坑１基
〔規模〕直径約125cm（長軸約133cm／短軸約118cm）×深さ約40cm
〔所見〕屋敷地５ほぼ中央に所在する円形の落ち込み。土坑底面は平坦となる。平面観がほぼ円形の土坑。遺構はⅠ層を掘り下げたⅢ層上面（造成層面）で検出された。
〔遺構内堆積層〕i層単一層暗褐色（Hue7.5YR3/3～3/4）の堆積層に微量に炭が含まれる。
〔遺物〕 青磁盤（95）、ほか



第15図　屋敷地5　遺構詳細図（SK313）

〔名称〕屋敷地５：SK521（集石を含む土坑）
〔位置〕今帰仁城跡城外西区（S-24）
〔検出面〕Ⅲ層（造成層上面）・Ⅴ層（地山）
〔遺構構成〕土坑１基
〔規模〕長軸約160cm×短軸130cm×深さ約30cm
〔所見〕屋敷地５南西側に所在する円形の落ち込み。土坑底面は地山・岩盤となる。覆土には礫が多く含まれており、遺物も少量含まれている。遺構はⅠ層を掘り下げた地山面で検出された。遺構は柱穴617と切り合い関係にあり、切られている。
〔遺構内堆積層〕i層単一層、大小礫を含む暗褐色



第16図　屋敷地5　遺構詳細図（SK521）

第Ⅳ章　遺物

今回出土した遺物は、第7表に示した。陶磁器類は胴部を除く主要な部位で1,271点回収されており、推定個体数432個体が得られている。過去に調査された屋敷地１～４が総じて1000個体を出土していることを考えると出土量は多くない。これは、当該地域の北西側が過去の道路工事によって破壊され滅失していたことに起因すると思われる。本報告書における分類については青磁白磁については「沖縄における貿易陶磁研究」（瀬戸ほか2007）の分類記号を用い、既往の報告書（今帰仁城跡発掘報告書Ⅰ・Ⅱ）の分類を併記している。以下出土遺物の詳細を紹介する

第１節　土器（第17図-1～3）

土器はいずれもグスク時代に属するもので、総じて粘板岩を混和材に用いる特徴をもつ。1は比較的短頸の壺形土器口縁部資料である。2・3は器種不明の底部資料である。

第２節　カムィヤキ（第17図-4～6）

４・５はカムィヤキ口縁部の破片資料で、4はやや厚手、５は４に比して薄造りで外面に細い工具による沈線文が線刻されている。モチーフは不明。６は胴部破片資料で薄作りで内面に当て具の痕が明瞭に残る資料である。4・5はカムィヤキＢ群、６はカムィヤキＡ群に該当するものと考えられ、後者資料はⅣ層からの出土である。

第３節　瓦質土器（第17図-7・第22図-152）

7は瓦質土器と考えられる口縁部資料である。全体的に器面保持は良好である。内傾する鉢形器形の口縁部で、火鉢等の器種と推測される。152は擂鉢の胴部資料で瓦質の厚手の体部内面に７本の櫛目が認められる。

第４節　青磁（第17図-8～34、第18図、第19図、第20図-93～101）

碗：8は櫛描文（同安窯系Ⅰ類）の胴部小片資料。9・10は劃花文碗（龍泉窯系Ⅰ類）の口縁部資料である。10は内面に僅かながら文様が認められるがモチーフは不明。11～15はいわゆる鎬蓮弁文碗（龍泉窯系Ⅱ類）の資料で、11～14の口縁部資料は体部に鎬蓮弁文を描く。15は体部の文様は判然としないが、角高台の特徴をもつことからⅡ類判断した。素地は灰色で釉の発色は不良。16は畳付釉剥ぎとする青磁碗の小片で暫定的にⅢ類として判断しておく。17は龍泉窯系Ⅳ類の底部資料で外底は無釉畳付までの施釉となり、外体面には線刻が認められることから蓮弁が描かれているものと考えた。18は型造りによって内体面に蓮弁文を配する碗で、口唇部に刻みを入れ輪花状とする良品である。素地は白色、釉の発色も比較的良い。19～22は外面に無鎬の蓮弁を配する資料でいずれも口縁部が直口する資料である。19は口縁帯に沈線を二条配する。23は外反碗の外体面に蓮弁を、内面に、モチーフ不明の文様を施す資料で、焼成不良で釉の発色もやや悪い資料である。24は口縁部が直口する無文碗。25～31は口縁部が外反する無文碗である。いずれもⅣ類からⅥ類の特徴を有する資料である。底部資料がないので判然としないが、18・19はⅣ類、20～22はⅣ～Ⅴ類、23はⅤ類、24はⅤ～Ⅵ類、25～27はⅤ類、28～30はⅣ～Ⅴ類と考えられる。32～34は青磁碗の底部資料でⅣ～Ⅴ類の特徴を持つ資料群である。

35・36はⅤ類段階の底部資料で、口縁を欠く。体部に蓮弁文を描く。37は束口碗の口縁部小片で釉調などからⅣ～Ⅴ類と考えられる。38～46は雷文帯碗で、38～44はヘラ彫りによって口縁帯に雷文を施文、45・46はスタンプによって雷文帯を配し、内面は草花文が型押しされる。47～51は直口する無文碗の口縁資料で、47～50はⅥ類の特徴を、51はⅦ類の特徴を有する資料である。55

～59は細蓮弁文碗でⅥ類に比定される資料である。60～63はⅥ類の底部資料で、60は見込を蛇の目状に釉剥ぎする無文碗、61は細蓮弁文を体部に描く。62・63は体部の文様は不明だが、その形状等から無文の直口碗もしくは細蓮弁文碗の底部資料と考えられる。64～65は龍泉窯系とは異なる系譜と考えられる粗製の青磁碗あるいは鉢の資料で、64は外側に大きく開く口縁部資料で体部に轆轤痕を多く残す。65は碗の底部資料で見込は蛇の目状に釉剥ぎする。66は厚手の底部で器種は鉢形と考えられる。

皿：67は青磁櫛描文皿で小破片を図上復元した。68・69は外面に蓮弁文を篦彫りする蓮弁口折皿の口縁部資料で釉調や形状からⅢ類と考えられる。70～74は口折の無鎬蓮弁文の皿で、70は体内面に片切彫りによる文様を施文する。75～78は口縁部を微弱に肥厚させ端反りとなるⅤ類皿。79～82は腰折皿でいずれもⅤ類になるものと考えられる。83～86は直口する口縁部の見込に印花文が施される資料で、外底は蛇の目釉剥ぎで、Ⅴ類。87はⅦ、88・89はⅥ類段階の腰折れ皿。

玉壺春瓶：90～92は青磁の瓶で、90と91は同一個体と考えられる。底部には蓮弁文が体外面には草花文が描かれている。92も同様下半が蓮弁、体外面はモチーフは不明だが草花文のような文様が描かれている。

盤：93～96は鍔縁の盤で、内体面に描かれる文様は93が無文、94は櫛描きによる細蓮弁文、95は幅の広い篦による蓮弁が描かれ、口縁部を刻み稜花とする。

鉢：97は擂り鉢の口縁部資料。

酒会壺：98・99は青磁酒会壺の蓋。100・101は酒会壺の身である。

第５節　白磁（第20図-102～125）

102は白磁口縁部資料で、口唇部に刻みを有する資料で大宰府分類Ⅶ類白磁碗に該当するものと推定するが、小破片の為、詳細は不明。11次調査TP1からの出土。103は白磁碗底部資料で形態的特徴からＧ群（今帰仁タイプ・浦口窯系）。104・105はＡ群（口禿・景徳鎮窯系）の皿。106～108はＣ３群（外反碗・閩清窯系）、109はＣ２群（ビロースクⅡ・閩清窯系）。110～114はＤ群（邵武窯系）、115・116はＤ２群（粗製碗・邵武窯系）。117～121はＥ群（景徳鎮窯系）。122・123は壺の口縁部、124は瓶の底部資料である。125は櫛描文を体部に描く白磁瓶もしくは青白磁の胴部小片資料である。

第６節　青花（第21図-126～134）

元青花：126・127は元様式の青花盤で、前者は内外面に（牡丹？）唐草文を描く。鍔の稜は不明瞭で呉須の発色はやや淡くなる。後者は口縁部の小片で、鍔の稜が比較的明瞭かつ、口縁端と屈曲部に二重圏線を廻らせその中に巻草文が描かれる。

明青花：128～130は明代の青花碗で128・129はＢ１群でいずれも外体面に宝相華唐草文を描く。130は外面に草花文を描く資料で、底部は見られないが、Ｅ群と考えられる。131は呉須の発色は悪く、胎土は陶質で焼成も不良。いわゆる漳州窯系の粗製青花碗と考えられる。

132は外体面に文様が無く、見込にモチーフ不明の文様を描く。碁笥底の特徴からＣ群の皿となる。133は小杯で口縁部端が細く端反りし、底部は畳付露胎となる。外面にモチーフ不明の文様を描く。134は玉壺春瓶で上部から頸部に蕉葉文、雷文帯、雲文を配し、胴体部は牡丹唐草と推定される文様が描かれ、底部はラマ式蓮弁文となる。

第７節　黒釉（第21図-135・136）

135は天目碗の口縁部資料、136は底部資料で、両者とも黒色の釉が厚く施釉されていく。

第８節　瑠璃釉（第21図-137）

137は玉壺春瓶の口縁部小破片資料である。

第９節　黄釉（第21図-138）

138は今帰仁城跡内でもこれまで出土例の無い資料で、器種は皿と推測される。見込に龍が描かれたもので、龍の胴体及び脚と爪までが見られる資料である。胎土は軟質、釉色は黄色で発色は良い。

第10節　褐釉陶器（第21図-139～150）

139は褐釉陶器の蓋で、140～142は薄胎醤釉陶器（田中2001・栗2004）と呼称される一群と推測される褐釉陶器で、茶入れの類である。140は受け口状の口縁部形状から急須等の製品の破片資料かと思われる。141は茶入れ等の製品の底部。142は大海茶入れの底部資料である。143～145はグスク時代遺跡で一般的に出土の多い口縁部を玉縁状に肥厚させる褐釉陶器である。146～148は口縁部を方形に肥厚させる大型の褐釉陶器で、グスク時代の遺跡で最も出土例の多い資料である。149は口縁部を逆Ｔ字形に成形する擂鉢で、８本を単位とする摺目が体部内面に等間隔で施されている。150は白色の鉱物粒を含む赤色の素地に褐色の釉をやや雑に施釉、口縁部外面に縄状の突帯を貼り付ける甕あるいは口径の広い鉢と推測される。

第11節　備前（第22図-151・152）

151は備前の擂鉢と考えられる口縁部片で、得られた資料には摺目が確認されない。

第12節　タイ陶磁（第22図-153～160）

153～160はタイ陶磁と考えられる資料である。153は青磁の小片で内面に釉が施釉されていないことから、袋物の類と考えられる。外面には円文の外側に放射状に文様が描かれており、花文等と推測されるがモチーフは不明。154～156はいわゆる半練とされる土器である。落とし蓋の破片で端部を肥厚させ中央に鈕が配される。157～158はタイ褐釉陶器でノイ川窯系の資料、159はシーサッチャナライ窯系と推定される口縁部資料である。160は大型の褐釉陶器の底部資料である、小豆色の混和材が多く見られる特徴からノイ川窯系の資料と考えられる。

第13節　不明磁器質製品（第22図-161・162）

161・162は筒形、磁器質の製品で用途等は不明である。胎土は陶器質で白色、製品の外面には自然釉のような褐色の釉が掛かる。いわゆる坩堝や取瓶といった金属を入れる器等とも考えられるが類例資料が少なく判然としない。

第14節　玉類（第22図-163～169）

勾玉：163は勾玉で端部が破損する。強い緑みの青色で素材はガラスである。
管玉：164は胴中央に張りがあり端部が細くなる管状の玉。緑色（強い緑）で素材はガラスである。
小玉：165～169はガラス小玉で、主郭の分類で丸玉としたもので、主郭分類ｂ２種の10mm～5mm程度のサイズになる165～166、Ｃ種の5mm以下で１回ないし２回棒状工具に溶けたガラスを巻き付け製作した167～169の二種が認められる。なお、色調は強い緑みの青（165）、明るい緑みの青（167、169）、やや褐色に濁る透明（166）、オレンジ色もしくはさえた橙色（168）である。今回出土したガラス製の玉類は色調から大別すると、透明、赤系（橙）、青系、緑系の４種認められた。なお、166は素材をガラスとするべきものか、鉱物（水晶）とするべきものか判然としない。

第15節　遊具（第22図-170～174）

碁石：白色（171）と黒色（170）の２種の碁石がそれぞれ１点ずつ出土している。今帰仁城跡及び周辺遺跡を含めても初出となる。

円盤状製品：172～174は褐釉陶器を打割成形して円盤状とする製品で遊具と考えられている。重量は９g～15ｇである。

第16節　銭貨（第23図）

銭貨は総数11点得られていて全てを図示した。175は宋通元寶（北宋・960年初鋳）。176は天禧通寶（北宋・1017）。177は天聖元寶（北宋・1023）。178は熙寧元寶（北宋・1068）。179は元祐通寶（北宋・1086）。180は政和通寶（北宋・1111）。181は洪武通寶当三銭（明・1368）。182は洪武通寶折二銭（明・1368）。183は永樂通寶（明・1408）。184は永樂通寶（明・1408）。185は銭種不明だが大きさから折二銭と考えられる。

第17節　金属製品（第24図、第25図-208～210）

第24図、第25図-208～210は金属製品で、186～197は銅製（真鍮等の合金を含む）、198～209は鉄製の製品に大別できる。186は匙状の頭部に身中央はネジ状に溝が入いる典型的な簪である。187は用途不明の板状金具で、188は無文銭とも推定されるが、方孔が小さく、孔の位置が歪んでいるため座金具等と判断し本節で紹介する。189は目釘等の細い円柱状の銅製品。190は断面がU字形の金具で覆輪等と想定される。191は鍍金が施された用途不明の板状製品で、飾り金具等の破片資料と考えられる。192は割ピン状の鋲金具。193は用途不明の円形の製品で金属製の皿状の打楽器摺鉦の屈曲部分にも近しいが、サイズがやや小さく作りが薄いようである。194・195は用途不明の板状の銅製品で194は鏡の破片と推定され、195は金具等の破片資料と想定される。196は粒状の銅製品で用途等は不明。197は煙管の雁首で火皿部分を欠損する。

198～209は鉄製品である。いずれも錆の付着が著しく、破損しているものについては、その原形を伺うことは困難なものも少なくない。比較的良好な資料から紹介する。198は刀子で今帰仁城跡志慶真門郭で分類した切っ先部分で外反りになり峯をほぼ直線状に造る。全長16.3cm、身部約13.5cm、茎約2.8cm、最大刀幅約20.5cm、厚さ0.5cmを測る。199は鉄鏃で先端部が平坦となる鑿頭形の資料で鏃身は断面方形、茎は断面円形となる。200～206は鉄釘で大小サイズにバリエーションが認められる。207は青磁破片資料の胴部外面に鉄錆が附着する資料で、その附着状況からは判断できないものの楔状の製品を打ち込んだものとも考えられる。208～209は板状の製品と推量されるが、錆ぶくれが著しく基の形状は不明である。屋敷地４でも同様の製品が出土しており、鉄鍋等の破片ではないかと考えたがこれも同様の製品の破片もしくは鉄滓資料と考えられる。

第18節　石器（第25図-211～216）

第25図-211～216は石器・石製品である。211は棒状、小型の石製品で瑪瑙（チャート）を原材とする製品。213も小型の石製品で方柱状で粘板岩を素材とするところから、方柱状の提砥（携帯用砥石）とも考えられるが、やや幅広の形状がこれまでの出土例とは異なっている。212は玢岩の砥石で、方柱状の砥石平坦面を砥面とする資料で、一端を欠き欠損する。214の石質は緑色岩で、自然円礫の端部を使用面とする敲石で、敲打痕による凸凹、端部を一部欠損するがほぼ全形をうかがい知ることができる資料である。215は砂岩で広い面の表裏面、幅狭の側面４箇所が敲打痕によって窪んでおりいわゆる凹石である。216は砂岩で平坦面は砥面等の作業面として利用されていたようで、平坦になる。平坦面の側縁部には赤褐色の鉄錆が表面付着しており、金床石のような用途で利用されたことも想定される自然礫である。

第19節　土製品（第25図-217）

第25図-217は焼けた土塊の残欠で、製品として成形されたものではなく、竈や遺構の一部と考えられる。円形に孔があいているため、羽口等の鍛冶関係に伴うような遺構の破損部位とも考えられる。表面は赤褐色で土色をしているが、裏面は黒色金属等が融解した状況で一体となっている。このため赤化した面がより火受けが弱く、黒色融解した付着物面が強く火受けした状況の焼土塊と見られる。出土した地点はSK628及びこの付近の遺構からであり高温で作業を行うような状況が付近にあったものと考えられる。

第20節　骨製品（第25図-218）

イノシシまたはブタの雄、下顎骨左犬歯（牙）を利用した製品である。歯根部に穿孔有り、先端部は欠損するため全体の長さは不明だが、残存長約７cmを測る。イノシシの牙を利用した製品の類例が少なく用途等の検討は少ないので判然としないが、穿孔のみの製品であることから、垂飾品等になるものと推量される。

第21節　貝類遺体（第3表）

貝類遺体については、第3表に最小個体数（ＭＮＩ）を示した。

第22節　脊椎動物遺体

脊椎動物骨については、樋泉岳二氏（早稲田大学非常勤講師）に依頼し同定分析いただいた。以下、いただいたコメントを掲載する。

動物遺体は個体数比で魚類が5割強、哺乳類が4割強を占める。

屋敷地２との類似性が高い。いずれも屋敷地１・４より魚類が多く、やや主郭に近い傾向が認められる。

①魚類の構成　ベラ科・ブダイ科が多く，ハタ科・フエフキダイ科なども普通である。

今帰仁城跡・今帰仁ムラ跡に一般的にみられる様相である。

②鳥獣類の構成　イノシシ（ブタ）とウシがおおむね同数で優占し、ウマがこれに次ぐ。少数ながらニワトリがみられる。これらの特徴は屋敷地２と類似する。

屋敷地４などよりウシ・ウマが少なく、イノシシ（ブタ）が多い点、ニワトリが見られる点で、今帰仁ムラ跡の中ではやや主郭に近い傾向といえる。

イノシシの顎・歯は、いずれもM2萌出・M3未萌出～萌出中段階で死亡したと推定される。資料数が少ないため断定はできないが、同様の特徴は今帰仁ムラ屋敷地２でも確認されており、おそらく飼育されていたものと推測される。

イヌは同一個体と思われる全身骨格がまとまって出土しており、埋葬または死骸がまとめて廃棄された可能性が高い。貝塚時代のものにくらべてやや大型の印象である。

③まとめ　全体として本地区の脊椎動物群は屋敷地２との類似性が高く、他の屋敷地に比べてやや主郭に近い様相が認められる。食材利用の面からみると本地区の居住者は、屋敷地２と同様に、今帰仁ムラ跡の中では主郭の支配者層とのつながりが深い集団であった可能性が考えられる。

第23節　炭化植物遺体（第2表）

炭化植物遺体については赤嶺信哉・喜納政英（株式会社イーエーシー・文化財事業部）に依頼し同定分析いただいた。以下、いただいたコメントを掲載する。

①植物遺体の同定の経緯　（株）イーエーシーでは、現在フローテーションの業務化にむけた試みを行っている。フローテーションは水に浮いて回収されるLF（Light Fraction）資料を２mmと

0.425mmのメッシュサイズのフルイで、沈んで回収されるHF（Heavy Fraction）資料を２mmのフルイで回収する方法を採用した。HF資料からは従来のピックアップ法では見逃しがちな微細な人工遺物や動物遺存体の回収にも有効であることが指摘されており（樋泉2002私信、宮城2005）、筆者らはこれまで、回収された資料から遺跡で消費された食料残滓の構成を調べ食資源の推定や遺跡環境の復元、微細遺物の検出に一定の成果が得られることを実践している。

フローテーション法は遺跡からの植物遺存体の回収を目的に導入され始め、県内でもいくつかの遺跡で成果をあげている（高宮1996、1997、2004他）。しかし筆者らにはフローテーションを各時代各地域の遺跡調査で実践したことがない。このため当該作業の良好な資料を得て実践し報告することができなかった。今回幸いにも宮城弘樹氏（今帰仁村教育委員会）のご好意により、今帰仁城跡第1次外郭調査のＬＦ資料を見せていただく機会を得ることができたので、以下にＬＦ資料より得られた植物遺存体について報告する。

②仕様　水選別を行ったのは今帰仁城跡第1次外郭調査のＬＦ資料６サンプル（約50ℓ）である。分別方法は、先ず炭化物とそれ以外、炭化物の中で種子と思われる粒状になったものとそうでない木片に分け、粒状になったものを（高宮2004・今帰仁村教育委員会2007）（今帰仁村教育委員会2005）の図版写真を参考に、実体顕微鏡により選別を行った。

③まとめ　今回確認できた植物遺存体はイネ・アワ・キビ・コムギ・オオムギ・カヤツリグサ科・マメ科？などであった。詳細を表2表に示す。

今回は依頼者である今帰仁村教育委員会より、栽培植物の分類を主な作業として行うように指示があったので、これまで紹介されている写真などを参考にイネ・アワ・キビ・コムギ・オオムギの同定を行うことができた。しかし多くの標本が不明に分類されていることからわかるように、栽培植物以外の野生植物と想定される種子類の同定は植物同定に知識の深い専門家の指導や原生標本を揃えて同定することが必要である。雑草や炭化した木材等の標品については今後の課題としたい。

表2表　1次外郭LF資料出土植物遺存体

サンプルNo.	イネ	アワ	キビ	コムギ	オオムギ	カヤツリグサ科	不明	不明A	不明B	不明C	不明D	不明E	不明F	不明G	不明H
No.1	8 (2)	4	1	5 (1)		1	10				1	1			
No.2	2 (2)	4		3 (3)			33						1		
No.3	17 (2)	39	19	13 (10)	4	2	59	5							1
No.4		3	5	0 (1)		1	10							1	
No.5	1		2	6 (2)	1	1	13	1							
No.6		3	5	0 (1)			18		1	1					
合計	28 (8)	53	32	27 (18)	5	5	143	6	1	1	1	1	1	1	1

※(　)内は破片

第3表　今帰仁ムラ跡（西区屋敷地5）出土貝類遺体集計表

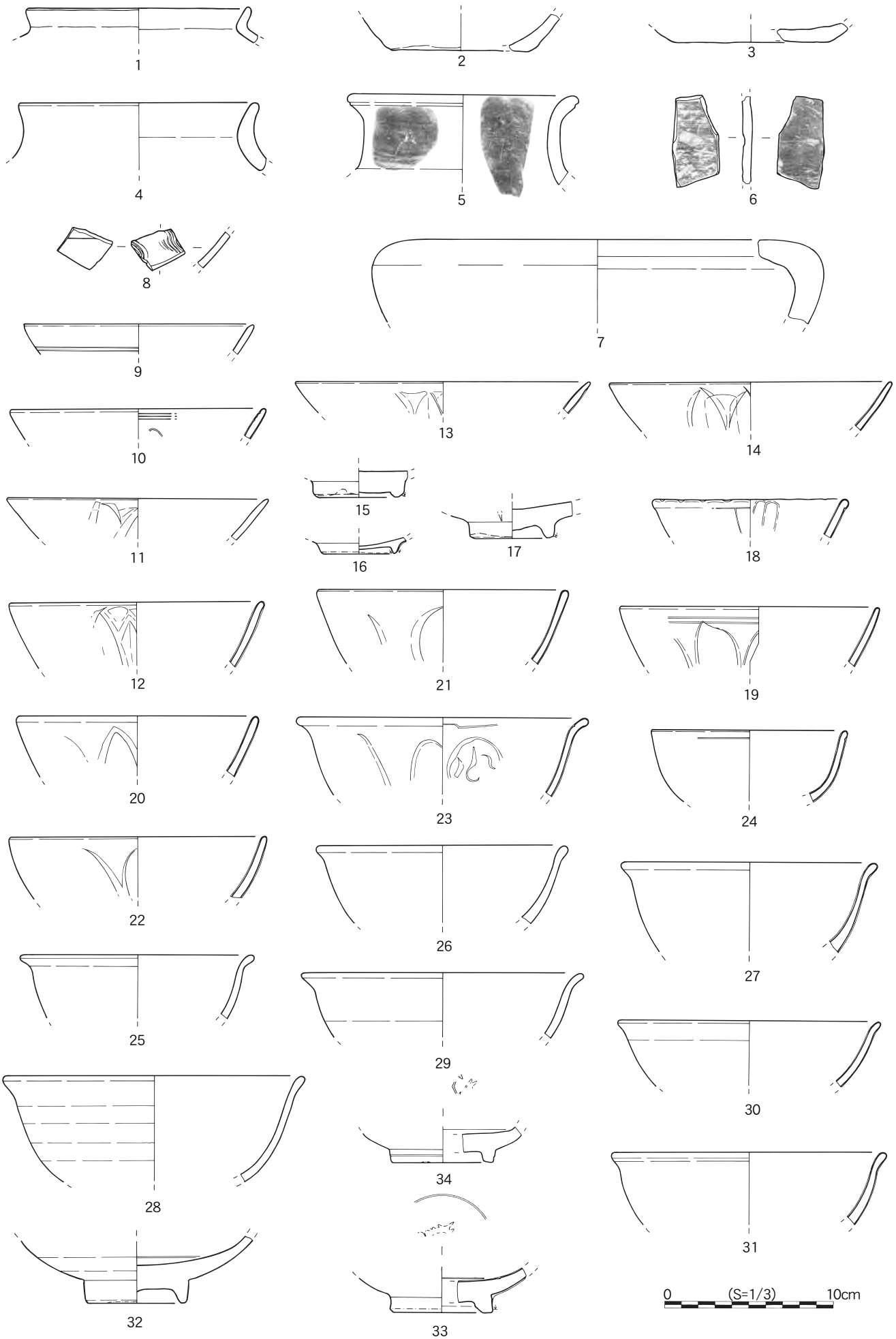
		MNI	生息場所類型
軟体動物門 Mollusca			
腹足綱(海産) Gastropoda (Marine)			
リュウテン科 Turbinidae			
チョウセンサザエ	Turbo (Marm.) angyrostomus	8	I-3-a
同(フタ)	(operculum)	84	I-3-a
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	1	I-4-a
同(フタ)	(operculum)	2	I-4-a
ギンタカハマ	Trochus (Tectis) pyramis	1	
サラサバテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	4	I-4-a
オニノツノガイ科 Cerithiidae			
オニノツノ	Cerithium (s.s.) modulosum	5	I-2-c
コオニノツノ	Cerithium (s.s.) columnum		I-2-a
クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	5	I-1-b
スイショウガイ科 Strombidae			
マガキガイ	Strombus (Con.) luhuanus	136	I-2-c
クモガイ	Lambis lambis	6	I-2-c
スイジガイ	Harpago chiragra		I-2-c
タカラガイ科 Cypraeidae			
タカラガイ不明		1	
ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus		I-1-a
ハナマルユキ	C. (Rav.) caputserupentis	20	I-3-a
フジツガイ科 Ranellidae			
ホラガイ	Charonia tritonis	2	I-4-a
オキニシ科 Bursidae			
オキニシ	Bursa (s.s) bufonis dunkeri	9	I-3-a
アッキガイ科 Muricidae			
シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	1	I-3-a
ツノレイシ	Mancinella tuberosa	19	I-3-a
ムラサキイガレイシ	Drupa (s.s.) morum	2	I-3-a
アカイガレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus	2	I-3-a
オニコブシ科 Vasidea		14	
イトマキボラ科 Fasciolariidae			
イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	3	I-2-a
チョウセンフデ科 Mitridae			
チョウセンフデ	Mitra mitra		I-2-c
ニシキノキバフデ	Mitra stictica		I-2-a
イモガイ科 Conidae			
マダライモ	Conus (Virro.) ebraeus	1	I-1-a
コマダライモ	Conus (Virro.) chaldaeus		
サヤガタイモ	Conus (Virro.) fulgetrum		I-1-a
キヌカツギイモ	Conus (Virgi.) flavidus		I-2-a
イボシマイモ	Conus (Virgi.) lividus		I-2-a
ヤナギシボリイモ	Conus (Rhizo.) miles	1	I-3-a
サラサミナシ?	Conus (Rhizo.) capitaneus?		
クロミナシ	Conus (s.s.) marmoreus		II-2-c
ゴマフイモ	Conus (Puncticulis) pulicarius	1	I-2-c
アンボンクロザメ	Conus (Lithoconus) litteratus	1	I-2-c
クロフモドキ	Conus (Litho.) leopardus		
ｸﾛﾌﾓﾄﾞｷ/ｱﾝﾎﾞﾝｸﾛｻﾞﾒ	C. litteratus / C. leopardus		
イモガイ類不明	Conus spp.		
小型イモ		4	
中型イモ		21	
大型イモ		2	
マルタニシ	Chipangopaludina chinensis laeta		IV-6
トウガタカワニナ科 Thiaridae			
トウガタカワニナ	Thiara scabra		IV-5/6
腹足綱(陸産) Gastropoda (Terrestrial)			
キセルガイ科 Clausiliidae			
ツヤギセル	Luchuphaepusa p. praeclara		V-8
アフリカマイマイ科 Achatinidae			
アフリカマイマイ	Achatina fulica		
ナンバンマイマイ科 Camaenidae			
シュリマイマイ	Satsuma (s.s.) m. mercatoria		V-8

		MNI	生息場所類型
二枚貝綱(海産) Bivalvia (Marine)			
フネガイ科 Arcidae			
エガイ	Barbatia (Abarbatia) lima	1	I-1-a
リュウキュウサルボオ	Anadara antiquata	7	II-2-c
ウミギク科 Spondylidae			
メンガイ	Spondylus squamosus		I-2-a
キクザル科 Chamidae			
キクザル類	Chama sp.	2	I-2-a
ザルガイ科 Cardiidae			
リュウキュウザル	Regozara flavum		II-2-c
ｶﾜﾗ/ﾘｭｳｷｭｳｻﾞﾙ	F. unedo / R. flavum		
カワラガイ	Fragum unedo	4	II-2-c
シャコガイ科 Tridacnidae			
シラナミ	Tridacna maxima	3	I-2-a
シラナミ/ヒレ	T. maxima / T. squamosa		
ヒレジャコ	Tridacna squamosa	1	I-2-c
ヒメジャコ	Tridacna crocea	5	I-2-a
シャゴウ	Hippopus hippopus	3	I-2-c
シャコガイ類不明	Tridacnidae spp.		I-2
チドリマスオガイ科 Mesodesmatidea			
イソハマグリ	Atactodea striata	11	I-1-c
ニッコウガイ科 Tellinidae			
リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatam	1	II-1-c
サメザラ	Scutarcopagia scobinata		I-2-c
イソシジミ科 Psammobiidae			
リュウキュウマスオ	Asaphis violacens	1	II-1-c
マスオガイ	Psammonaea elongata	2	
シジミ科 Corbiculidae			
シレナシジミ	Geloina erosa		III-0-c
マルスダレガイ科 Veneridae			
ヌノメガイ	Periglypta purpera	1	II-2-c
アラヌノメ	Periglypta reticulata	4	I-3-c
ホソスジイナミ	Gafrarium pectinatum	3	II-1-c
アラスジケマン	Gafrarium tumidum		III-1-c
二枚貝不明	fragment of bivalves		
その他 others			
貝類不明破片	fragment of molluscs		
造礁サンゴ片	fragmets of eroded corals		

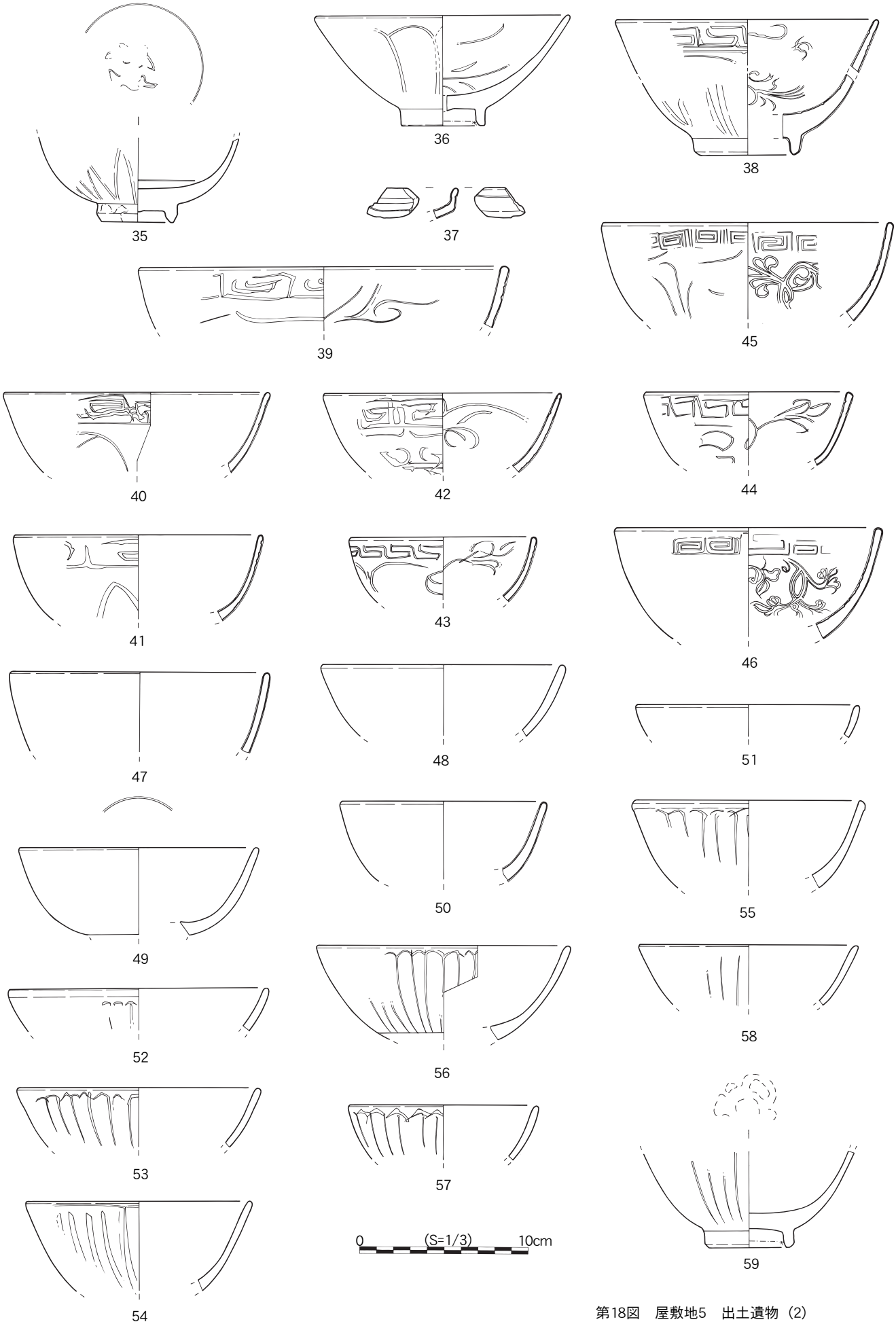
生息場所類型 (Habit生息場所類型 (Habitat)

Ⅰ： 外洋ーサンゴ礁域
Ⅱ： 内湾ー転石域
Ⅲ： 河口干潟ーﾏﾝｸﾞﾛｰﾌﾞ
Ⅳ： 淡水域
Ⅴ： 陸域
Ⅵ： その他

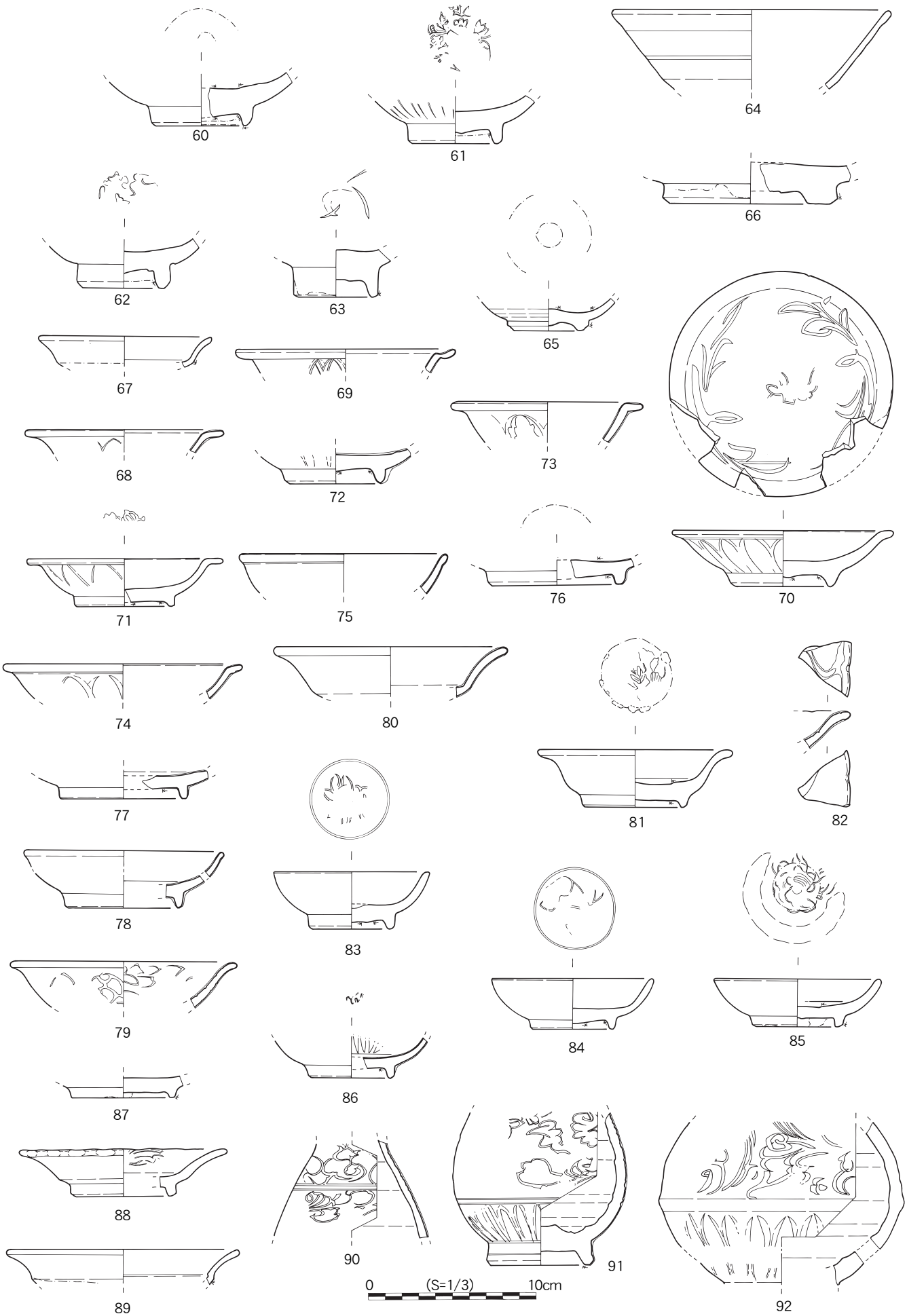
0：潮間帯上部
(Ⅰではノッチ, Ⅲではﾏﾝｸﾞﾛｰﾌﾞ)
1：潮間帯中・下部
2：亜潮間帯上縁部(Ⅰではイノー)
3：干瀬(Ⅱにのみ適用)
4：礁斜面及びその下部
5：止水
6：流水
7：林内
8：林内・林縁部
9：林縁部
10：海浜部
11：打ち上げ物
12：化石



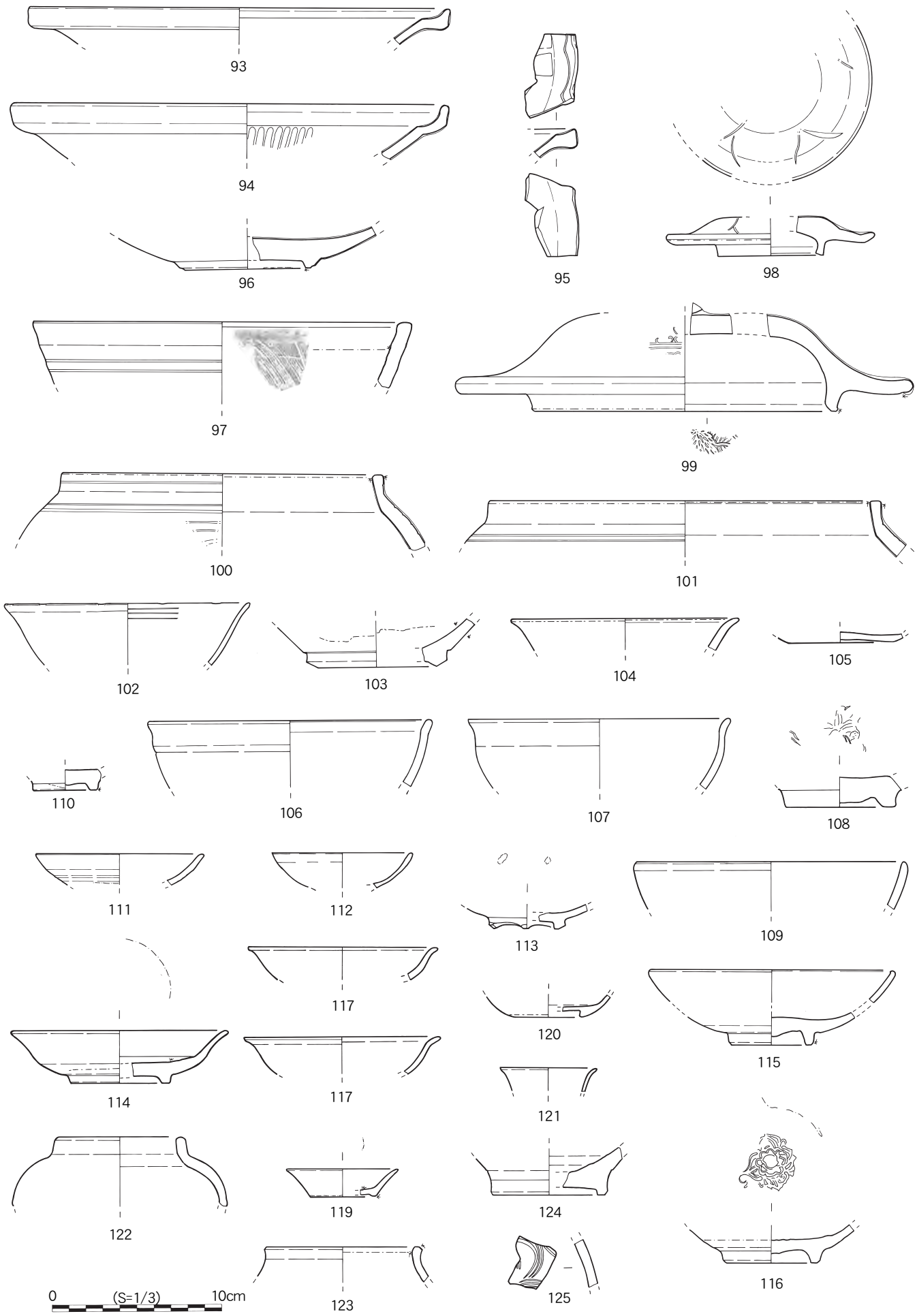
第17図　屋敷地5　出土遺物（1）



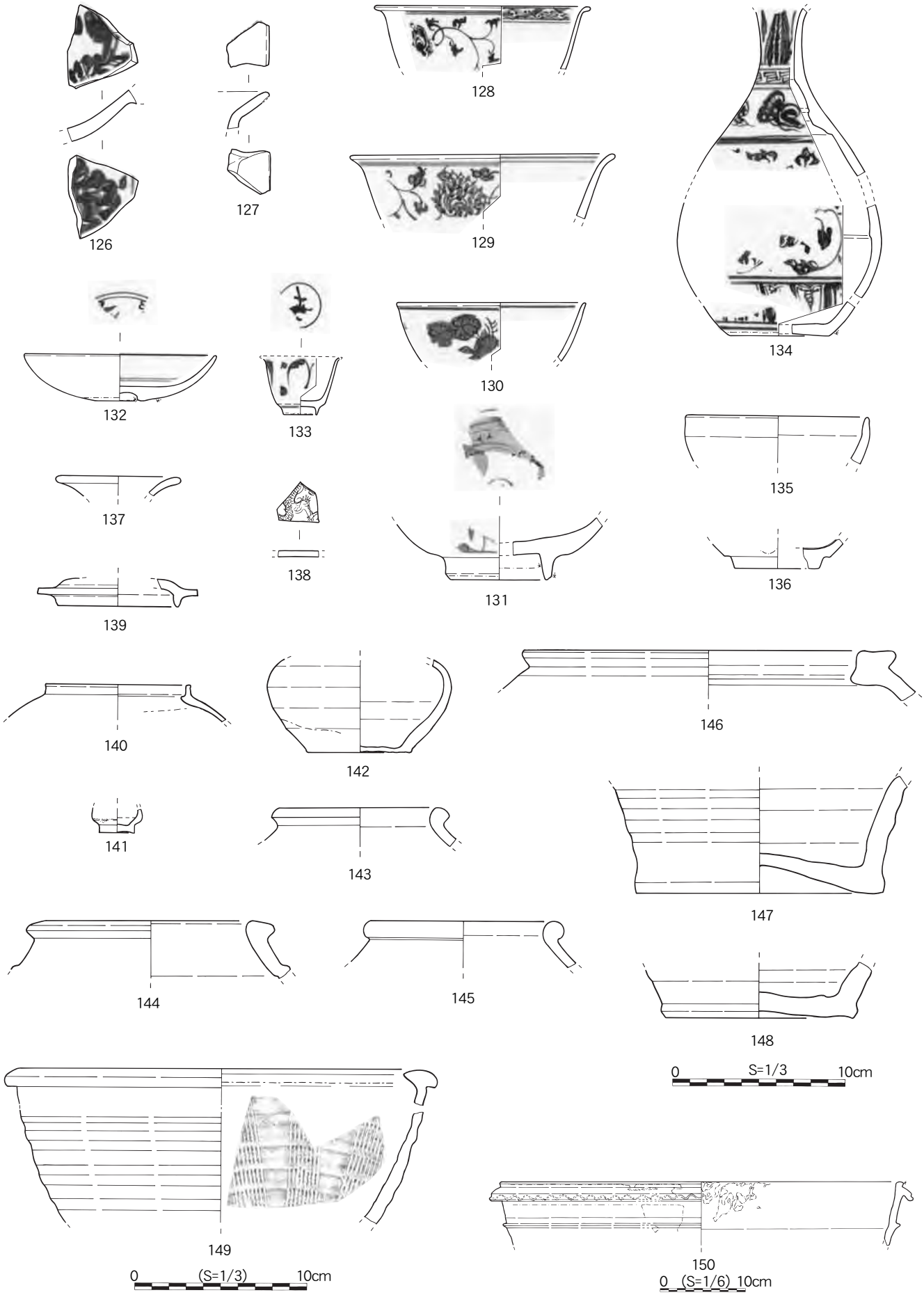
第18図　屋敷地5　出土遺物（2）



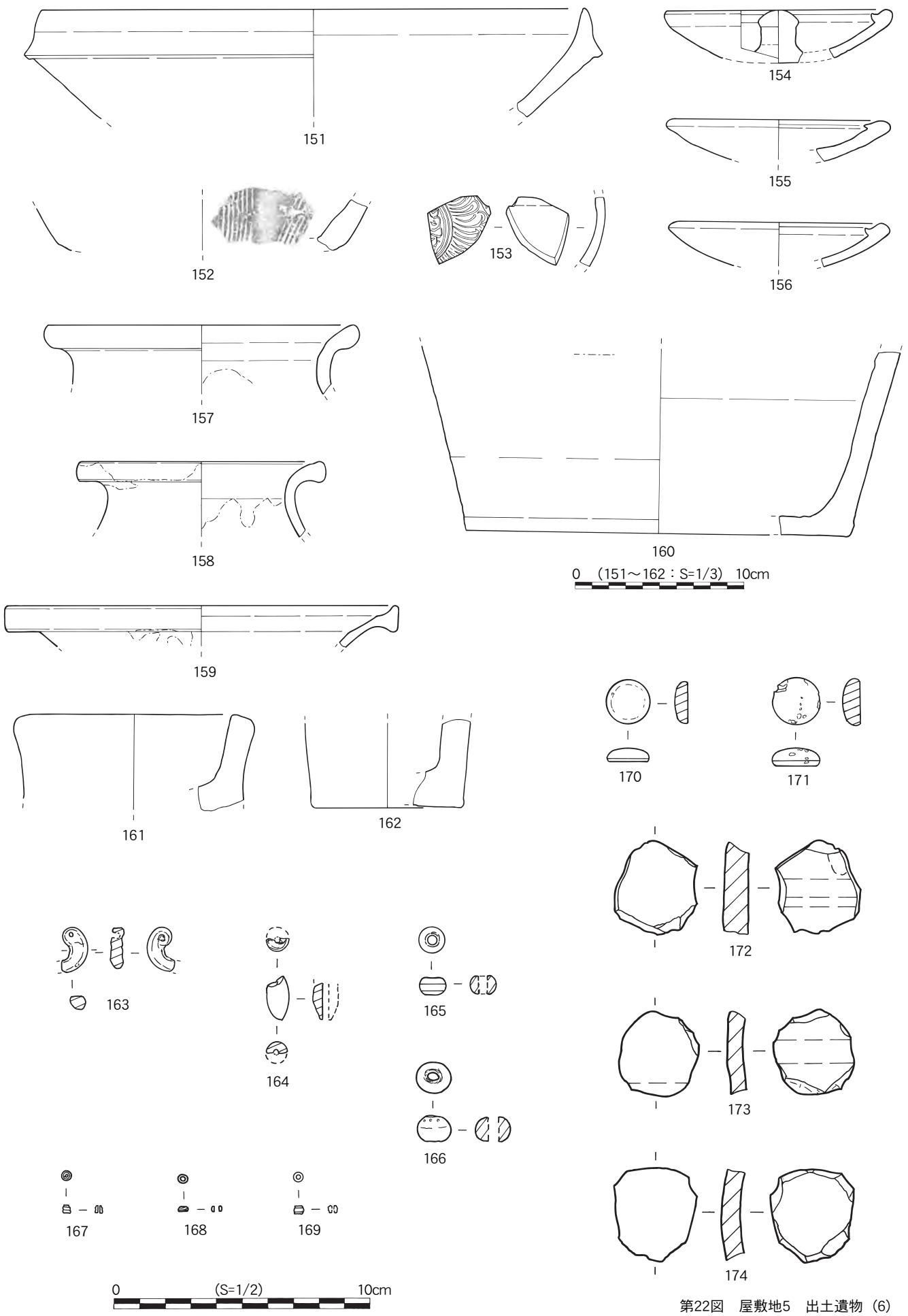
第19図　屋敷地5　出土遺物（3）



第20図　屋敷地5　出土遺物（4）



第21図　屋敷地5　出土遺物（5）

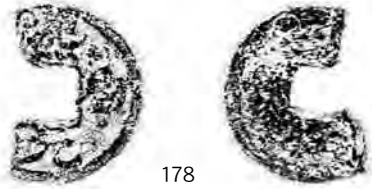


第22図　屋敷地5　出土遺物（6）

175

176

177


178

179

180

181

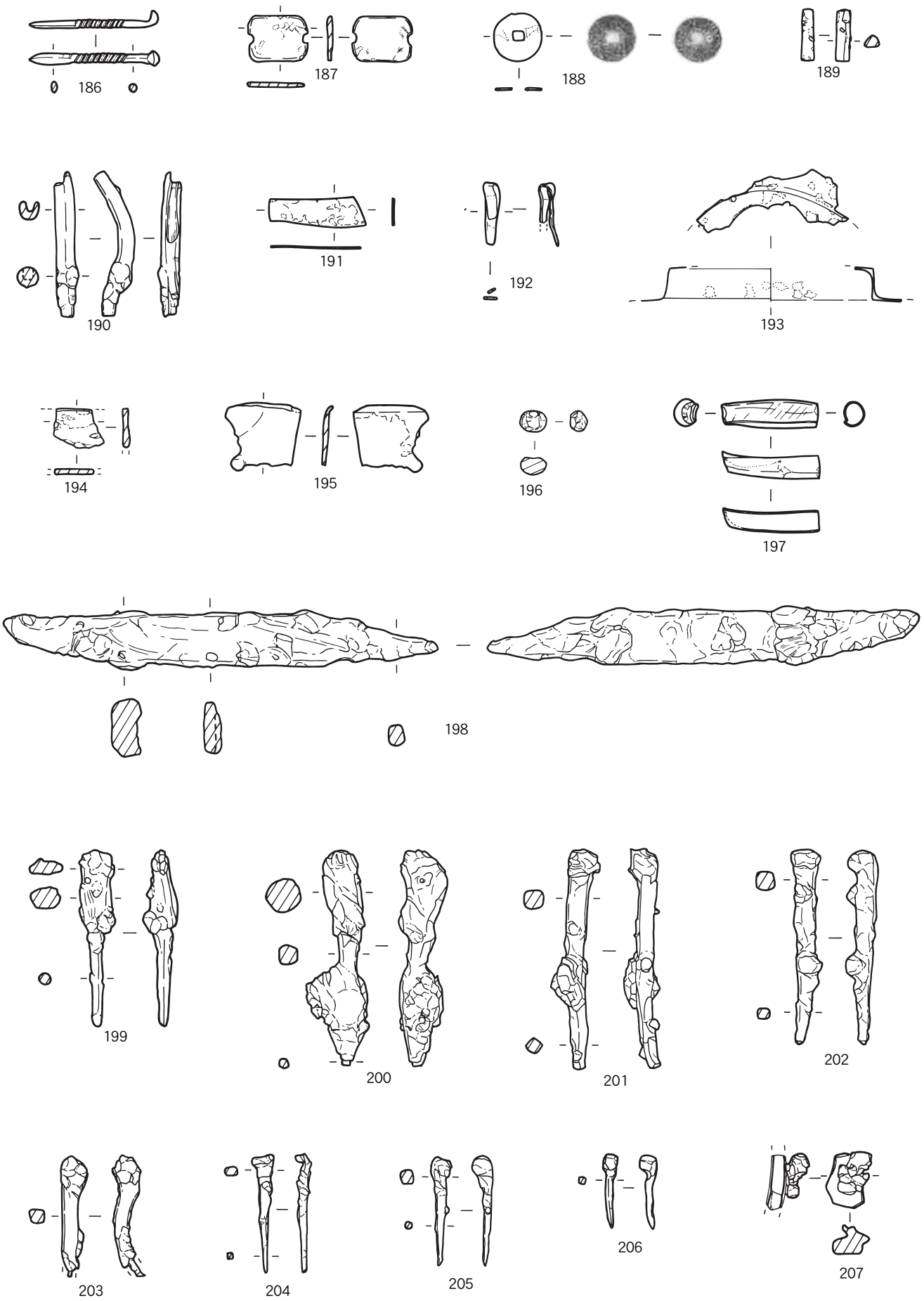
182

183

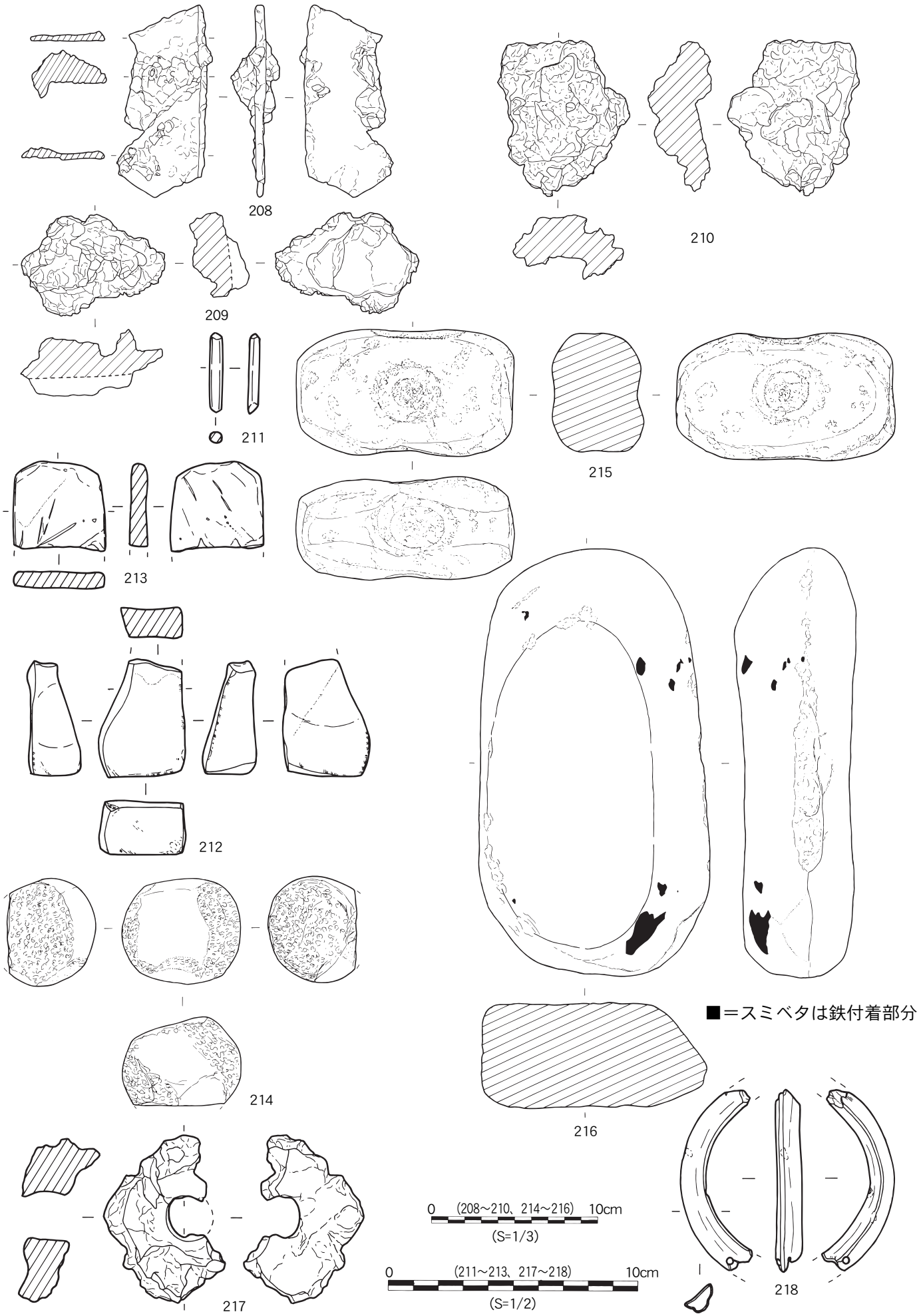
184

185

第23図　屋敷地5　出土遺物（7）



第24図　屋敷地5　出土遺物（8）



第25図　屋敷地5　出土遺物（9）

第4表　今帰仁ムラ跡（屋敷地5）出土遺物観察表（1）

図版	No	屋敷	種別	器種 時代 形式	分類	文様 等	計測値（cm※,g）※玉はmm 器:口径 他:外径 銭：外径 単位＝cm （銭以下	器高 他：厚さ 銭：厚さ 単位＝cm （銭以下	器:底径 他：重量 銭：重量 （単位=g）	遺跡名 次	地区	層	遺構	dot	No.	備考
第17図	1	屋敷地５	土器	壺or甕	第３様式		13.00	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層 0-10			211	
第17図	2	屋敷地５	土器	不明	第３様式		－	－	8.00	１次外郭	R-25	－	S334	172	4285	
第17図	3	屋敷地５	土器	不明	第３様式		－	－	9.20	１次外郭	S-25	－	S628	227	555	
第17図	4	屋敷地５	ｶﾑｲﾔｷ	壺	Ｂ群		13.70	－	－	11次今周	R-24	Ⅰ層			8	
第17図	5	屋敷地５	ｶﾑｲﾔｷ	壺	Ｂ群	波状	12.80	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			139	
第17図	6	屋敷地５	ｶﾑｲﾔｷ	不明	Ａ群		－	－	－	11次今周	R-24	Ⅳ層		107	24	
第17図	7	屋敷地５	瓦質土器	鉢	沖縄産		19.00	－	－	１次外郭	S-24	Ⅰ層			40	
第17図	8	屋敷地５	青磁	碗	同安Ⅰ類	櫛描	－	－	－	１次外郭	R-24	Ⅰ層			38	
第17図	9	屋敷地５	青磁	碗？	同安Ⅰ類		13.40	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			87	
第17図	10	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅰ類	劃花	14.80	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層			49	
第17図	11	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅱ類	鎬蓮弁文	15.20	－	－	１次外郭	R-24	－	S121	86	230	１次外郭S-23Ⅰ層No.31
第17図	12	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅱ類	鎬蓮弁文	14.70	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			104	
第17図	13	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅱ類	鎬蓮弁文	17.20	－	－	１次外郭	S-25	Ⅱ層			340	
第17図	14	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅱ類	鎬蓮弁文	16.40	－	－	１次外郭	S-25	Ⅱ層		177	438	
第17図	15	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅱ類		－	－	4.60	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			6	
第17図	16	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅲ類		－	－	4.10	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			6	
第17図	17	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅳ類	蓮弁文	－	－	4.30	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			7	
第17図	18	屋敷地５	青磁	碗	Ⅳ～Ⅴ類	蓮弁		－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層		11	55	
第17図	19	屋敷地５	青磁	碗	Ⅳ～Ⅴ類	蓮弁	15.00	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			61	１次外郭 S-24Ⅰ層No.106
第17図	20	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁	13.80	－	－	１次外郭	表採	－			293	
第17図	21	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁	14.20	－	－	１次外郭	S-25	Ⅱ層		148	373	
第17図	22	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁	14.80	－	－	１次外郭	R-25	－	S484	201	482	
第17図	23	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁文	16.40	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層 10-20			25	１次外郭R-25Ⅰ層No.81
第17図	24	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類		11.20	－	－	11次今周	Q-24	Ⅱ層		189	35	
第17図	25	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	13.20	－	－	１次外郭	R-25	－	S527	212	517	
第17図	26	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	14.20	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層		63	183	１次外郭 R-25Ⅱ層No.138・No.116、R-24Ⅱ層No.139
第17図	27	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	14.60	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層	S397	138	331	１次外郭R-24Ⅱ層No.59・No95、R-25Ⅱ層
第17図	28	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	17.30	－	－	１次外郭	R-25	－	S251	160	362	
第17図	29	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	16.10	－	－	１次外郭	S-24	－	S295	163	392	１次外郭S-24S294 S296(?)No.403
第17図	30	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	15.50	－	－	11次今周	TPI	－			2	
第17図	31	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	無文 外反	15.70	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層			116	１次外郭表採No.511、R-25Ⅱ層No284
第17図	32	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類		－	－	5.40	１次外郭	R-25	Ⅱ層		130	310	
第17図	33	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類		－	－	5.80	１次外郭	R-25	Ⅱ層			116	
第17図	34	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類		－	－	6.00	１次外郭	S-26	－	石積遺構		41	
第18図	35	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁	－	－	4.30	１次外郭	R-25	Ⅱ層		132	312	１次外郭 S-25・26 Ⅰ層 No84
第18図	36	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	蓮弁	14.60	6.50	4.90	１次外郭	R-24	Ⅱ層		60	180	１次外郭 R-25 Ⅱ層 No376
第18図	37	屋敷地５	青磁	東口碗	Ⅳ～Ⅴ類	蓮	－	－	－	１次外郭	R-24	Ⅰ層			38	
第18図	38	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍﾗ	15.20	－	5.60	１次外郭	R-24	－	S113	77	206	底部・１次外郭 R-25 Ⅱ層dot34 No.112 、１次外郭R-24S44dot53 No.154
第18図	39	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	21.00	－	－	１次外郭	R-25	－	S469	209		１次外郭 S-24 Ⅰ層 No94
第18図	40	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	15.20	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層		146	352	
第18図	41	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	14.30	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層		30	108	
第18図	42	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	13.80	－	－	11次今周	R-24	Ⅰ層			8	１次外郭 S-24 Ⅰ層 No123
第18図	43	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	10.60	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層	S275	141	334	
第18図	44	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ﾍ	11.90	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			59	１次外郭 R-24 Ⅱ層 No176
第18図	45	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅴ類	雷文ｽﾀﾝﾌﾟ	16.70	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			104	１次外郭R-25 S300 No.401、R-25 Ⅱ層 No.327、R-24 Ⅱ層
第18図	46	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類	雷文ｽﾀﾝﾌﾟ	15.20	－	－	11次今周	R-23	Ⅱ層			14	
第18図	47	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類	無文 直口	15.00	－	－	１次外郭	R-24	Ⅰ層			42	
第18図	48	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類	無文 直口	13.90	－	－	11次今周	R-24	Ⅰ層			6	
第18図	49	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類	無文 直口	13.80	－	－	１次外郭	R-24	－	S113		219	１次外郭R-25Ⅰ層 No.99、R-25Ⅱ層No.284、S-24Ⅱ層No.？、R-24S-19No159、R-24Ⅱ層 No.44、R-24Ⅱ層No.59
第18図	50	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類	無文 直口	11.80	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層 10-20			25	
第18図	51	屋敷地５	青磁	碗	Ⅶ類？	無文 直口	13.30	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			59	
第18図	52	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	15.10	－	－	11次今周	(Q-24) TP2	Ⅰ層			30	
第18図	53	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	14.00	－	－	１次外郭	R-25	－	S332	167	488	
第18図	54	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	13.00	－	－	１次外郭	R-24	Ⅰ層			42	１次外郭 R-25 S534 No515
第18図	55	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	13.20	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層			126	１次外郭S-24Ⅱ層No.125、S-24Ⅱ層 No.132
第18図	56	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	14.60	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			59	１次外郭 S-24Ⅰ層No91、 S-24Ⅱ層No.34、R-25Ⅰ層No.101
第18図	57	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	11.00	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層		28	78	１次外郭 R-24 Ⅱ層 No.61
第18図	58	屋敷地５	青磁	碗	Ⅵ～Ⅶ類	細蓮弁文	12.60	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層			124	
第18図	59	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類	細蓮弁文	－	－	4.80	１次外郭	R-25	－	S413	184	449	１次外郭R-25S249No.374、R-24Ⅱ層45～60No.6、S-24Ⅰ層
第19図	60	屋敷地５	青磁	碗	Ⅴ～Ⅵ類		－	－	5.30	１次外郭	J-23	Ⅰ層 0-10			24	
第19図	61	屋敷地５	青磁	碗	Ⅵ類	細蓮弁文	－	－	5.00	１次外郭	R-25	Ⅱ層			116	１次外郭R-24Ⅱ層dot22No.72、R-24No.42
第19図	62	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅵ類		－	－	4.80	１次外郭	S-24 S-25	－	S354	173	440	
第19図	63	屋敷地５	青磁	碗	龍泉Ⅶ類		－	－	4.60	１次外郭	R-24	Ⅰ層			42	
第19図	64	屋敷地５	青磁	碗	粗製青磁		16.30	－		11次今周	Q-24	Ⅱ層		186	34	
第19図	65	屋敷地５	青磁	碗	粗製青磁		－	－	1.90	１次外郭	R-25	Ⅱ層		218	536	
第19図	66	屋敷地５	青磁	鉢？	粗製青磁		－	－	9.50	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			6	
第19図	67	屋敷地５	青磁	皿	同安Ⅰ類		10.20	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			87	
第19図	68	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅲ類	蓮弁	11.00	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層		38	131	
第19図	69	屋敷地５	青磁	皿	Ⅲ～Ⅳ類	蓮弁	12.60	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			21	11次今周Ⅰ層No.22
第19図	70	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅴ類	蓮弁文	11.80	3.30	5.80	１次外郭	S-24	Ⅱ層			95	１次外郭R-24Ⅱ層No.59、R-24Ⅱ層 dot17No.67、R-24dot65 No.85、R-24Ⅱ層No.174、R-24Ⅱ層No.50、１次外郭士手
第19図	71	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅴ類	蓮弁	9.80	2.80	5.80	１次外郭	R-25	Ⅰ層			101	
第19図	72	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅴ類	蓮弁	－	－	5.50	１次外郭	S-24	Ⅰ層			128	
第19図	73	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅴ類	蓮弁	9.20	－	－	11次今周		Ⅰ層			13	

第5表　今帰仁ムラ跡（屋敷地5）出土遺物観察表（2）

図版	No	屋敷	種別	器種 時代 形式	分類	文様 等	計測値（cm※,g）※玉はmm 器:口径 他:外径 銭：外径 単位＝cm （銭以下	器高 他：厚さ 銭：厚さ 単位＝cm （銭以下	器:底径 他：重量 銭：重量 （単位=g）	次	遺跡名 地区	層	遺構	dot	No.	備考
第19図	74	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類	蓮弁	13.60	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層		124	302	
第19図	75	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類		11.80	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層			318	１次外郭Ⅰ層No.443
第19図	76	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類		－	－	7.80	１次外郭	S-23	Ⅰ層			28	１次外郭 S-23 Ⅰ層0-10 No24
第19図	77	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類		－	－	7.50	11次今周	R-24	Ⅰ層			8	
第19図	78	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類		11.50	－	6.60	11次今周	R-24	Ⅰ層			23	１次外郭 S-24Ⅰ層 No.106、底部：１次外郭 R-24 Ⅱ層
第19図	79	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類	草花文？	12.80	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層			95	１次外郭 S-24Ⅱ層 No.98
第19図	80	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類	腰折れ皿	13.20	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層		128	308	
第19図	81	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類	腰折れ皿	10.20	3.40	5.80	１次外郭	R-25	Ⅱ層			376	１次外郭R-25S428 dot190 No.456 、R-25 S423 dot196 No.476、R-25 dot139 No.332、R-25 S-423 No485、11次今周 RQ-24 Ⅰ層 No6
第19図	82	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ｖ類	稜花	－	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			21	
第19図	83	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅵ類	印花文	8.90	3.40	4.80	１次外郭	R-24	Ⅱ層			170	・１次外郭 R-24 S120 dot81 No225 ・１次外郭 R-25 Ⅱ層 S531 dot140 No333
第19図	84	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅵ類	印花文	9.20	3.00	4.80	１次外郭	R-24	Ⅱ層			59	１次外郭R-24S25dot52No.153、R-24 S182 No.244・、S-23 Ⅰ層 No.27
第19図	85	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅵ類	印花	9.40	2.80	4.80	１次外郭	S-24	－	S287	161	409	１次外郭 S-23 Ⅰ層 No.27
第19図	86	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅵ類	蓮弁	－	－	4.80	１次外郭	R-24	Ⅱ層		26	76	
第19図	87	屋敷地５	青磁	皿	Ⅵ～Ⅶ類		－	－	5.80	１次外郭		表採			175	
第19図	88	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅵ類	稜花	11.40	－	5.60	１次外郭	R-25	Ⅰ層			101	１次外郭 S-24 Ⅰ層 No94
第19図	89	屋敷地５	青磁	皿	龍泉Ⅶ類	腰折れ皿	13.40	－	－	11次今周	R-23	Ⅱ層		110	29	
第19図	90	屋敷地５	青磁	玉壺春瓶			－	－	－	１次外郭	R-24	土手			23	１次外郭 S-24 Ⅰ層 No60 、外郭 S-23 Ⅰ層0-10 No24、１次外郭 S-23 Ⅰ層10-20 No25
第19図	91	屋敷地５	青磁	玉壺春瓶			－	－	5.90	１次外郭	R-25	Ⅱ層	S588	198	483	１次外郭R-25Ⅱ層No.376、R-24Ⅱ層No.122、S-24S294・296 No.403、R-25Ⅰ層No.99、11次今周RQ-24Ⅰ層 No.6
第19図	92	屋敷地５	青磁	玉壺春瓶			－	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			82	１次外郭 R-25 Ⅰ層 No.101 、R-23・24Ⅰ層 No41、11次今周 R-24Ⅰ層No.8
第20図	93	屋敷地５	青磁	盤			24.20	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層		42	143	１次外郭 R-24 Ⅰ層 No.42
第20図	94	屋敷地５	青磁	盤		蓮弁	23.00	－	－	１次外郭	R-24	－	S101	75	204	１次外郭 R-24 Ⅱ層 No122
第20図	95	屋敷地５	青磁	盤		蓮弁	－	－	－	１次外郭	R-25	－	S313		424	１次外郭 R-25 Ⅱ層 No.290、１次外郭 R-24 Ⅰ層 No.38
第20図	96	屋敷地５	青磁	盤		蓮弁	－	－	7.40	１次外郭	R-24	－	S64	70	199	１次外郭 R-24 S199 dot98 No.9266、S-24 Ⅱ層 No.126、11次今周 Ⅰ層 No.13
第20図	97	屋敷地５	青磁	擂鉢		不明	20.80	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層			28	
第20図	98	屋敷地５	青磁	酒会壺	蓋	不明	－	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層		35	113	１次外郭 R-25Ⅱ層 dot33 No.111
第20図	99	屋敷地５	青磁	酒会壺	蓋		－	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			101	１次外郭 R-25Ⅱ層No318、 S-24Ⅰ層No.60 、R-25Ⅱ層 dot131 No.311、 R-25Ⅱ層 dot102 No.322、R-24Ⅱ層 No.61、R-25Ⅰ層No.8・9
第20図	100	屋敷地５	青磁	酒会壺	身		18.00	－	－	11次今周	Q-24	Ⅱ層		109	28	
第20図	101	屋敷地５	青磁	酒会壺	身		21.90	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層			376	
第20図	102	屋敷地５	白磁	碗	大宰府Ⅶ		14.00	－	－	11次今周	TP1	－			2	
第20図	103	屋敷地５	白磁	碗	F		－	－	6.90	11次今周	R-24	Ⅰ層			8	
第20図	104	屋敷地５	白磁	皿	A		13.00	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			61	
第20図	105	屋敷地５	白磁	皿	A		－	－	6.20	１次外郭	R-25	－	S442	188	470	
第20図	106	屋敷地５	白磁	碗	Ｃ３		16.20	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層 10-20			25	
第20図	107	屋敷地５	白磁	碗	Ｃ３		15.00	－	－	11次今周		Ⅰ層			9	
第20図	108	屋敷地５	白磁	碗	Ｃ３		－	－	6.40	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			6	
第20図	109	屋敷地５	白磁	碗	Ｃ２		15.60	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			97	
第20図	110	屋敷地５	白磁	杯(小皿)	D		－	－	3.70	１次外郭	S-24	Ⅰ層			33	
第20図	111	屋敷地５	白磁	杯(小皿)	D		9.40	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			87	
第20図	112	屋敷地５	白磁	杯(小皿)	D		7.90	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層			98	１次外郭 R-24Ⅱ層 No59
第20図	113	屋敷地５	白磁	杯(小皿)	D		－	－	3.60	１次外郭	S-24	Ⅱ層			126	
第20図	114	屋敷地５	白磁	皿	D’		12.30	－	5.80	１次外郭	R-24	Ⅱ層			176	１次外郭S-24Ⅱ層No.31、 R-24Ⅱ層 No.122、R-24Ⅱ層dot58 No.158・、 R-24Ⅱ層 No.61・R-24Ⅱ層 No.174
第20図	115	屋敷地５	白磁	碗	D’		14.00	－	4.40	１次外郭	S-25	Ⅰ層			136	１次外郭 S-24層No.123、底部：１次外郭 S-23 Ⅰ層No.28
第20図	116	屋敷地５	白磁	碗	D’		－	－	5.40	11次今周	Q-24	Ⅱ層		191	36	１次外郭 R-24Ⅰ層No.39
第20図	117	屋敷地５	白磁	皿	E		10.60	－	－	１次外郭	S-25 R-25	－	S629	230	560	
第20図	118	屋敷地５	白磁	皿	E		11.10	－	－	11次今周	R-23	Ⅱ層		111	20	
第20図	119	屋敷地５	白磁	皿	E		6.20	－	3.80	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			7	
第20図	120	屋敷地５	白磁	皿	E		－	－	4.00	１次外郭	R-24	Ⅱ層			125	１次外郭 R-24 Ⅱ層 No61
第20図	121	屋敷地５	白磁	杯	E		5.40	－	－	１次外郭	S-25	Ⅰ層			102	１次外郭 R-25 Ⅰ層 No80
第20図	122	屋敷地５	白磁	壺			7.20	－	－	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			7	
第20図	123	屋敷地５	白磁	壺			8.20	－	－	１次外郭	S-24	Ⅰ層			40	
第20図	124	屋敷地５	白磁	瓶			－	－	6.60	11次今周	R-25	－			8	1次外郭 R-24 Ⅰ層 No38
第20図	125	屋敷地５	青白磁	瓶	胴部		－	－	－	１次外郭	S-24	－	S378	180	430	
第21図	126	屋敷地５	元青花	盤			－	－	－	１次外郭	R-24	－	S146	88	232	
第21図	127	屋敷地５	元青花	盤			－	－	－	１次外郭	R-24	－	S62	69	189	
第21図	128	屋敷地５	青花	碗	Ⅱ		12.10	－	－	１次外郭	R-25	－	S538	214	514	
第21図	129	屋敷地５	青花	碗	Ⅱ		14.80	－	－	１次外郭	R-24	－	S152	93	237	
第21図	130	屋敷地５	青花	碗			10.70	－	－	１次外郭	S-24	Ⅰ層			34	１次外郭 R-25 Ⅰ層 No101
第21図	131	屋敷地５	青花	碗	不明	不明	－	－	5.60	11次今周	Q-24	Ⅱ層		185	33	
第21図	132	屋敷地５	青花	皿	C		11.00	2.70	2.50	11次今周	R-24	Ⅰ層			8	１次外郭 R-24 Ⅰ層 No37
第21図	134	屋敷地５	青花	玉壺春瓶			－	－	5.80	１次外郭	R-25 R-24	Ⅱ層 Ⅱ層	S542	122	303 122	１次外郭 S-24 Ⅱ層 No.95、R-25 Ⅰ層 No.86、R-24 S55 dot56 No.156、RQ-24 Ⅰ層 No.6、底部：R-24 Ⅰ層 No.42、底部：11次今周 R-24
第21図	135	屋敷地５	天目	碗			10.30	－	－	１次外郭	R-24	Ⅰ層 0-50			10	
第21図	136	屋敷地５	天目	碗			－	－	4.90	１次外郭	S-23	Ⅰ層			28	
第21図	137	屋敷地５	瑠璃釉	春瓶			6.30	－	－	11次今周		Ⅰ層			3	
第21図	138	屋敷地５	黄釉	皿			－	－	－	１次外郭	S-25	Ⅰ層			93	
第21図	139	屋敷地５	褐釉	蓋			－	－	－	１次外郭	R-25	Ⅰ層			89	
第21図	140	屋敷地５	褐釉	茶入			8.10	－	－	１次外郭	S-25	Ⅰ層			90	
第21図	141	屋敷地５	褐釉	茶入			－	－	2.10	１次外郭	R-24	Ⅱ層			122	
第21図	142	屋敷地５	褐釉	茶入			－	－	5.90	１次外郭	S-24	Ⅱ層			126	１次外郭 R-25Ⅰ層 No.101、R-25Ⅱ層No.299
第21図	143	屋敷地５	褐釉	壺			8.80	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			21	
第21図	144	屋敷地５	褐釉	壺			11.70	－	－	１次外郭	S-23	Ⅰ層			30	１次外郭 S-23 Ⅰ層No.29
第21図	145	屋敷地５	褐釉	壺			10.00	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層		103	323	
第21図	146	屋敷地５	褐釉	壺			17.50	－	－	11次今周		Ⅰ層			22	
第21図	147	屋敷地５	褐釉	壺			－	－	14.20	１次外郭	R-25	－	S534	213	570	
第21図	148	屋敷地５	褐釉	壺			－	－	10.90	１次外郭	S-24	Ⅱ層			126	１次外郭 S-24 Ⅱ層No.124

第6表　今帰仁ムラ跡（屋敷地5）出土遺物観察表（3）

図版	No	屋敷	種別	器種 時代 形式	分類	文様 等	計測値（cm※,g）※玉はmm 器:口径 他:外径 銭:外径 単位＝cm (銭以下	器高 他：厚さ 銭：厚さ 単位＝cm (銭以下	器:底径 他：重量 銭：重量 (単位=g)	遺跡名 次	地区	層	遺構	dot	No.	備考
第21図	149	屋敷地５	無釉陶器	擂鉢			23.00	－	－	１次外郭	S-25	Ⅰ層 20-40			11	１次外郭 R-24Ⅰ層No.38、胴部：R-25 S404 dot197 No.478、R-25 Ⅱ層No.116
第21図	150	屋敷地５	褐釉	鉢			45.40	－	－	11次今周	R-24 Q-24	Ⅰ層			6	
第22図	151	屋敷地５	備前焼	擂鉢			32.00	－	－	11次今周	TP2	客土			3	
第22図	152	屋敷地５	瓦質土器	擂鉢	沖縄産		－	－	－	１次外郭		表採			35	
第22図	153	屋敷地５	青磁	瓶	タイ産		－	－	－	１次外郭	R-24	－	S97	76	205	
第22図	154	屋敷地５	土器	蓋	タイ産		12.50	－	－	１次外郭	R-25	Ⅱ層		112	297	１次外郭R-25S473 dot200
第22図	155	屋敷地５	土器	蓋	タイ産		11.70	－	－	１次外郭	S-25 S-26	Ⅰ層			84	１次外郭 R-25 S333 dot165 No.402
第22図	156	屋敷地５	土器	蓋	タイ産		11.90	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層			139	１次外郭 S-24 Ⅱ層　dot149 No.369
第22図	157	屋敷地５	褐釉陶器	壺	タイ産		17.60	－	－	１次外郭	R-24	Ⅱ層		13	63	
第22図	158	屋敷地５	褐釉陶器	壺	タイ産		13.70	－	－	１次外郭	S-23	Ⅱ層 10-20			25	
第22図	159	屋敷地５	褐釉陶器	壺	タイ産		22.70	－	－	１次外郭	S-24	Ⅱ層			341	１次外郭 S-25 Ⅰ層　No.102
第22図	160	屋敷地５	褐釉陶器	壺	タイ産		－	－	22.60	１次外郭	S-24	－	S366	178	416	１次外郭 S-23 Ⅰ層　No.31
第22図	161	屋敷地５	不明	不明			11.80	－	－	１次外郭	R-24	－	S89		261	
第22図	162	屋敷地５	不明	不明			－	－	8.70	１次外郭	R-25	Ⅰ層			101	
第22図	163	屋敷地５	玉類	勾玉			長さ16.89　幅　6.39		1.13	１次外郭	R-24	－	S108	92	236	
第22図	164	屋敷地５	玉類	管玉	孔径 1.83		〃　16.49	〃　8.26	0.80	１次外郭	R-24	－	S27	54	155	
第22図	165	屋敷地５	玉類	小玉	〃　3.72		〃　9.62	〃　9.82	0.72	１次外郭		捨土				
第22図	166	屋敷地５	玉類	小玉	〃　3.46		〃　11.04	〃 12.34	1.73	１次外郭	R-24	－	S187	95	239	
第22図	167	屋敷地５	玉類	小玉	〃　1.34		〃　3.17	〃　3.82	0.05	11次今周	Q-24	Ⅱ層		127	21	
第22図	168	屋敷地５	玉類	小玉	〃　1.91		〃　3.64	〃　3.67	0.04	11次今周	R-24	Ⅰ層		104	12	
第22図	169	屋敷地５	玉類	小玉	〃　1.34		〃　2.63	〃　3.41	0.03	１次外郭	R-24	－	S75	66	186	
第22図	170	屋敷地５	遊具	碁石			〃　16.25	厚さ5.36	3.03	１次外郭	R-25	Ⅰ層			101	
第22図	171	屋敷地５	遊具	碁石			〃　17.73	〃　6.98	3.23	１次外郭	R-24	Ⅱ層		44	145	
第22図	172	屋敷地５	遊具	円盤状製品			3.24		0.94	15.54	１次外郭	R-25	－	S297		407
第22図	173	屋敷地５	遊具	円盤状製品			3.12		0.60	9.41	１次外郭	R-25	Ⅰ層			89
第22図	174	屋敷地５	遊具	円盤状製品			3.50		0.79	14.80	１次外郭	S-24	－	S277		370
第21図	131	屋敷地５	青花	碗			－	－	5.60	11次今周	Q-24	Ⅱ層		185	33	
第21図	133	屋敷地５	青花	小杯			－	－	1.80	１次外郭	R-25	－	S598	220	538	
第23図	175	屋敷地５	銭貨	宋通□寶 宋通通寶	北宋(960)	真書	25.55		1.47	2.35	１次外郭	R-25	Ⅱ層	－	134	337
第23図	176	屋敷地５	銭貨	天禧□□ 天禧通寶	北宋(1017)	真書	－		1.22	1.64	１次外郭	R-24	－	S80	73	202
第23図	177	屋敷地５	銭貨	天聖元寶	北宋(1023)	真書	24.86		1.06	2.66	１次外郭	R-24	Ⅱ	－	64	184
第23図	178	屋敷地５	銭貨	熙寧元□ 熙寧元寶	北宋(1068)	真書	24.40		1.37	2.00	１次外郭	S-24	Ⅱ	－	36	129
第23図	179	屋敷地５	銭貨	元祐通寶	北宋(1086)	篆書	23.98		1.45	3.11	１次外郭	R-25	Ⅱ	－	133	313
第23図	180	屋敷地５	銭貨	政和通寶	北(1111)	篆書	24.85		1.41	2.82	１次外郭	R-24	－	S56	－	191
第23図	181	屋敷地５	銭貨	洪武通寶 (当三銭)	明(1368)	真書	32.04		2.40	7.85	１次外郭	R-24	Ⅱ	－	39	140
第23図	182	屋敷地５	銭貨	洪武通寶 (折二銭)	明(1368)	真書	29.87		1.98	6.62	１次外郭	S-25	Ⅱ	－	204	493
第23図	183	屋敷地５	銭貨	永樂通寶	明(1408)	真書	25.08		1.35	2.18	１次外郭	R-24	Ⅱ	－	5	47
第23図	184	屋敷地５	銭貨	永樂通寶	明(1408)	真書	25.48		1.67	4.15	１次外郭	R-25	－	S473	202	491
第23図	185	屋敷地５	銭貨	不明 (折二銭)			27.15		1.23	3.49	１次外郭	R-24	Ⅱ	－	48	149
第24図	186	屋敷地５	銅製品	簪			48.23		2.86	2.23	１次外郭	R-24	Ⅱ層		19	69
第24図	187	屋敷地５	銅製品	不明			17.18		1.81	3.38	１次外郭	S-24	Ⅰ層			364
第24図	188	屋敷地５	銅製品	座金具			17.71		0.85	1.47	１次外郭	R-25	Ⅱ層			114
第24図	189	屋敷地５	銅製品	目釘			19.73		4.34	2.62	１次外郭	R-25	Ⅱ層		142	335
第24図	190	屋敷地５	銅製品	覆輪			54.13		6.49	8.99	１次外郭	S-24	Ⅱ層		37	130
第24図	191	屋敷地５	銅製品	不明			34.64		0.75	1.34	１次外郭	S-24	Ⅱ層		32	110
第24図	192	屋敷地５	銅製品	不明			23.76		0.96	1.17	11次今周	R-23	Ⅰ層		205	42
第24図	193	屋敷地５	銅製品	不明			－		0.63	8.20	１次外郭	R-25 R-25	－	S222 S222	136　147	329 382
第24図	194	屋敷地５	銅製品	不明			14.83		2.21	2.76	１次外郭	R-25	－	S222	145	381
第24図	195	屋敷地５	銅製品	不明			25.57		1.56	6.51	１次外郭	R-24	Ⅱ層		1	50
第24図	196	屋敷地５	銅製品	不明			7.52		6.02	2.13	１次外郭	S-24	－	S353	175	429
第24図	197	屋敷地５	銅製品	煙管．雁首			35.68		0.66	4.47	11次今周		Ⅰ層			9
第24図	198	屋敷地５	鉄製品	刀子			163.00		4.86	48.30	１次外郭	S-24	－	S280	162	410
第24図	199	屋敷地５	鉄製品	鉄鏃			66.08		4.08	8.94	１次外郭	R-24	Ⅱ層		174	472
第24図	200	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			80.31		6.23	25.30	１次外郭	R-25	－	S469	210	510
第24図	201	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			82.16		6.71	15.35	１次外郭	S-24	Ⅰ層			49
第24図	202	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			72.56		6.67	13.30	１次外郭	R-25	Ⅱ層			116
第24図	203	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			45.52		5.75	6.22	１次外郭	R-25	Ⅰ層			83
第24図	204	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			44.51		2.81	2.01	１次外郭	R-25	Ⅱ層			116
第24図	205	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			40.70		2.73	1.81	１次外郭	R-25	Ⅱ層	S627	156	379
第24図	206	屋敷地５	鉄製品	鉄釘			27.18		2.43	0.86	１次外郭	R-25	Ⅱ層		155	378
第24図	207	屋敷地５	鉄．青磁		附着した鉄		－		－	4.06	11次今周	R-24	Ⅰ層			8
第25図	208	屋敷地５	鉄製品	不明			115.66		3.63	92.86	１次外郭	R-25	Ⅱ層	S627	170	444
第25図	209	屋敷地５	鉄製品	不明			58.85		35.37	145.03	１次外郭	S-25	－	S628		553
第25図	210	屋敷地５	鉄製品	不明			94.91		23.00	212.96	１次外郭	R-25	－	S628		565
第25図	211	屋敷地５	石製品	不明	瑪瑙(ﾁｬｰﾄ)		31.75		4.26	1.35	１次外郭	S-24	Ⅰ層			32
第25図	212	屋敷地５	石器	砥石	玢岩		46.49		幅33.24 厚15.03	39.39	１次外郭	R-24	－	S176	96	257
第25図	213	屋敷地５	石器	砥石	粘板岩		34.19		幅35.94 厚7.90	18.35	11次今周		Ⅳ層			46
第25図	214	屋敷地５	石器	敲石	緑色岩		63.37		幅70.98 厚49.75	431.70	１次外郭	S-24	Ⅰ層			60
第25図	215	屋敷地５	石器	凹石	砂岩		131.56		幅77.10 厚54.77	1,040	１次外郭	R-24	－	S156	89	233
第25図	216	屋敷地５	石器	砥石？	砂岩		257.00		幅134.0 厚61.00	4,150	１次外郭	S-25	Ⅱ層			567
第25図	217	屋敷地５	土製品	不明			66.73		幅24.33 厚11.51	36.24	１次外郭	S-56	－	S628		546・548
第25図	218	屋敷地５	骨製品	不明	ｲﾉｼｼ牙		71.49		幅12.66 厚0.65	5.96	１次外郭	R-25	－	S314		397

第Ⅴ章　今帰仁城跡と首里城跡出土の陶磁器について

金武正紀
(今帰仁村発掘調査アドバイザー)

第１節　はじめに

今帰仁城跡と首里城跡の出土陶磁器は厖大な量であり、今回は今帰仁城主郭跡の層序で検出された陶磁器、首里城二階殿跡出土の元代後半陶磁器、首里城京の内跡出土の元代後半と明代前半陶磁器に限定して検討する。なお、陶磁器の大きさが比較できるように第３図～第12図までは５分の１で、第13図は８分の１の縮尺で掲載した。

第２節　今帰仁城主郭跡の陶磁器（註１）

今帰仁城主郭跡では第１・２図に示したように層序で陶磁器が把握された。特に第2図で色分けした、９・７・５層はプライマリーな層である。

（１）グスク前夜の陶磁器（第３図）

第９層と第７層で青磁劃花文碗と青磁櫛描文皿の小破片が２点ずつ検出された。第９層と第７層の主体陶磁器ではないので混入遺物の可能性を考えていた。それが城跡の周辺遺跡の発掘調査で多く出土することが確認された。第３図に示したのが青磁劃花文碗と青磁櫛描文皿（珠光青磁）である。この結果によって、築城前にグスクの周辺に12世紀後半から13世紀中葉にかけて集落があって人々が生活していたことが判明した。この人々が築城に直接的または間接的に関わった可能性が考えられる。

（２）第９層の陶磁器（第４図）

青磁鎬蓮弁文碗（２～９）が最も多く、第９層の主体陶磁器である。次に多いのは今帰仁タイプ白磁碗（13)、少量ではあるが白磁口禿碗（12）・皿（15）などが検出され、13世紀後半頃と考えられる。

（３）第７層の陶磁器（第５図）

第７層が今帰仁城第Ⅰ期である。土留石積、版築、掘立柱建物跡の上に堆積した遺物包含層である。第９層で主体であった青磁鎬蓮弁文碗、白磁口禿碗・皿なども出土するが、特徴的なのは、青磁ではラマ式蓮弁文碗（４）弦文帯碗（５・６)、口折皿（９～13)、酒会壺(15)などが登場することである。白磁では今帰仁タイプ碗（16～21）とビロースクタイプ碗（28～32）が多く出土することである。ビロースクタイプ碗Ⅰ類（28・29）と碗Ⅱ類（30・31・32）がこの第７層で初めて登場する。第７層は今帰仁タイプとビロースクタイプを主体とする層である。ちなみに青磁鎬蓮弁文碗（１）青磁酒会壺（15)、白磁口禿碗（22～25)、白磁ビロースクタイプ碗Ⅰ類（28・29)・Ⅱ類（30～32）等は新安沈船（1323年沈）の遺物に同タイプの陶磁器が報告されていることから、第７層は13世紀末～14世紀初頃と考えられる。

（４）第５層の陶磁器（第６図）

第５層は今帰仁城第Ⅱ期で基壇建物の時期である。第７層で多く出土した白磁ビロースクタイプ碗（９～12）は出土するが、今帰仁タイプ白磁碗は出土しない。今帰仁タイプは消えて、白磁無文外反碗(田中克子のビロースクタイプⅣ類)（14・15）が登場することが大きな特徴である。第

６図の１～７は埋められた状態で検出された一括遺物で、碗は新安沈船に同タイプが報告されている。ビロースクタイプⅣ類や高麗青磁八角杯（36）などの登場で、第５層は14世紀中葉と考えられる。

（５）第１・２層の陶磁器（第７・８図）

第１層と第２層は攪乱層ではあるが、今帰仁城第Ⅲ期の遺物が入っており、出土量は厖大である。今帰仁城第Ⅲ期は中国の『明實録』に登場する山北王帕尼芝、珉、攀安知の時代で、今帰仁城が最も隆盛期である。『明實録』には、1383年から1415年の33年間に山北王帕尼芝が６回、山北王珉が１回、山北王攀安知が１１回中国皇帝へ使者を送り、朝貢貿易を行ったことが記されている。(註2）この時期の陶磁器の大きな特徴は大型品が大量に出土することである。第８図の元代後半陶磁器がその一部である。1383年は明初であるので、少し古い元末の大型優品が今帰仁城にも入ってきたと考えられる。青磁環耳瓶（１）、青磁盤（２）、青磁酒会壺（３）、青磁器台（４）、元青花壺（５・６）、元青花盤（７）などは第Ⅲ期の大型優品である。そしてこのⅢ期に元青花が登場する。小型品では第7図の１の青磁碗、８の白磁碗、21の天目、22の茶入、24のベトナム碗などが考えられる。

今帰仁城第Ⅳ期は山北が中山に滅ぼされた1422年～1665年までのいわゆる、監守時代である。このⅣ期の陶磁器は大型品が極端に減り、碗・皿類が中心となる。第７図の青磁細蓮弁文碗（４）・雷文帯碗（３）・腰折皿（６・７）・白磁無文直口碗（９）・抉入高台皿（10・11）・青花碗（12～16）・皿（17・18）・杯（19・20）などが主な陶磁器である。

第３節　首里城二階殿跡の元代後半の陶磁器（第９・10図）(註3)

二階殿跡の陶磁器は明代前半のも多く見られるが、特に注目されるのは元代の優品が多いことである。中でも大型優品が目立つ。第９図の砧系青磁鎬蓮弁文碗（１）・皿（２）、枢府系白磁碗（３）、砧系青磁龍文大盤（４・５）、青磁大型壺（６・７）、第10図の青磁酒会壺（１・２）、元青花大盤（３）・玉壺春瓶（４）壺（５）、茶入（６）、天目茶碗（７～９）などが二階殿出土の優品である。その中で、第９図１～５の青磁、白磁は新安沈船（1323年）出土と同タイプで１４世前半と考えられる。また、第１０図の元青花（３～５）は元末と考えて１４世紀の後半前葉頃と考えられる。

第４節　首里城京の内跡の陶磁器 (註4)

京の内の陶磁器は1459年の首里城倉庫失火で焼失した一括遺物と考えられている。出土陶磁器は15世紀中頃までのもので、15世紀後半のがほとんど見られないことから1459年火災の一括遺物として一級資料である。しかし、出土陶磁器を検討してみると、元代後半と明代前半のがある。

（１）　元代後半の陶磁器（第11図）

１は「美酒清香」の文字のある青磁大型酒会壺である。

２は青磁大花瓶で、同タイプの大花瓶がイギリスのデヴィット・コレクションにみえる泰定４年（1327）(註5）と新安沈船（1323）(註6）にみえることから14世紀前半と考えられる。３の青花大合子も４の青花高足杯も元青花で14世紀中頃と考えられる。５の紅釉水注も「中国元朝の紅釉」と報告 (註4）されている。

（２）　明代前半（15世紀前半）陶磁器（第12図）

京の内跡出土陶磁器の大きな特徴は同じ種類の器種が大量に出土したことである。青磁では、蓮弁文碗（１・２）が47個、雷文帯碗（３～６）が９８個、無文碗（７・８）が60個、口折皿（９）が60個、外反皿（10）が65個、鍔縁盤（13）が５６個、直口盤（14）が47個である。青花では、

草花文碗（15・16）が87個である。白磁では、無文碗（18・19）が28個、無文皿（20～22）が30個である。このように同じタイプの器種が大量に出土したことは、後述する陶磁器の使われ方が注目される。

第５節　今帰仁城跡、首里城跡・出土陶磁器の検討

（１）築城前夜の陶磁器（註７）

今帰仁城跡では、白磁玉縁碗、青磁劃花文碗、青磁櫛描文皿（珠光青磁）など12世紀後半から13世紀前半の陶磁器が出土しているが、首里城二階殿跡、京の内跡では出土していない。この時期の人々が今帰仁城の築城に直接又は間接的に関わったと考えられる。

（２）今帰仁タイプ・ビロースクタイプ白磁碗

今帰仁城主郭跡、第９層と第７層（築城第Ⅰ期）で出土する今帰仁タイプ白磁碗と、第７層と第５層で出土するビロースクタイプⅠ・Ⅱ類白磁碗も首里城二階殿跡、京の内跡では出土していない。これらの白磁碗は13世紀後半から14世紀前半の中国元代後半の福建省閩清義窯一帯産と考えられている。（註８）これらの陶磁器が琉球に入ってくる時点まで首里城は築城されていないことが理解できる。

（３）二階殿跡の元代後半優品陶磁器と『明實録』

とにかく二階殿跡出土の元代後半の陶磁器は大型品も小型品もすべて優品である。
これらの優品陶磁器を考えるとき、どうしても気になるのが『明實録』に1回しか登場しない陶磁器下賜の記録である。（註９）《太祖實録》巻95
洪武７年（1374）12月壬辰朔
命刑部待郎季浩及通事深子名、使琉球國、賜其王察度文綺二十四・陶器一千事・鐵釜十口、仍令浩以文綺百匹・紗・羅各五十匹・陶器六萬九千五百事・鐵釜九百九十口、就其國市馬

この記録によると察度王は、中国皇帝から陶器1,000個を下賜されている。陶器の種類については明らかでないが、琉球国王への贈物なので景徳鎮の青花磁や龍泉窯青磁などの優品が含まれていたと推測される。これらの優品の一部が二階殿跡の優品であり、京の内跡の優品であると考えられる。報告書に掲載されている陶磁器と実物とを比べて調査した結果、二階殿跡で約90個、京の内跡で約20個が元代後半の龍泉窯や景徳鎮窯の優品であることが確認された。これは1,000個の11％にあたり、報告書に掲載されていない破片や二階殿跡、京の内跡以外の首里城跡の陶磁器を検討するとさらに増加すると考えられる。

これらの優品陶磁器から、中山とは首里城であり、中山察度への贈物だったと考えられる。中山は浦添城であり、察度の居城は浦添城と考える研究者もいるが、浦添城跡から発掘された陶磁器には前述の優品陶磁器はほとんど皆無である。筆者は陶磁器の研究から中山王察度の居城は首里城であったと考えられる。多和田真淳は高麗瓦の研究から「二大先輩（伊波普猷、東恩納寛惇）が尚巴志の首里遷都説をとなえているが、それは今まで高麗瓦を例にとって説明したとおりで、筆者は尚巴志説を否定し、察度首里遷都説を主張する」（註10）と察度が中山王に即位したときに浦添城から首里城へ遷都したと主張している。筆者も多和田説に賛同する。

中山王察度が中国皇帝から陶磁器1,000個を下賜されたのは1374年で中国は明初である。前述の優品は元代後半（14世紀前半～中葉）で、年代は少しずれるが、明初の陶磁器は元代後半の陶磁器に比して質が低下していたので、元代後半の優品を多く下賜したと考えられる。勿論、明初の陶磁器も含まれていたと考えられる。

（４） 大型陶磁器の登場（第８・９・10・11図）

第８～11図に示したのが大型陶磁器で、青磁の大花瓶・大型壺・酒会壺・盤など、元青花の壺、大合子、盤などである。大型陶磁器が琉球に大量に入ってくるのは琉球国が中山、山北、山南に分列していた、いわゆる三山鼎立時代で、14世紀後半である。大型陶磁器が多く出土しているグスクは中山王の首里城跡、その配下にあった勝連城跡、久米島具志川城跡、山北王の今帰仁城跡などである。大型陶磁器は三山鼎立時代の権力を誇示する一つの宝物（ほうもつ）だったと考えられる。三山が統一されてからは、首里城跡以外の今帰仁城跡を含めて極端に少なくなっている。

（５） 京の内跡の陶磁器

a） 大量の食器

前述したように、同じ器種が大量に出土している。それをまとめると第１表のとおりである。これだけ大量の碗、皿、盤が京の内の倉庫に保管されていたのは、中国からの冊封使を歓待する時や城内の諸宴など多数の人に接待するときの食器と考えられる。これはb)で述べる酒器とセットと考えられる。

第１表　京の内跡出土の碗、皿、盤の出土状況

	青　磁	青　花	白　磁
碗	蓮弁文碗　４７		
	雷文帯碗　９８		
	無文碗　６０	草花文碗　８７	無文碗　２８
	口折皿　６０		
皿	外片皿　７４		
	直口皿　６５		無文皿　３０
	鍔縁盤　５６		
盤	直口盤　４７		

京の内が首里城内の御嶽であることから、祭祀用具と考えている研究者もいるが、御嶽の祭祀用としてはあまりに一括大量であり、理解できない。当時から京の内という御嶽があったかは明らかではないが、もし当時から御嶽があったのであれば、御嶽の近くに倉庫があった可能性がある。

b） 大量の酒器（第13図）

京の内跡から出土したタイ褐釉陶器四耳壺約76個とタイ半練（土器）蓋62個が注目される。この身と蓋はセットでタイから暹羅酒を入れて運ばれたと考えられる。京の内の倉庫には少なくても62個の暹羅酒が貯蔵されていたのである。これだけ大量の酒壺からも祭祀用ではなく、接待用の酒壺だったと考えられるのが妥当である。なお、この酒器については筆者の論文（註11）があるので、それの一部を引用する。

「琉球国の古文献で最も著名な『歴代寶案』にタイ産の香花酒が登場する。例えば、成化17年（1481）３月15日、暹羅国王から琉球国王への贈物の中に、「香花酒上等貳埕　内有椰子　香花酒伍埕」が記録されている。埕とは壺のことであり、タイ国王から琉球国王へ壺に入った酒が贈られたことが明確に記されている。その壺とはどのようなものであったか、また、その壺の蓋はどのようなものであったか。筆者はその壺と蓋の解明を1991年、「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」と

いう論文で発表した。それは今帰仁城跡出土のタイ産褐釉陶器壺と半練（土器）蓋である。今帰仁城跡では半練（土器）蓋に本来なら対応するはずの半練（土器）の身は１片も発掘されていないが、タイ産の半練（土器）の蓋と褐釉陶器四耳壺が多く発掘された。そこで、壺口部の狭い所の内径と蓋の直径を計ることによって、その組み合わせを試みたところ、ほとんどの蓋が大型の褐釉陶器四耳壺に対応することがわかった。このことから、タイ産の褐釉陶器壺に香花酒などの暹羅酒が入れられ、半練（土器）蓋をかぶせて運ばれたと考えた。この論証を決定づけたのは、現在でも中国の紹興酒が、中国産褐釉陶器壺に入れられ、タイ産の半練（土器）蓋に似た中国産の素焼きの蓋をかぶせ、その上から石膏をかぶせて運ばれているのを那覇市の中華料理店で確認した。この蓋はタイ産の半練（土器）蓋のように丁寧な作りではないが、外側で反り上がり、中央につまみがあるなどの特徴が類似している。タイの香花酒もこれに似た輸送方法で琉球国へ運ばれたと考えられる。

『歴代寶案』に出てくる琉球国王の居城は首里城であった。したがって首里城跡で前述の説が証明できればとずっと考えてきたのであるが、1995年、沖縄県教育委員会による首里城京の内跡の発掘調査でそれが証明された。この発掘調査の報告書が1998年3月に刊行され、その中に出土遺物が詳細に分析されている。それによると、タイ産の褐釉陶器壺（土器）蓋が大量に発掘されている。その中で金城亀信は個体数として数えられるものとして、壺が76個体、蓋が62個体と報告している。この数字から壺と蓋がほぼ同数出土しており、少なくても62個体のセットが考えられる。また、京の内跡の資料から、タイ産の褐釉磁器壺には大型だけではなく、中型、小型もあり、直径がほぼ12cm以上の蓋が大型壺に、直径がほぼ12cm以下の蓋が中型、小型の壺に対応するものと考えられる。この組み合わせを第13図に試みた。ちなみに、大型壺には約２斗（36リットル）前後、中型壺が約１斗（18リットル）前後、小型壺が約５升（９リットル）前後の酒が入っていたものと考えられる。

首里城京の内跡で陶磁器が大量に出土した所は1459年に消失したと記録されている倉庫跡で、中国陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、備前などの陶磁器が、個体数で1160点以上出土している。碗、皿、杯、盤などの食器類が大量に出土していることから、冊封使などの接待、または城内の宴などに使用する為に納められていたものではないだろうか。それらの陶磁器と一緒にタイ産の褐釉陶器壺にはタイ国から運ばれてきた「香花酒上等」や「香花酒」などが入れられ、半練（土器）蓋をかぶせて貯蔵されていたものと考えられる。香花酒上等とは「古酒」にあたるかもしれない。これらの香花酒は接待用の酒として倉庫に貯蔵されていたものと考えられる。それを示す史資料として、1534年に琉球に来た中国の冊封正使陳侃は著書『使琉球録』にそのときの接待用の酒について、「王奉酒勧、清而烈、来自暹羅者、・・・・其南蕃酒則出自暹羅、釀如中国之露酒也。」（国王がすすめてくれる酒は清くて強烈だった。その酒は暹羅から来たもので、造り方は中国の蒸留酒と同じ）と述べている。首里城内での冊封使の接待用にタイの酒が使われていたことがはっきりと記されている。首里城京の内の倉庫にタイの褐釉陶器壺に入れられた香花酒などの暹羅酒が60個以上も並べられ、それが冊封使の接待用などに使用されていたと考えると爽快である。酒は今も昔も人と人の付き合いに欠かせないものであることを教えてくれる資料である。

なお、『李朝實録』の中の世祖恵荘大王實録（1461年）の琉球に漂流した朝鮮人（尚得誠等８人）の記録に「江辺に城を築き、中に酒庫を置く、房内に大瓷を排列し、酒醪盈溢す。123年の酒庫に分ちて其の額を書す」と記されていて、「江辺に城を築き」は那覇港内にある御物グスクを示していると嘉手納宗徳は述べている。(註12) 酒庫の中には大きな壺に入れられた１年酒、２年酒、３年酒の酒が並べられていたと記されている。首里城京の内の倉庫に入る前に御物グスクの酒庫に納められていたと考えられる。』

第６節　おわりに

以上、今帰仁城跡出土の陶磁器と首里城跡出土の陶磁器の特徴的なことについて述べた。
（１）　今帰仁城跡の第9、7、5層の古い陶磁器
（２）　二階殿跡出土の元代後半の優品陶磁器と京の内跡の伝世優品
（３）　京の内跡の冊封使や城内諸宴用に使われたと考えられる同器種大量出土陶磁器
（４）　三山鼎立時代の大型優品陶磁器
　　の４点に焦点を絞って考えてみた。

今後の大きな課題として琉球の貿易港の特定が急がれる。
その中で、那覇港（渡地地区）の発掘調査が平成17年度に沖縄県立埋蔵文化財センター、平成18、19年度に那覇市教育委員会文化財課によって発掘調査が実施され、現在も続いている。この調査で那覇港が14世紀後半から15、16・・・そして現在まで貿易港として使われたことが明らかとなった。これは琉球の対外貿易を考える上で実に大きな成果である。前述の『李朝實録』の中に「市は江辺に在り。南蛮・日本国・中原の商船来り、互に市す。」(註12) とあり、江辺とは那覇港の埠頭一帯で、そこで市が開かれていたのである。那覇港が国際貿易港であることを示す重要な史資料である。しかし、12世紀から14世紀前半までの貿易港はまだ不明である。那覇港の前は泊港で、その前は牧港であったと歴史研究者は述べているが、その証拠はない。筆者は安謝川に注目している。安謝川河口から上流に向かう右手に多和田川（タータガーラ）という支流があり、多和田川の上流では銘苅川（メカルガーラ）と大湾川（オオワンガーラ）の二つの支流に分かれる。これらの支流に面する丘陵上に12～14世紀前半の遺跡がいつくも形成されている。多和田川の南岸丘陵上に安謝前東原遺跡・安謝東原南遺跡 (註13)、北岸丘陸上に銘苅原遺跡 (註14) ・銘苅原南遺跡 (註15)、銘苅川の北岸丘陵上にヒヤジョー毛遺跡 (註16)、大湾川の西岸に直禄原遺跡 (註17) が形成されている。

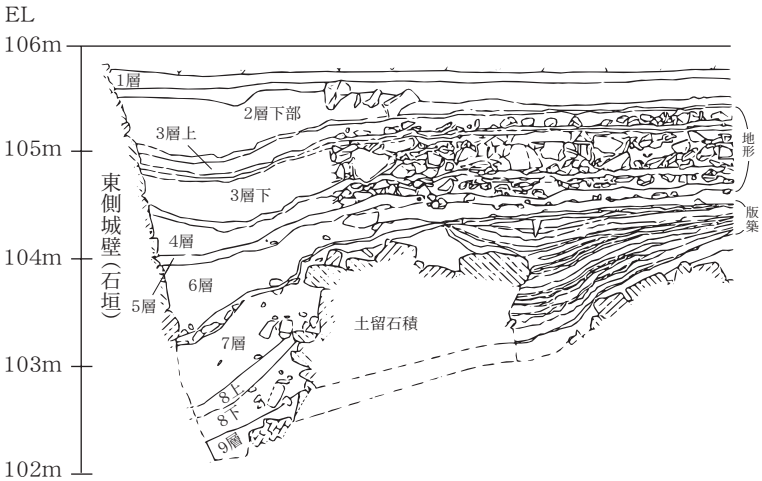
これらの遺跡からは12～14世紀前半の白磁玉縁碗、青磁劃花文碗、カムイヤキ須恵器、今帰仁タイプ、ビロースクタイプなどが多く検出されている。このことから安謝川に貿易船が入港し、そこから支流沿いに上陸し、そこに多くの遺跡が形成されたと考えられる。今後港の発掘調査によって物的証拠が期待される。

註１　金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会　1991
２『中国・朝鮮の史籍における　日本史料集成明實録之部Ⅰ』　国書刊行会　1975
３　金城透・瀬戸哲也・片桐千亜紀・知念隆博他『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』沖縄県立埋蔵文化財センター　2005
４　金城亀信・上原靜・城間肇他『首里城跡―京の内地区発掘調査報告書―』沖縄県教育委員会　1998
５　長谷部楽爾ほか『デヴィッド・コレクション中国陶磁展』日本経済新聞社　1980
６『新安海底遺跡』同和出版公社（ソウル）　1983
７　金武正紀「考古学から見る今帰仁城跡の歴史」『グスク文化を考える』新人物往来社　2004
８　田中克子「ビロースクタイプについて」『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究―中国福建省を中心に―』熊本大学文学部　2006、2007
９　中国明代の資料で、日本史科集編成編纂会編『中国、朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部（一)』国書刊行会　1975年
10 多和田真淳「首里城の古銭と首里遷都」『琉球新報』1965年10月4日～8日
11 金武正紀「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『高宮廣衞先生古稀記念論集　琉球・東アジアの人と文化』上巻　高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会　2000

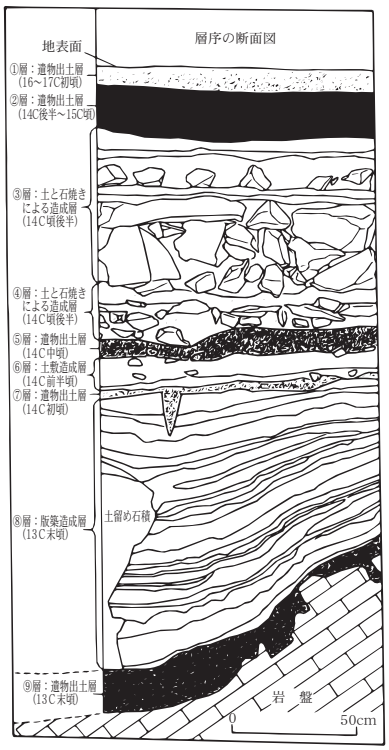
12 嘉手納宗徳「李朝実録抄解題」『日本庶民生活史料集成』第27巻　三一書房　1981
13 島弘・玉城安明・仲宗根啓他『安謝東原遺跡』　那覇市教育委員会　2000
14 金武正紀・島弘・玉城安明・仲宗根啓他『銘苅原遺跡』　那覇市教育委員会　1997
15 當間麻子・當銘由嗣・仲嶺久里子『銘苅原南遺跡』　那覇市教育委員会　2002
16 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』　那覇市教育委員会　1994
17 樋口麻子・當銘由嗣・仲宗根久里子『銘苅直禄原遺跡』　那覇市教育委員会　2003

今帰仁城主郭跡の層序と陶磁器

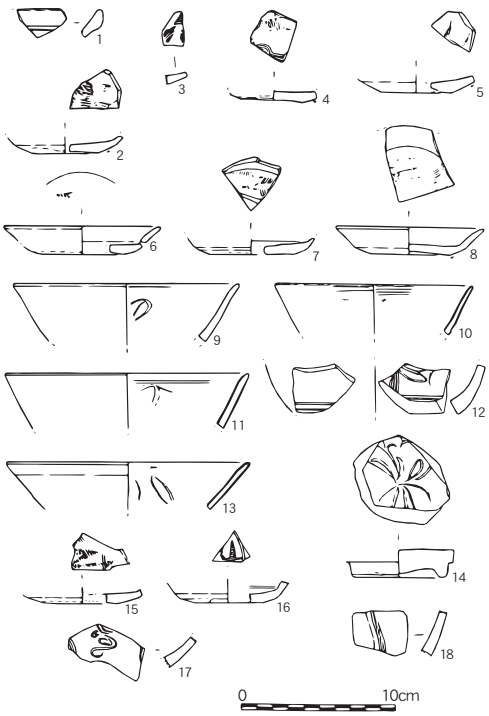
（第1図～第8図）



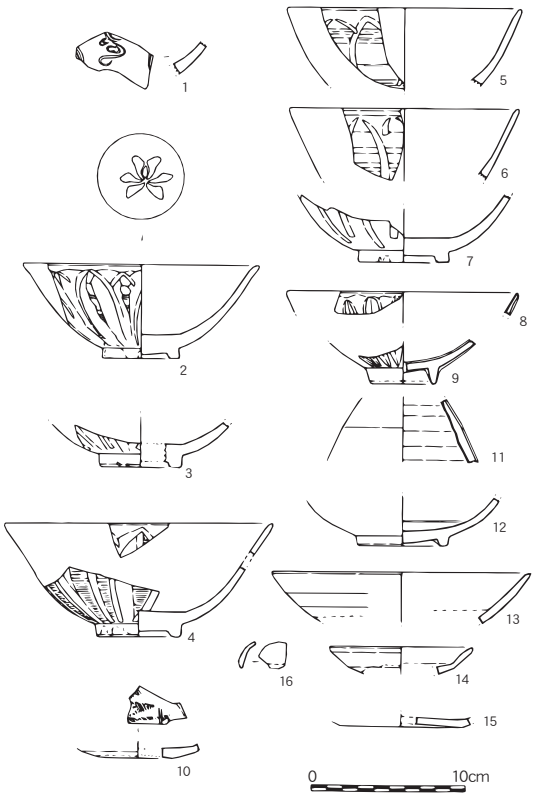
第1図　主郭東西トレンチ層序断面図



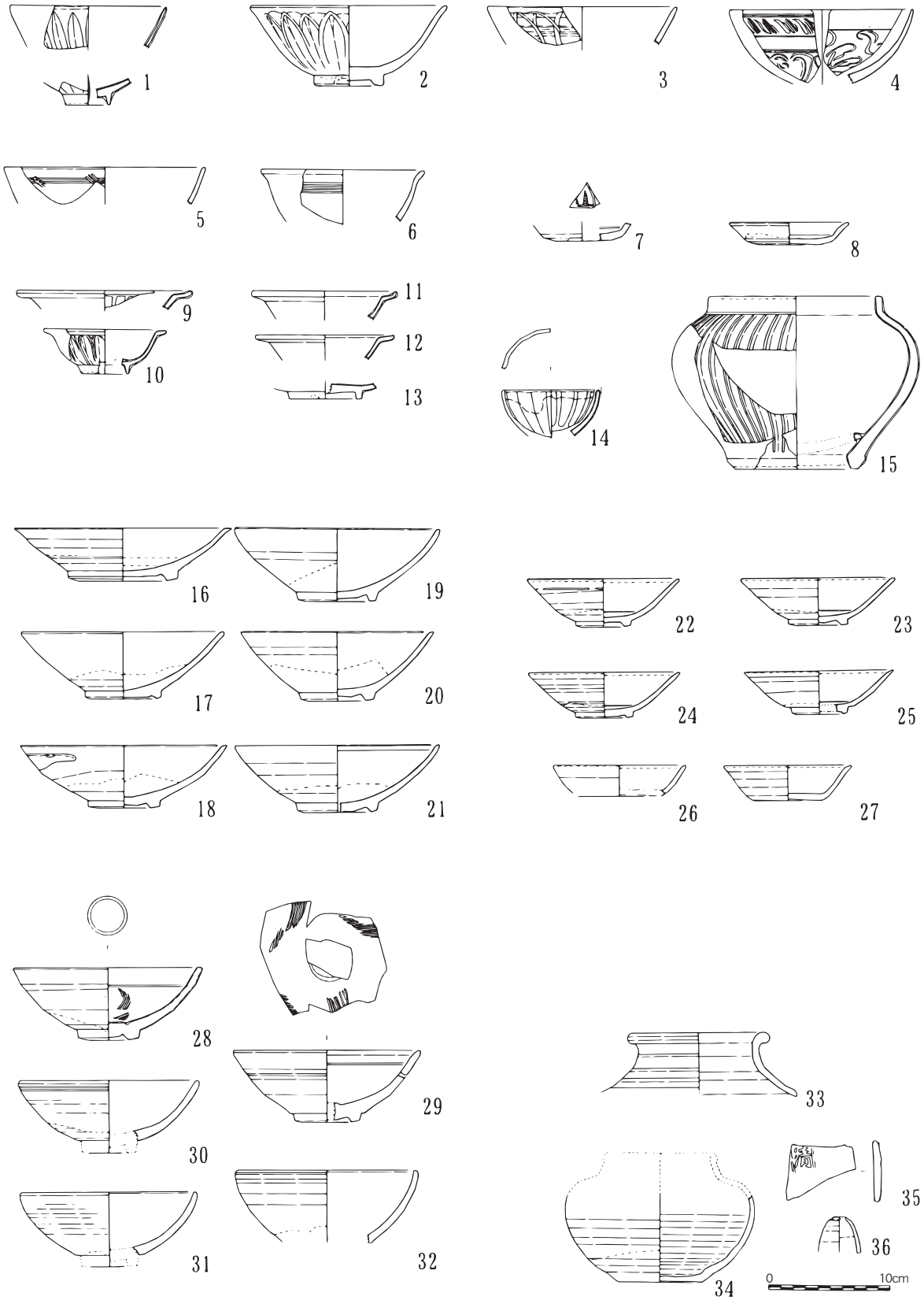
第2図　第1図の拡大図



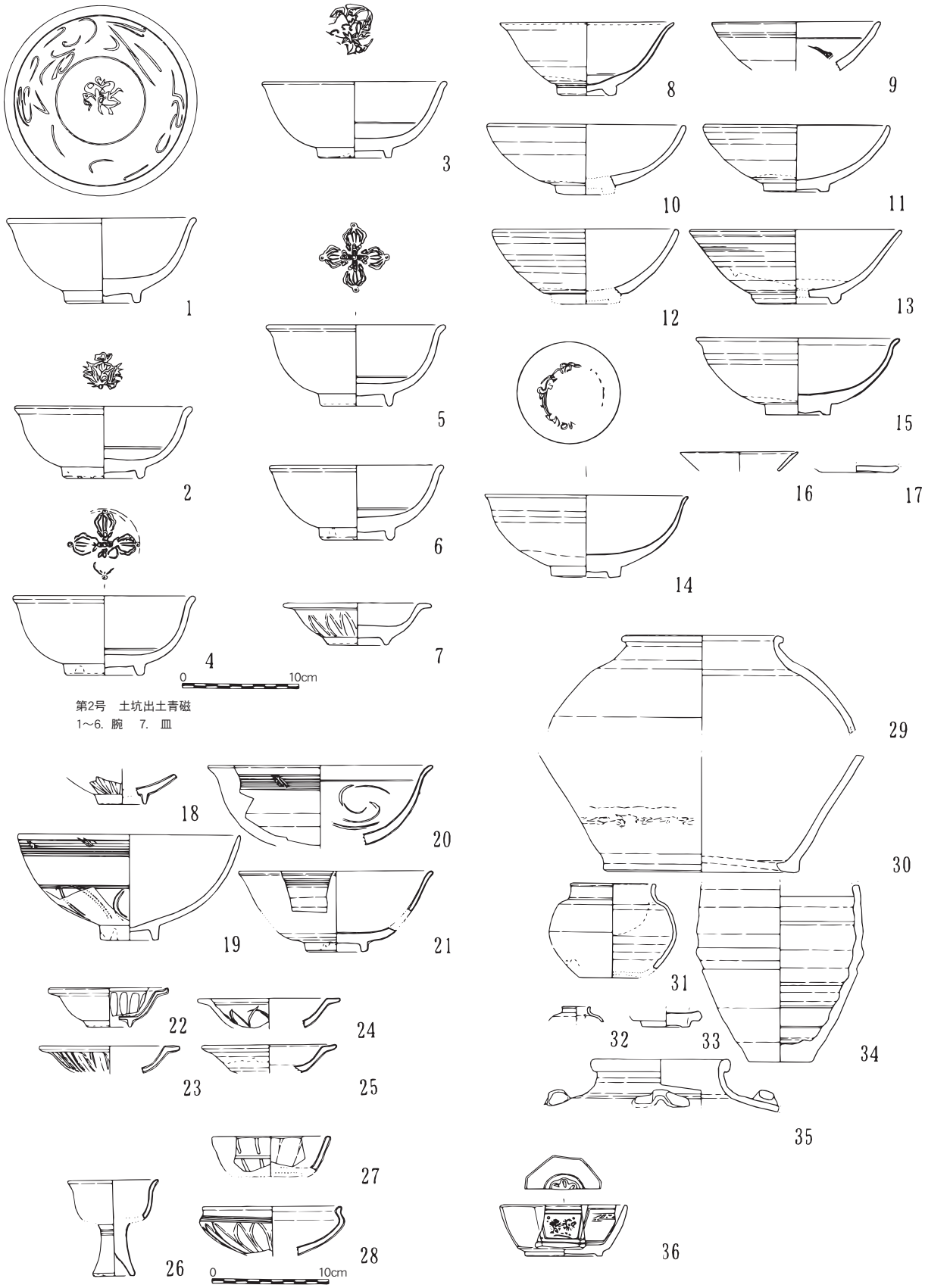
第3図　グスク前夜の陶磁器
1～14　今帰仁ムラ跡（屋敷地1・3・4その他）
（12世紀後半～13世紀中葉）
15～18　主郭9層（15・17）と7層（16・18）



第4図　第9層出土陶磁器　1～9 青磁碗
10. 同皿　11. 同瓶　12・13白磁碗
14・15. 同皿　16. 青白磁合子



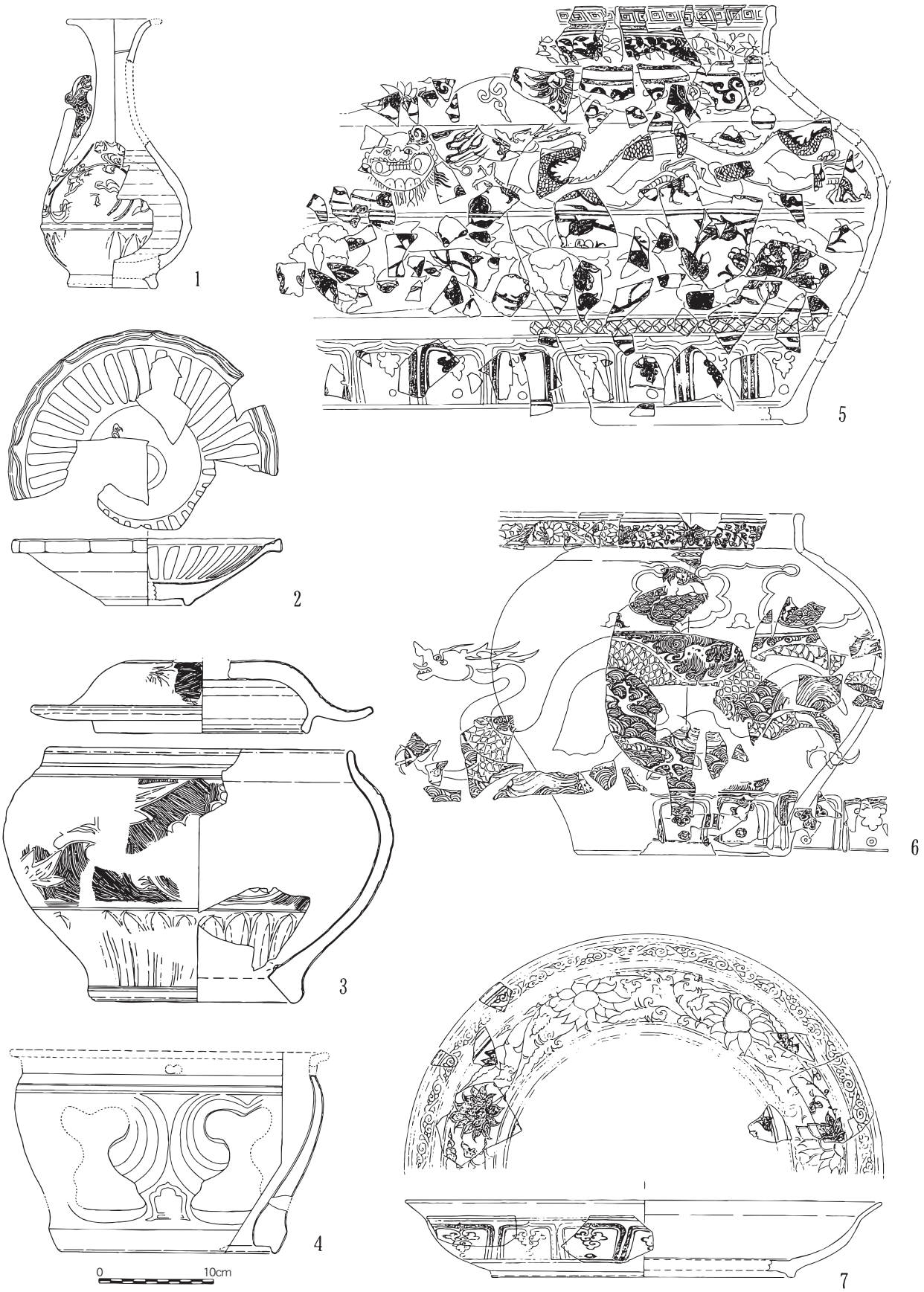
第5図　第7層出土陶磁器：1～15. 青磁　16～32. 白磁　33～36. 褐釉陶器



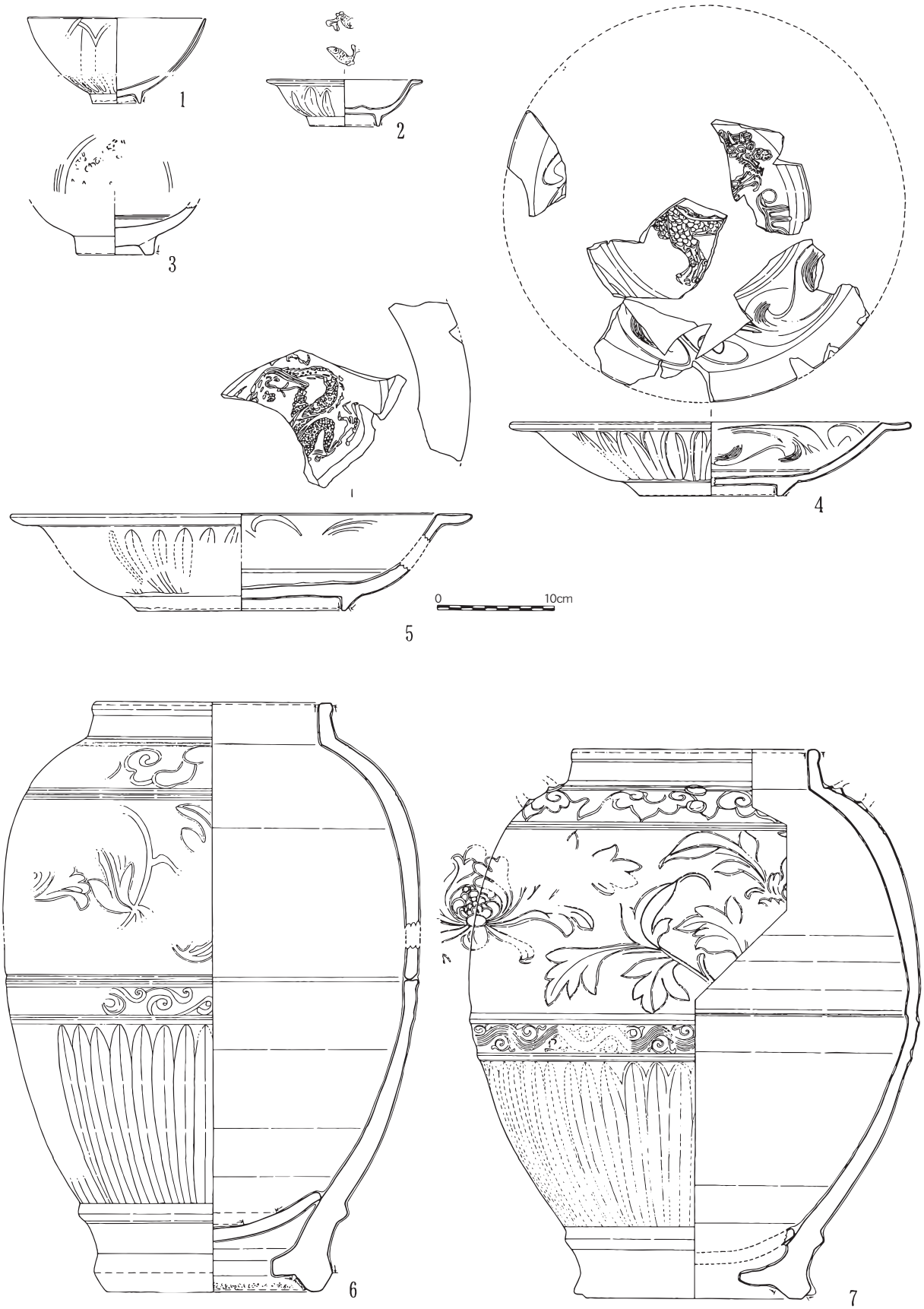
第2号　土坑出土青磁
1～6. 腕　7. 皿

第6図　第5層出土陶磁器：1～7. 青磁一括遺物、8～17. 白磁　18～28. 青磁
29~35. 褐釉陶器、36. 高麗青磁

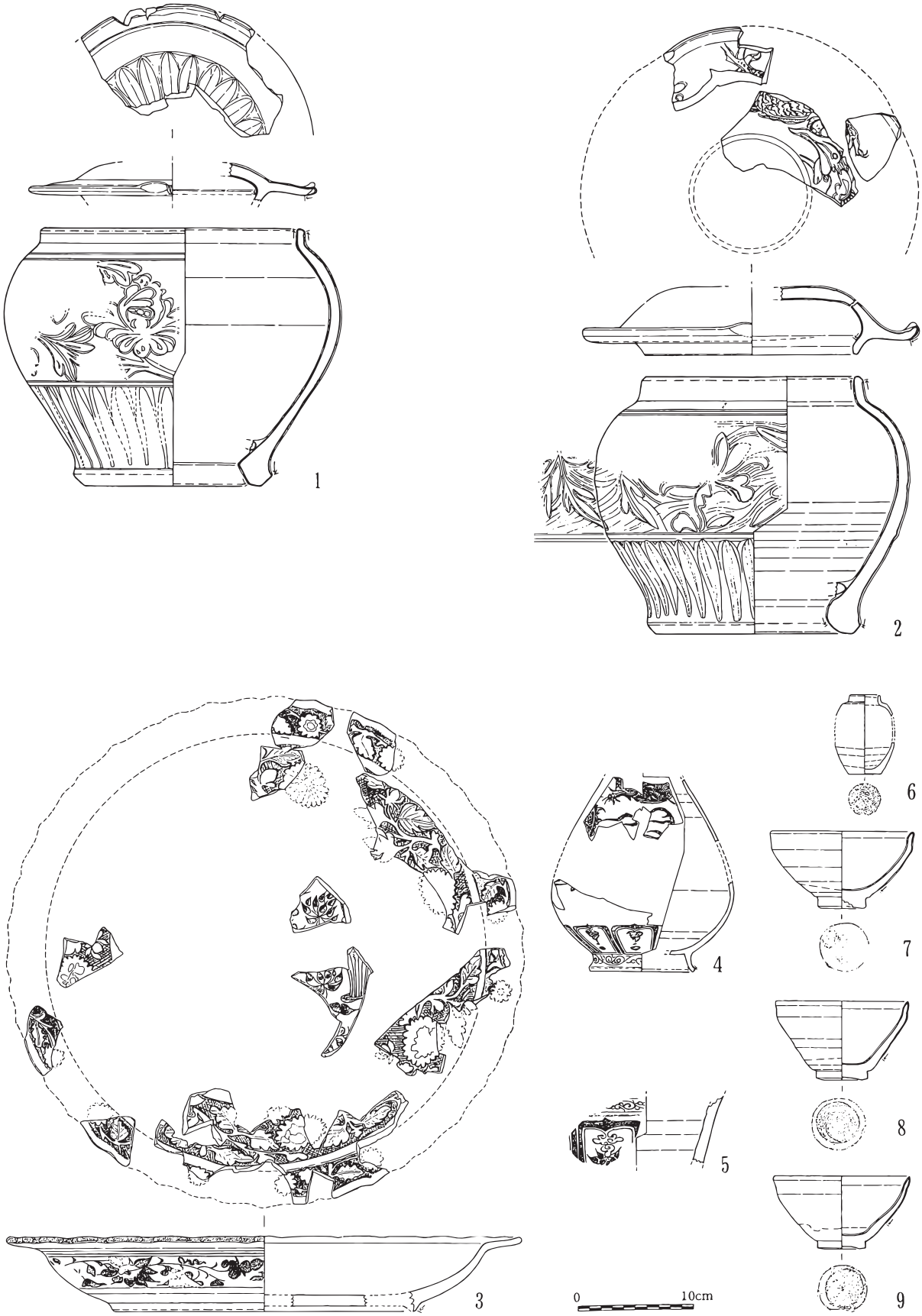
第7図　第1・2層出土陶磁器：1〜7. 青磁、8〜11. 白磁、12〜20. 青花
21. 天目、22. 茶入、23. タイ鉄絵合子、24. ベトナム青磁碗、25. 李朝象嵌青磁碗



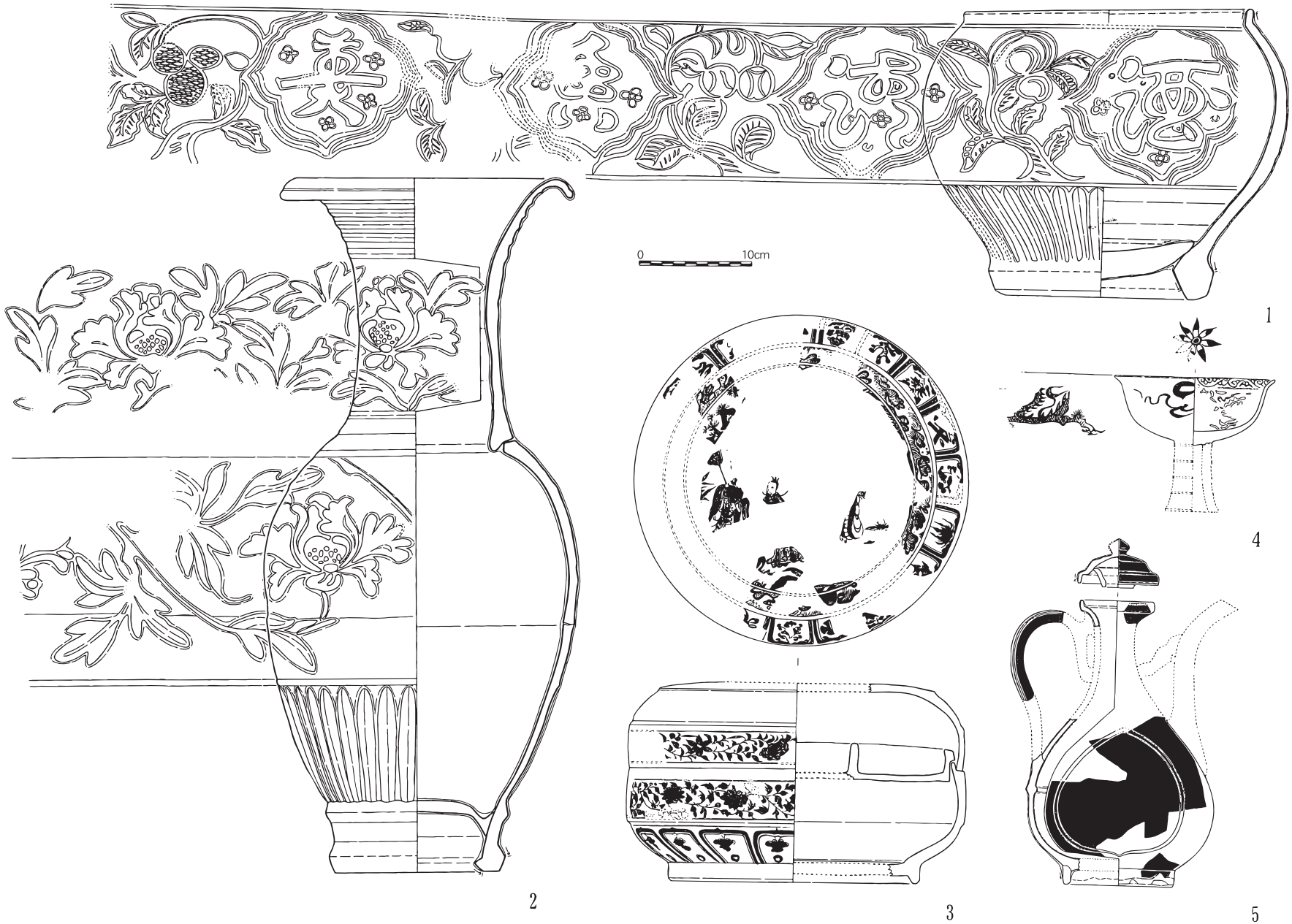
第8図　今帰仁城主郭跡出土の大型元代後半青磁・青花
（5～7は亀井明徳氏ほか専修大学研究チーム作成図2007年）



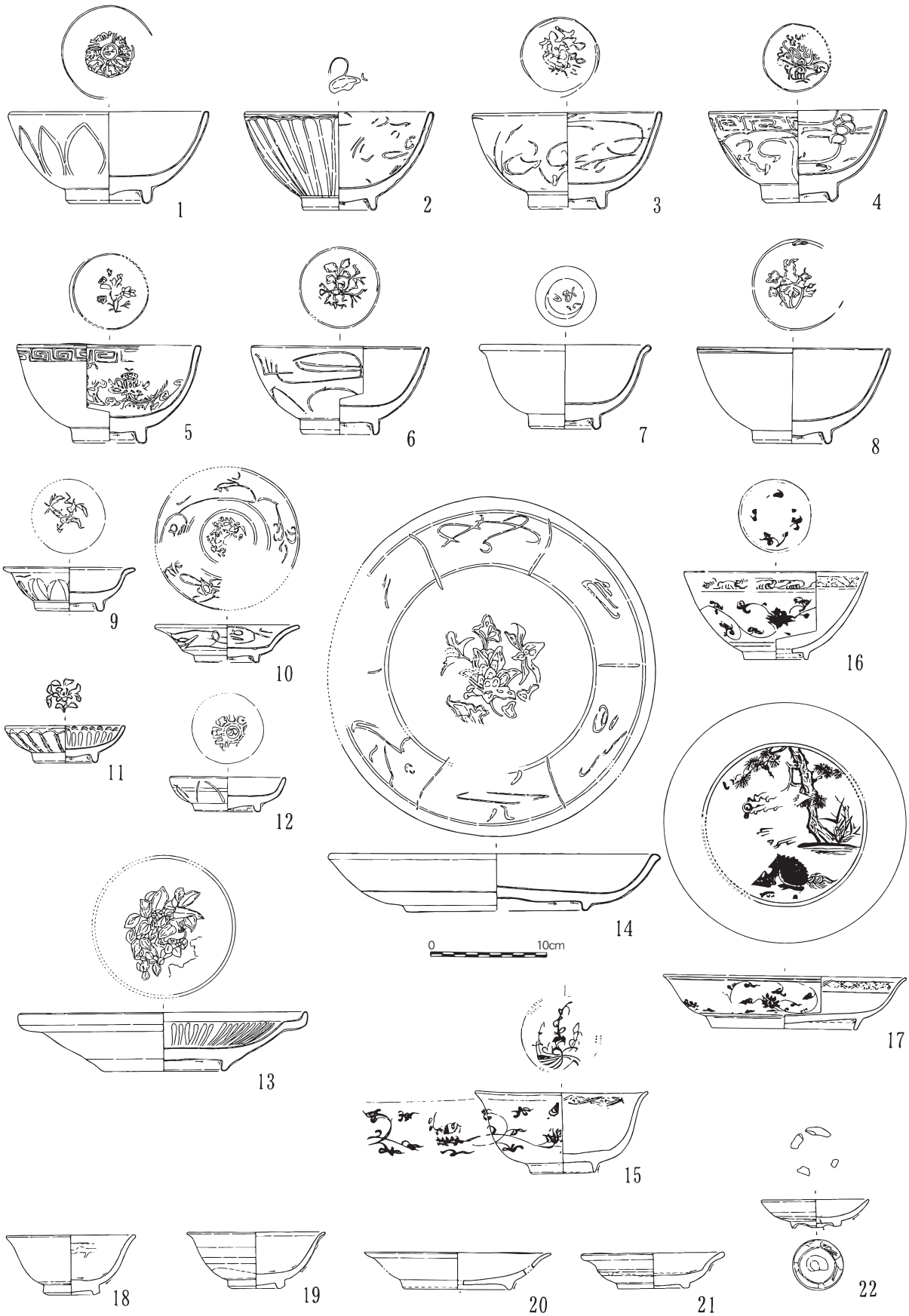
第9図　首里城二階殿跡出土の元代後半青磁・白磁



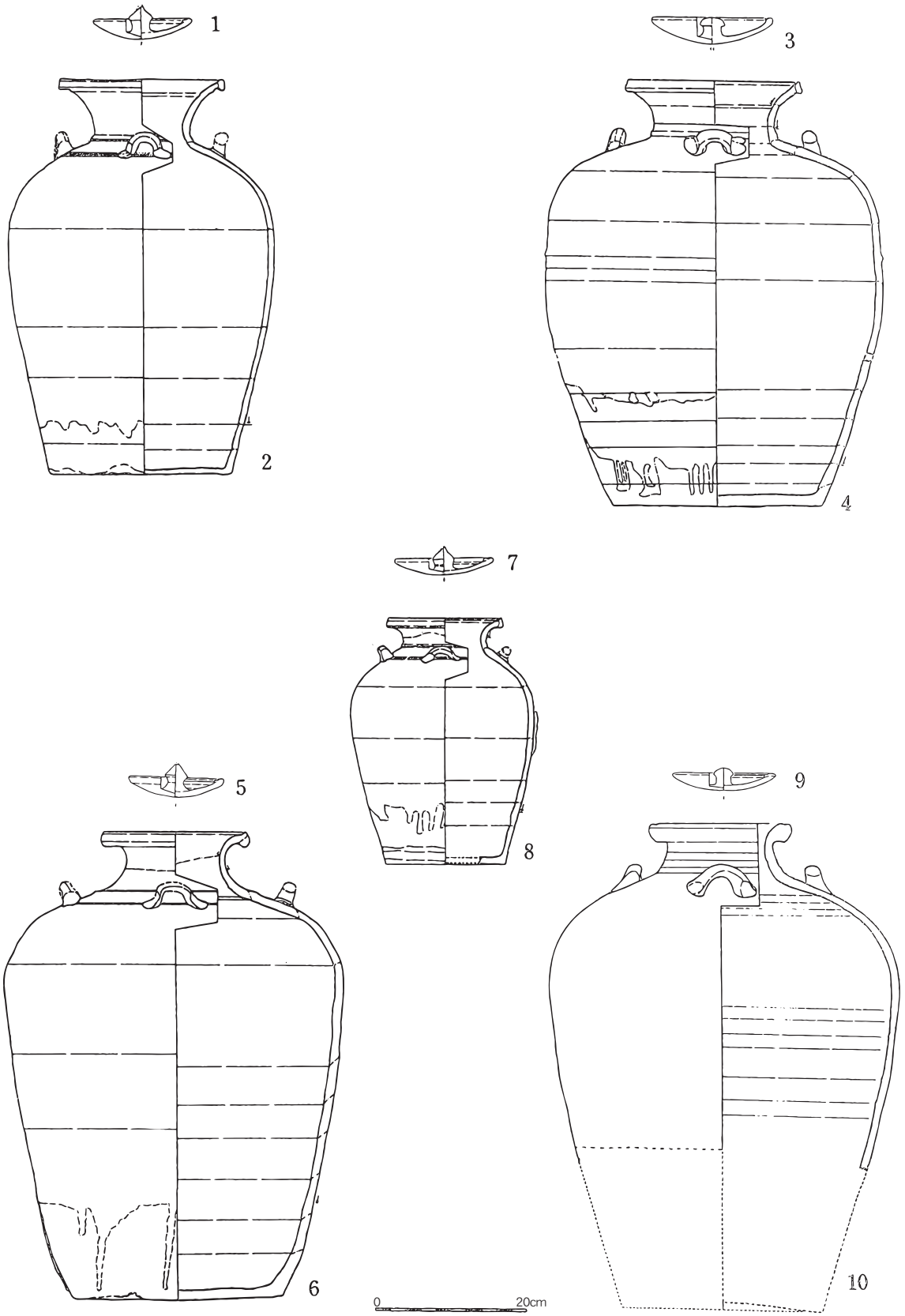
第10図　首里城二階殿出土の元代後半青磁・青花・茶入・天目



第11図　首里城京の内跡出土の元代後半青磁・青花・紅釉



第12図　首里城京の内跡出土の明代前半碗・皿・盤：1～14青磁、15～17青花、18～22白磁



第13図　タイ陶器　半練蓋と褐釉陶器四耳壺セット（1～8. 首里城、9・10. 今帰仁）

第Ⅵ章　今泊の集落景観と保全

高橋誠一*・松井幸一**・松井僚平***

第１節　今泊集落の概要

（１）今泊の成立

今泊は今帰仁村の西端に位置する集落である（図１）。人口は1091人、戸数は343戸、全面積は約4.63km²で、今帰仁村の総面積の約12％を占める（図2）。気候は亜熱帯気候で、土壌は主に石灰岩のアルカリ性土壌と、非石灰岩の賛成土壌に大別される。石灰岩質の土壌は水持ちが悪く乾燥しやすいため、あまり農業には使われないが、セメント剤などに利用される。非石灰岩質の土壌は水はけがよく、農作物の栽培に適している。今泊では特にこの気候と土壌を生かしたサトウキビ栽培や野菜農業が盛んである。集落内にはフクギ（福木）やハイビスカスなどの植物が生い茂り、亜熱帯ならではの植生を見ることができる。

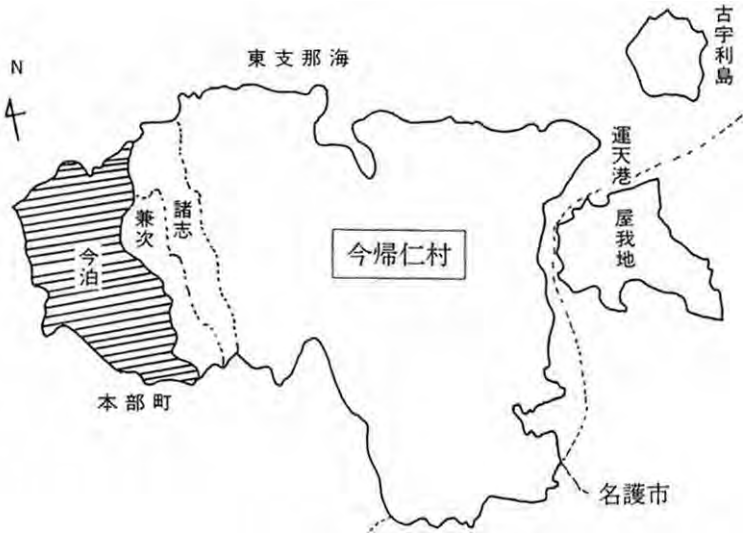


図１　今帰仁村における今泊の位置『今泊誌』より

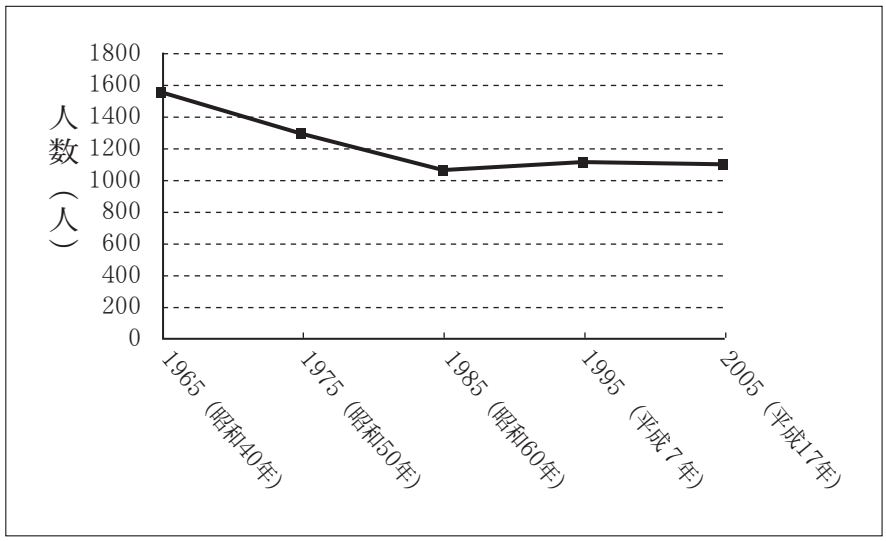


図２　今泊の人口推移
『今泊誌』、平成7年・平成17年度国勢調査より作成

*　関西大学文学部教授
**　関西大学大学院博士課程後期課程
*** 関西大学大学院博士課程前期課程

今泊の南にある県道115号線をさらに南に行くと、世界遺産今帰仁グスク跡があり、2000年12月に開催されたユネスコの世界遺産委員会で、座喜味グスク跡、勝連グスク跡、中グスク跡、首里グスク跡、園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園、斎場御嶽とともに今帰仁グスク跡の九つの資産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産リストに登録された（今帰仁村村役場2005）。特に今帰仁グスクは、今泊の成り立ちや歴史と深く関わるもので、琉球が中山に統一される前の「北山王の時代」（13世紀末～1416年）において北山の中心であった。北山が中山に統一された後は、琉球王国から派遣された監守という役人の居城であり、監守一族が首里城に引き上げるまでを「北山監守の時代」（1422年～1665年）と呼んでいる。また，1609年には薩摩軍の琉球侵攻による今帰仁グスク焼き打ち事件が起こっており、この事件は近世の今泊の歴史に大きな影響を及ぼした（今泊誌編集委員会1994）。

今泊は明治期に今帰仁村と親泊村の二村が合併してできた村である(図3)。北山王の時代以前には今帰仁村、親泊村ともに今帰仁グスクの麓に存在していた。その後の移動については未だ不明な点も残るが親泊村の方が今帰仁村より早い時期に現在の位置に移動していたのは文献より明らかである。

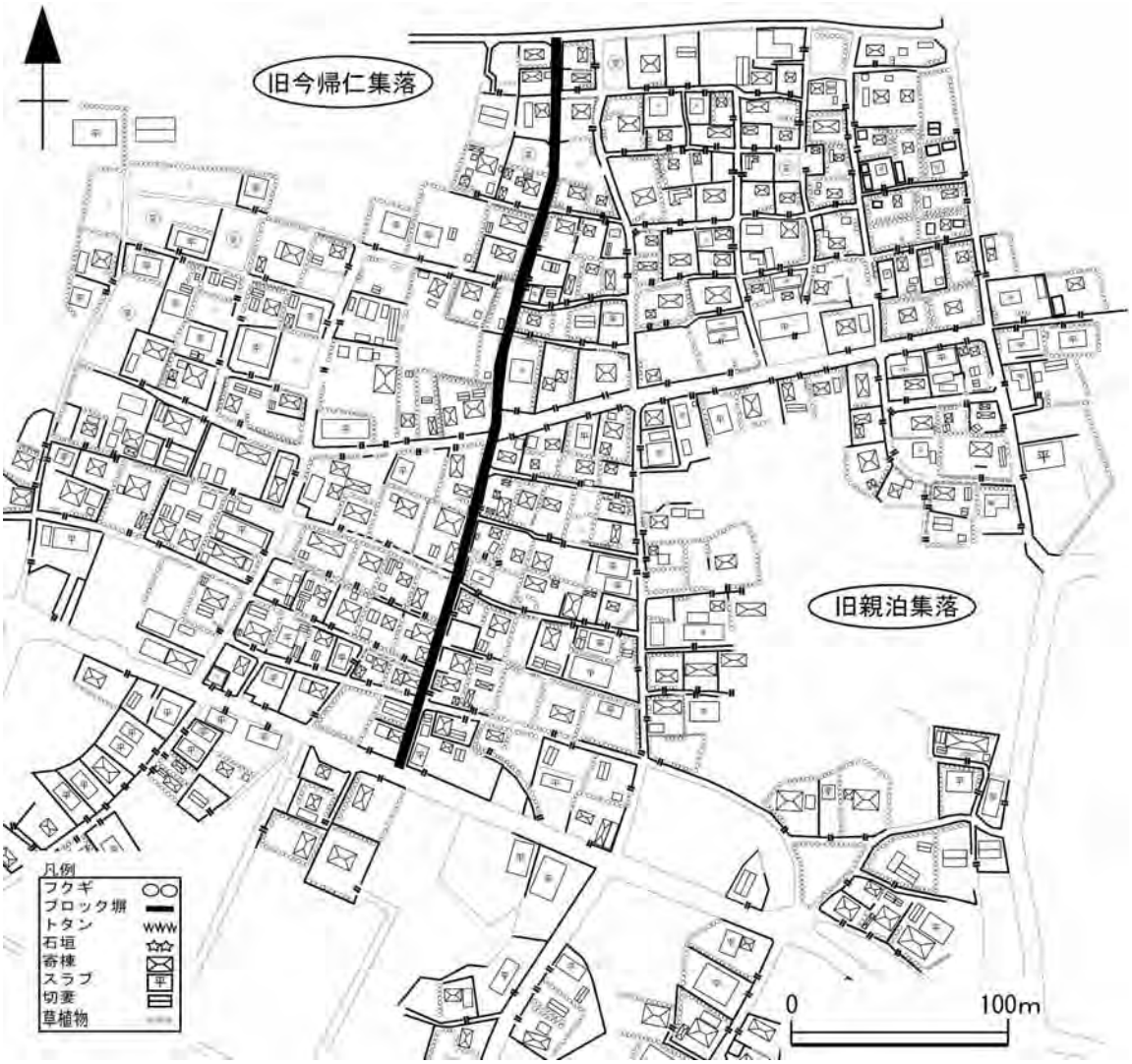


図3　旧今帰仁集落と旧親泊集落

今帰仁村の移動については諸説があるが、薩摩軍の琉球侵攻の際の今帰仁グスク焼き打ちや監守の城下への移居という歴史的状況から考えると、17世紀前半頃に移動したと考えるのが自然であろう（高橋誠一2003）。二村の性格の違いはその名前にも現れており、今帰仁村はグスク（今帰仁グスク）との結びつきが強く、親泊村は泊（港）との結びつきが強い。
1903年（明治36年）の土地整理に伴い二村は合併し、今帰仁村の「今」と親泊村の「泊」をとって「今泊」となった。この際,「今泊」の呼び方は、より大きい字であった親泊の読み方であるイェードゥマイをそのまま踏襲したため、「今泊」＝イェードゥメと呼ぶ。しかし，3年後の1906年（明治39年）に再び分離し、「今帰仁」「親泊」となっている。その後しばらくは分離時代が続くが、1973年（昭和48年）再度合併して「今泊」となり現在に至る。1906年に分離した理由は定かでないが、分離中も祭祀や豊年踊り等の行事、耕地整理、夫役賦課、土木事業、原取締り等の合同事業を実施する際は、必ず両字民全体による「ニカジェリー」の会議が先行しており、両村が互いに協力し合っていたことが分かる。

（２）今泊の先行研究

今帰仁村では「村内遺跡発掘調査事業」に伴い埋蔵文化財の発掘調査および分布調査をおこなっている（今帰仁村教育委員会2007）。調査報告書では今帰仁ムラ跡について発掘調査からアタイ原における今帰仁ムラ跡を確認し、親泊ムラ跡については地形から想定した傾斜面や地籍から判断される筆界など地理学的知見よりムラ跡を想定している。これによれば現今泊集落にあたる今帰仁ムラおよび親泊ムラは今帰仁グスク前面のアタイ原に存在し、今帰仁ムラ、親泊ムラ両者ともに4ha程度であったと比定されている。

仲原は今帰仁村内の集落移動に関しては①ムラ全体が他の地域に移動②ムラ内の集落の一部が移動③ムラ内での集落移動の３つに区分できることを指摘しており、石野は今帰仁、親泊の両ムラが移動して現在の今泊集落を形成していく過程を「ムラ内での集落移動」と表現し（石野2004）、今帰仁ムラの移動は，ムラの範囲のなかで集落が移動していった「ムラ内での集落移動」であるとした。今帰仁ムラの移動に関しては従来より『具志川家家譜』に「村遠相成城之住居不自由有之，高祖父代今帰仁村江引越申候･･･」の記述があることから、薩摩の琉球侵攻の後にムラが移動したとされている（今帰仁村教育委員会歴史資料館準備室1990）が、さらに石野は今帰仁ムラ跡の立地する「アタイ」という地名が通常ムラの集落部分につけられる地名であり、他の字ではアタイ原には神アサギや、村屋がありムラの行政中心であることからアタイ原が今帰仁ムラの行政中心地であったことを指摘している。一方、親泊ムラの移動に関しては薩摩による琉球侵攻を記録した「喜安日記」に親泊の地名が見られることから1609年には集落が海岸部に近いところにあった（仲原1990）とされる。石野も親泊という地名が「立派な港・大きな港」の意味を持つことから1609年には集落が海岸部に移動していた可能性を指摘している（石野2004）。

伝承によらず地理的手法を用いた研究としては高橋の地筆を主とした分析があげられる。高橋は地籍図から今帰仁ムラ跡の考察をおこなっており、今帰仁ムラ跡をシニグンニ、阿応理屋恵按司火神、今帰仁ノロ殿内、古宇利ノ火神を経て今帰仁グスク跡の正門へと続く地筆群であると考えた。さらにムラ内部における地筆のまとまりの差異から今帰仁ムラ跡は「阿応理屋恵按司火神地筆群」と「古宇利ノ火神地筆群」に分けられると指摘した（高橋2003）。また、今帰仁ムラ跡の1筆あたり平均面積が現今泊集落西部の今帰仁における1筆あたり平均面積と近似している点を踏まえ、従来から指摘されてきた今帰仁ムラ跡はその可能性が高いとした。一方、親泊ムラ跡についても地筆と面積の関係を考察しており、従来から指摘されてきた親泊ムラ跡では地筆が不足している点を考慮して、親泊ムラ跡はさらに北方にまで範囲が広がり、明確な塊村としての形態を持たない比較的ルーズな集落であったと推定している。

上記の研究が地名、文献、地筆などから景観を復原しているのに対して、坂本は民家、施設、宅地割、道路配置を集落景観の景観要素と捉えその特徴を論じている（坂本1989）。 この調査は沖縄の集落で幅広く行われ今泊集落も含まれるが、悉皆調査が行われているのは今泊西側の今帰仁原のみである。

これら既往研究を踏まえ渡具知は今泊集落の悉皆調査を行い、宅地割の特徴をもとに今帰仁村における集落の景観的な特徴を考察している（渡具知2004）。考察の中では親泊原の宅地割について①横一列型、②横二列型③田の字型が混在し、今帰仁原についても同様の順番で宅地型が混在することから両者ともに「規則的宅地割集落」とはいえず、宅地割の変容過程から今泊集落は1737年以前の古い集落形態であることを指摘している。

また渡具知は今泊集落の景観要素として「屋敷森」の存在を挙げて福木の分布調査を行っている。調査では多くの屋敷が福木を植えているが、海側に立地する屋敷ではブロック塀や福木と松の混在も見られ集落内の景観の差を明らかするとともに、親泊原の福木は今帰仁原に比べ古い福木が多く見られることから集落形成時期の違いを表すものであるとしている。さらに親泊原では集落の東側に福木が鬱蒼としていることから集落を森林で取り囲むという「風水思想」が親泊集落にも当てはまることを明らかにした。

調査対象地は異なるが漆原も沖縄県渡名喜島において屋敷囲いの特色と変遷を調査し、台風時の風向きや風速を加味してこの地域の強風に対する工夫の特色を指摘した（漆原2007）。なかでもフクギに関しては防風林としての役割を指摘しており、今泊においても名喜島と同様の役割を有しているのであろう。

先行研究では目的別に地名、文献、地筆などから景観を復原したものと集落内の景観要素から集落景観を明らかにするものとが挙げられた。本論では後者の景観要素を対象とする方法により今泊の集落景観を調査した。

（3） 今泊の景観要素

今泊の集落景観を現す要素には様々な種類のものがある。本調査では主な景観要素を①信仰に関係するもの、②村の歴史や地割りに関係するもの、③植物など自然に関係するもの、④建物など土地利用に関係するもの、⑤その他として現代的な要素の５つに分類した。この中で特に今泊の景観に影響を与えていると思われる要素を太字で示した(表1)。

本論では数ある景観要素の中から特に、福木、家屋（石垣，塀，トタンも含む）、石敢當について考察を行う。

表１　景観要素の分類　（家屋調査カードをもとに作成）

①信仰	②村の歴史・地割	③植物・自然	④土地利用	⑤現代的
拝　所	道　路	**福木（雑木林）**	**家　屋**	車
石敢當	**石　垣**	庭の草木	公民館	駐車場
墓　地	**塀（もとは石垣）**	蝶	公　園	**トタン（塀、補強用）**
井　戸	井　戸	花	畑	電　柱
シーサー	コバテイシ	海岸	ペンション	ミラー
ハサギ（アサギ）	**福木（屋敷林）**		商　店	ゴミ捨て場
	今帰仁城		会　社	看　板
				バス停

第２節　調査の目的と方法

（１）調査目的

本論では今泊集落の先行研究で未だ調査が不足しているより詳細な家屋調査、フクギの分布，石敢當の位置や形を調査し補うこと、及び今泊集落の景観図を作成することを目的とする。今泊集落が今帰仁グスクのふもとに広がる“沖縄らしい”町並みの良さと知ってもらい、景観保全の一助になればと思う。

また、今泊集落が今帰仁城の周辺から現在の場所に移動してきたことは、今帰仁グスク一帯の歴史を考える上で重要な意味をもっており、今帰仁グスクからハンタ道を経由し、現今泊集落へとつながるこの一帯をひとつの歴史的意味のある空間として捉える必要がある(図4)。今回の調査において、今泊集落の現状を把握し景観を復原することで、この地域の独自性を見出していきたい。

図4　今帰仁グスク周辺地図
今帰仁村文化財調査報告書第24集
『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』より

（２）調査方法

今泊での現地調査のために，以下のような手順で景観図を作成した。

（ア）何を調査すれば今泊の景観を図にすることが可能か検討する。
（イ）家屋調査カード、石敢當調査カードを作成する。
（ウ）調査項目を選定する。
（エ）今泊を4つの担当地区に分ける。

・調査日時…2007年10月3日～10月5日
・調査場所…沖縄県今帰仁村字今泊
・調査形式…担当地区の家屋を一軒ごとに回り，事前に作成した家屋調査カードを用い調査を行った。項目は、日付、担当者名、番号、屋根の構成、塀の構成、母屋の構成、母屋の構造、母屋の色、付属屋の有無（有る場合はその棟数)、シーサーの有無、付近の新施設の有無、石敢當の有無、錦塀の有無、全体の見取り図などで、可能な限り詳細に調査を行った。また、家屋は写真を撮影し、後に確認できるようにした。

　石敢當調査でも詳細なデータを取るために事前に石敢當調査カードを作成し、集落内の調査を行った。項目は日付、担当者名、番号、材質、大きさ（縦×横)、古さ、形状、書体、設置場所である。また、家屋調査と同様に全ての石敢當について写真を撮影し、後に確認ができるようにした。

　これらの調査で得た情報を基に、今泊の景観を構成する重要な要素である家屋、フクギ、石敢當について考察し、今泊の景観図を作成する。

（３）作図過程

（ア）調査カードに一軒ごとの詳しい方角と見取り図を書き込みながら現地調査。
（イ）調査カードを基に住宅地図をトレースし、地区ごとに景観図を書きおこす。
（ウ）曖昧で判別が不明な点を撮影した写真で確認しながら仕上げる。

(エ) 住宅地図をスキャナーを用いてパソコンに取り込む。
(オ) 取り込んだ住宅地図上に（イ）で作成した景観図をIllustratorを用いて描き入れる。

第３節　今泊の集落景観

本論では今泊集落において主な景観要素である『石敢當、石垣、塀、フクギ、家屋（付属屋を含む)、トタン』を中心として調査を行った。

沖縄の集落研究としては坂本による緻密で且つ、正確な家屋調査が行われており、その調査項目は母屋の構成、付属屋の種類など、多岐にわたるとともに多くの集落が取り上げられている。(坂本1989）今回の調査地である今泊集落もその中の1つとして調査されているが、1983年の調査報告であることを考えると、現在までの24年の間に様々な変化を見ることができるであろう。

本節では今泊集落での調査によって作成した集落内の詳細な景観図を基にした分析を行った。

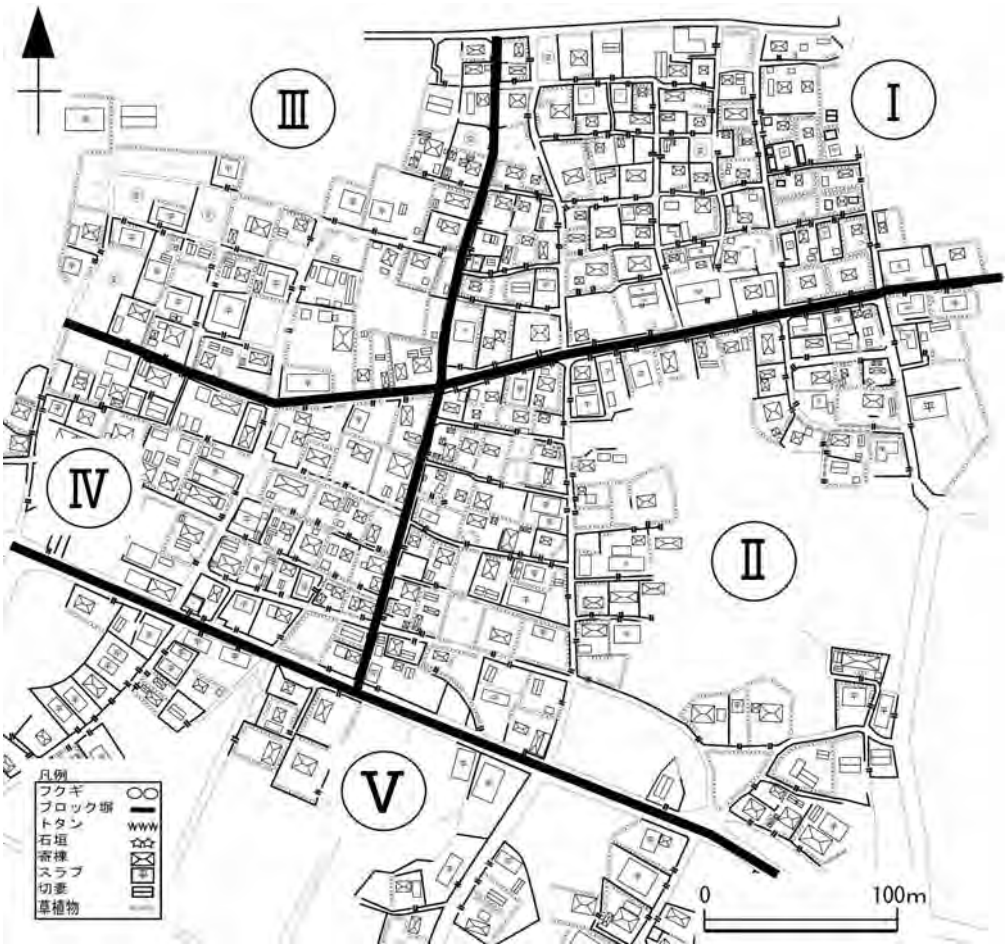


図5　今泊集落の地区分け

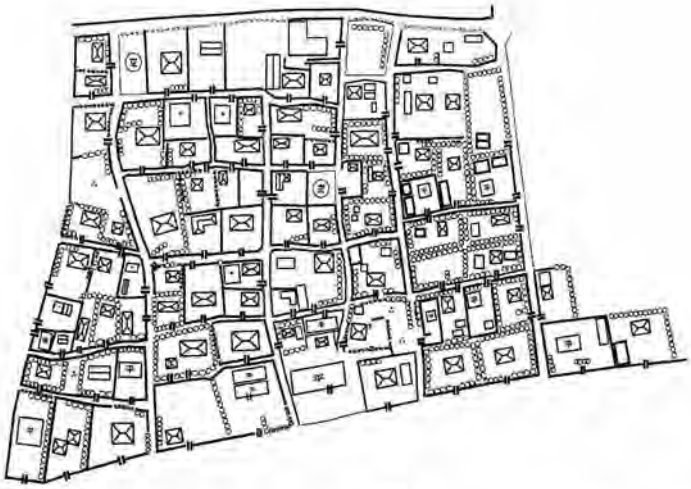


図6　Ⅰ地区

図7　Ⅱ地区

凡例
フクギ
ブロック塀
トタン
石垣
寄棟
スラブ
切妻
草植物

0　100m

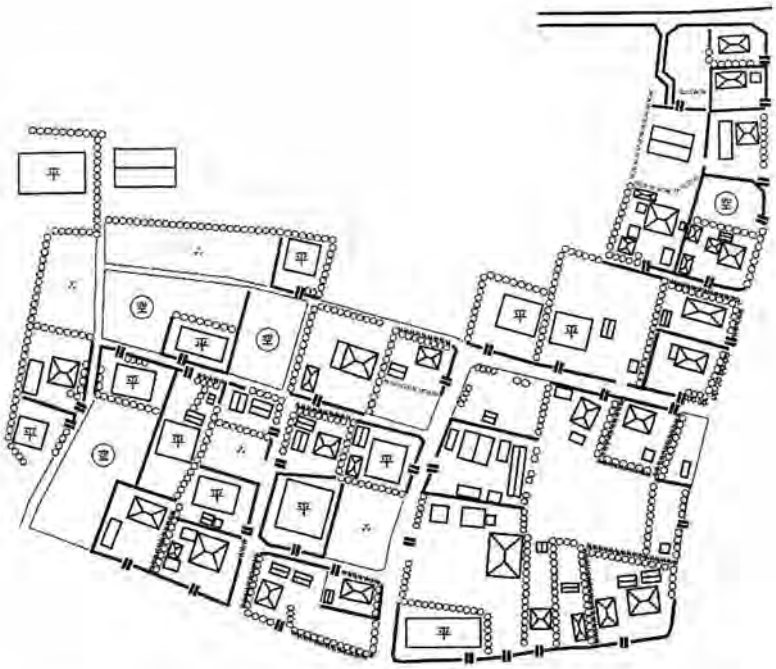


図8　Ⅲ 地区

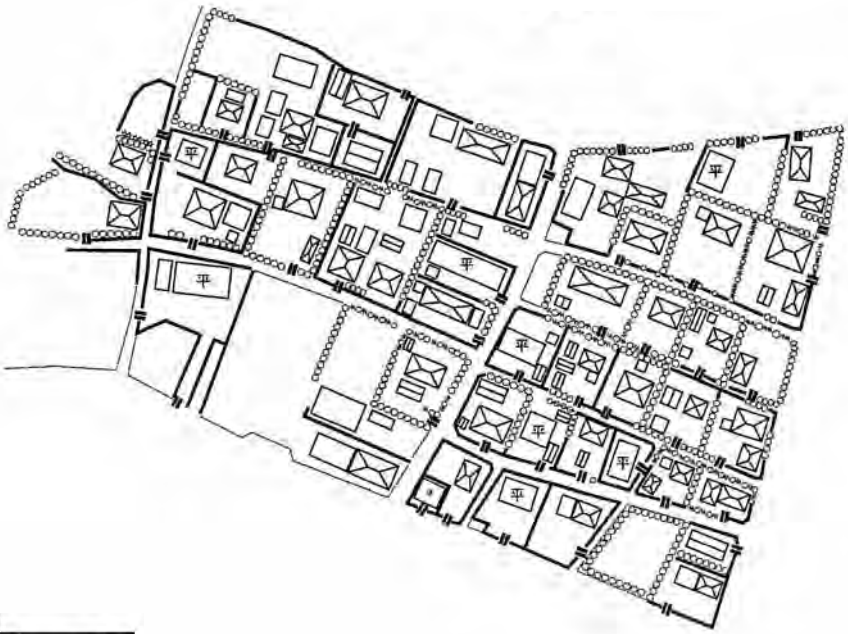


図9　Ⅳ 地区

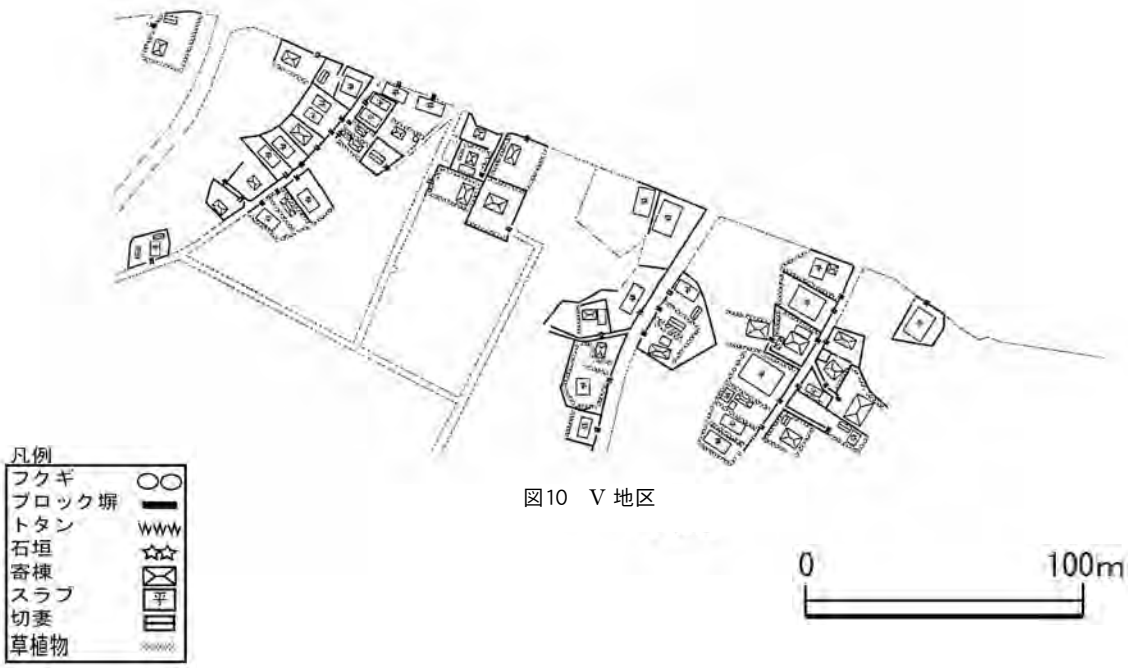


図10　V 地区

表２　今泊集落の家屋統計

	I 地区	II 地区	III 地区	IV地区	V 地区	合計
①屋根の構成						
木製	0	0	0	0	0	0
コンクリート	13	20	11	7	26	77
トタン	5	4	2	2	5	18
セメント瓦	47	50	14	14	23	148
赤瓦	4	6	2	4	3	19
スレート	0	2	1	0	2	5
木製＋瓦	0	1	0	0	0	1
コンクリート＋瓦	8	1	3	11	3	26
コンクリート＋瓦＋赤瓦	0	0	0	1	0	1
コンクリート＋赤瓦	0	0	3	1	0	4
トタン＋瓦	3	1	1	2	0	7
②母屋の構成						
寄棟	39	54	15	17	21	146
スラブ	13	20	11	9	25	78
切妻	5	8	3	2	4	22
寄棟＋スラブ	6	3	4	13	3	29
寄棟＋切妻	9	0	0	0	4	13
寄棟＋スラブ＋切妻	4	0	1	0	1	6
スラブ＋切妻	3	0	3	0	4	10
方形	1	0	0	1	0	2
③母屋の構造						
鉄筋コンクリート	47	55	24	26	51	203
木造	31	24	11	13	10	89
その他	6	6	2	3	2	19
④付属屋の有無						
0個	22	32	13	15	41	123
1個	32	32	13	12	19	108
2個	20	18	7	14	3	62
3個	5	2	3	1	0	11
4個	3	1	0	0	0	4
5個	2	0	1	0	0	3

※今泊の集落調査では家屋調査カードにチェックリスト組み込み、そのリストの統計を基に上記の表を作成した

（1）今泊集落の家屋と屋敷囲い

1）屋根の材料

屋根の構造は主にセメント瓦を使用しており、総家屋数306軒中148軒がセメント瓦で構成される。次いでコンクリートで構成されている屋根が多く77軒である。これらの屋根は南西諸島に多く見られる屋根で、多発する台風の多雨・強風から母屋の崩壊を防ぐために用いられている。その他にトタンやスレートなどで構成される屋根もあるが、それぞれ18軒、5軒と多くはない。戦前・戦後の住居状況調査（表３）では戦前にスラブ屋は存在しないが戦後には65軒へと増加している。また、トタンで構成されている家屋も戦前には存在しないが、戦後には9軒に増加している。これらを考えるとスラブやトタン・スレートなどは、沖縄戦後のアメリカ統治下の時期より使用されるようになったと考えられ、沖縄独特のアメリカからの影響の1つと言えるであろう。

一方、穴屋・茅葺屋・竹葺屋・アマライ瓦屋は戦前から戦後にかけて姿を消している。赤瓦屋は住居状況調査では13軒から3軒へと減少しているが、本調査では19軒へと増加傾向にあった。

表３　字今泊　戦前・戦後住居状況調査

	戦前	戦後
スラブ屋	0	65 (22)
赤瓦屋	13	3
アマライ瓦屋	6	0
セメント瓦屋	5	220
竹葺屋	41	0
茅葺屋	151	0
トタン葺屋	0	9
穴屋	25	0
計	241	297(22)

（『今泊誌』より転載）

2）母屋の形式

前述したように瓦屋根の母屋が多いため、寄棟の母屋が149軒とほぼ半数を占めている。次いでコンクリート造のスラブ、トタンやスレートの切妻の順で構成されていくが、「寄棟+スラブ」「寄棟+切妻」「スラブ+切妻」といったような複合して形成されている母屋も少なくない。これは母屋と付属屋を複合することで母屋は広くなり、また付属屋と同様の役割を母屋に作り出しているのである。

3）母屋の構造

主に鉄筋コンクリートで建築されており、全体の70％弱を占めている。これも夏季における台風対策の１つであり、台風に弱い木造の母屋は30％にも満たない。また沖縄戦における家屋の損害により、木造から実用性を重視して鉄筋コンクリートへと移行していった。

4）付属屋の有無

付属屋が無い家屋が123軒と多数を占めている。しかし，付属屋を有する家屋数は全体で188軒あり、付属屋の個数で換算すると311個の付属屋が今泊の集落には確認できた。「２）母屋の構成」で述べた複合家屋を合算すると、375個となり母屋の軒数を上回り、一家に1.2個の割合で付属屋が存在しているということになる。地区別にみるとI地区が特に多く、3個以上敷地内に付属屋を持っている家屋は84軒中10軒であり他の4地区よりも多い。その一方で、V地区は付属屋の無い家屋が圧倒的に多く、全体の10％以上を占めている。

（2）今泊集落景観図からの考察

本節では作成した集落景観図から今泊集落の考察をおこなう。この景観図は、家屋調査から得られたデータをもとに門戸の向き、家屋の配置や種類、付属屋の配置や種類などを再現した。
作成図は細密に復原したため集落全体図では分かりにくい部分があるので、I～Vの５つの地区ご

とに考察を進めていく。（図6～10参照）考察対象は、門戸の向き、母屋の種類・向き・配置、付属屋の配置、屋敷囲いの種類についてである。

a 門の向き

門の向きは、南北方向の門が多くなっており、I～Ⅳ地区で見られる傾向として、南向きの門が多いことあげられる。特に南向きに門を設置する家屋が多く、Ⅰ地区では45/84軒、Ⅱ地区では29/85軒、Ⅲ地区では15/37軒、Ⅳ地区では24/42軒、Ⅴ地区では3/64軒となっている。しかし、馬場と呼ばれる集落の中心に位置する大きな道に面する家屋では、馬場に向けて門を設置することが重視されている。南向きに門を設置する要因としては北方および北西からの強い浜風の影響が大きいと考えられる。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ地区では南向きの門戸は全体の50％程度であるが、南方に進むにつれてその数は減少していき、Ⅴ地区にいたっては4％程度にまで減少している。これは北方および北西から吹く強い浜風がⅠ・Ⅲ・Ⅳ地区では強く吹き付けるが、南に位置するⅡ・Ⅴ地区周辺では衰えるからであろう。

また門の向きと母屋の向きを照らし合わせると、南向きに門を設置している母屋の多くは門と同様に南を向いており、浜風は母屋の後方から吹きつける。Ⅰ地区では44/45軒、Ⅲ地区では15/15軒、Ⅳ地区では24/24軒がこのような家屋構成になっており、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ地区の門の向きは浜風を十分に意識していることが見て取れる。さらにこれらの地区では門の向きと母屋の向きとが一致していない家屋であっても北向きに母屋が建てられている家屋は4軒と少ない。しかし、Ⅱ地区においては17軒と他の地区に比べて多く存在する。これは北方に位置している浜辺からⅡ地区が離れているため浜風が弱まることが関係しているであろう。

家屋形式は表から見られるように、寄棟の家屋が最も多く、次点でスラブ、切妻の順である。地区別に見るとⅠ・Ⅱ・Ⅳ地区は比較的寄棟の家屋が多く、Ⅲ地区においてはペンションや移住者などの新しく建てられたスラブ家屋が目立つ。Ⅴ地区も同様にスラブ家屋が目立っている。

この差異については聞き取り調査でⅠ・Ⅱ地区のように家屋の集中している地域よりⅢ・Ⅴ地区のように敷地を広く使用することが可能な地区のほうが、「隣接の家屋が気にならずゆったりと生活できる」ためであるということが明らかになった。また、Ⅴ地区のように国道の近い開発地には、Ⅰ～Ⅳ地区からの分家した人の家屋や新しく移住してきた人たちが多く居住していることも聞き取りより明らかとなった。

b 付属屋の配置

付属屋の配置には以下の4つの配置パターンが見られる。

（イ）母屋の横・後方に位置する付属屋
（ロ）母屋の前方に位置する付属屋（前の屋）
（ハ）母屋の一部として組み込まれている付属屋
（ニ）上記の複合型

これらの4つのパターンの持つ機能はそれぞれ異なっており、（イ）の付属屋パターンの場合、付属屋の持つ機能は家畜小屋や便所にあたることが多い。（ロ）では主に居住空間としての機能を持つものが多く、勉強部屋に使用されたり、寝室又は機織場としての機能を持っている。（ハ）では主に炊事場や台所、風呂場としての機能を持っている。

付属屋の持つ機能として坂本は炊事場や風呂場は母屋に隣接する形を取っており、便所や家畜の小屋は母屋の横または後方に位置していることが多いことを明らかにしている。さらに便所と家畜小屋が隣接しているケースが多いことも指摘している。（坂本1989）今泊誌でも同様のことが述べられており、肥料として使いやすいように便所と家畜小屋が隣接していることを指摘している。さ

らに今泊誌では「前の屋」（メーヌヤー）についても記述されており、前の屋は中流以上の家庭に別棟として建てられていたものであるという。今泊ではⅠ・Ⅱ地区に「前の屋」を持つ家屋が多く、Ⅲ・Ⅳ地区では，（イ）（ロ）（ハ）（ニ）の4つのパターンを持つ家屋が多い。また、Ⅴ地区では（ハ）が若干見られるなど集落内においても付属屋の配置には地区によってその特徴に差異がみられる。

c 屋敷囲いの種類

屋敷囲いの種類は集落全体で、石垣・ブロック塀・トタン・フクギ・草植物の5種類の要素で形成されている。集落で主要とされているのは、ブロック塀・トタン・フクギの3種類の要素でありこれらが集落景観の主軸となっている。主な屋敷囲いは表3のようになる。今泊集落の屋敷囲いで最も多く見られる形態は、ブロック塀とフクギの組み合わせである。特にフクギは今泊集落において重要な景観要素の1つである。フクギの屋敷囲いについては第４・５節にて後述する。

次いでブロック塀とトタンについて論じる。一般にブロック塀の屋敷囲いは明治期から使用されるようになるが、戦前にはあまり見られず多くは石垣であったと考えられる。沖縄戦に伴い今泊の屋敷は大きな損害をうけ、立て直しの際に石垣から強固なブロック塀へと移り変わっていったのであろう。現在では石垣の残っている家屋は少なくなり、石垣のみで構成されている家屋が２軒、石垣＋他要素である家屋が32軒となっている。ブロック塀を含んで構成されている屋敷囲いは全体の80％を占めており、ほとんどの屋敷にブロック塀が使用されている。

今泊集落の屋敷囲いを考える中でトタンという景観要素をかかすことはできない。トタンは屋根の構成でも述べたように、戦後にアメリカの影響により普及したと考えられる。今泊集落では，トタンを屋根に使用するだけでなく屋敷囲いの補強素材としても実用している。トタンについて集落内の聞き取りでは「ブロック塀に比べて通気性が良いため。」「金銭的に安価である。」という聞き取りができた。しかし、集落景観上美しくないという意見もあり、地域住民の実用性と景観上の問題の中で様々な意見が指摘されている。トタンが使用されている屋敷囲いの総数は61軒あり，集落の1/5の家屋にはトタンが使用されている。分布としては。地区～、地区に多く見られる。トタンのみで屋敷を囲っている家屋は無く，フクギやブロック塀の補強として多く見られるため，屋敷の全面を囲うのではなく3面をトタンで屋敷を囲う形になる。

表4　塀の構成

	Ⅰ地区	Ⅱ地区	Ⅲ地区	Ⅳ地区	Ⅴ地区	合計
塀の構成						
石垣のみ	1	0	0	0	1	2
ブロック塀のみ	16	16	2	7	18	59
ふく木のみ	17	7	2	0	8	34
石垣＋ふく木	0	3	1	2	3	9
石垣＋ブロック塀	0	0	0	1	0	1
石垣＋ブロック塀＋ふく木	1	9	2	1	2	15
石垣＋ブロック塀＋ふく木＋トタン	0	0	1	0	0	1
石垣＋ふく木＋トタン	0	2	0	0	1	3
石垣＋ふく木＋トタン＋木塀	0	1	0	0	0	1
石垣＋ふく木＋フェンス	0	0	0	0	1	1
石垣＋木塀	0	0	0	1	0	1
ブロック塀＋ふく木	22	31	19	14	26	112
ブロック塀＋ふく木＋トタン	19	6	9	8	0	42
ブロック塀＋ふく木＋トタン＋木塀	0	1	0	0	0	1
ブロック塀+ふく木+フェンス	0	4	0	0	0	4
ブロック塀+ふく木+木塀	0	0	0	2	0	2
ブロック塀+ふく木+竹	0	0	0	0	1	1
ブロック塀+トタン	2	0	0	0	0	2
ブロック塀+フェンス	2	0	1	0	0	3
ふく木+トタン	3	4	0	5	0	12
ふく木+フェンス	0	1	0	0	0	1
ふく木+植物	1	0	0	1	0	2

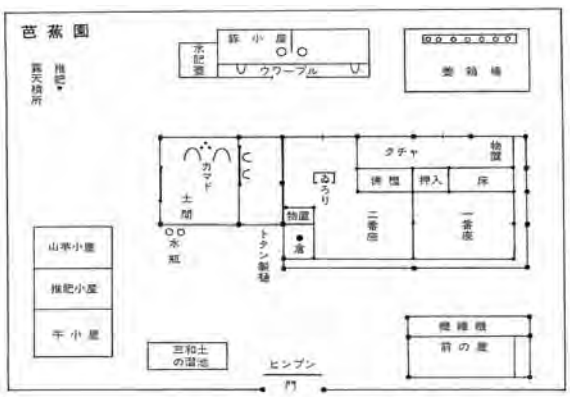


図11　付属屋

第４節　今泊における石敢當

（1）石敢當概説

1）風水思想

風水とは墳墓、都城、村落、住居等を建設するに当たって、災禍をさけ、幸福を招くために地相をみる（島尻 1990）ことで、その歴史は中国古代の陰陽五行説、鐵緯説等にあるとされている。

風水思想が沖縄に伝わったのは、『琉球国由来記』によれば康熙6（1667）年であるとされるが、『球陽』では尚質王3（1650）年の条に「唐栄地理記」が載せられており、唐栄人が古くから風水思想を学んでいることから1667年以前に伝わったとも考えられている。風水説には江西学派と福建学派の二大分派が存在し、福建学派は特に方位を重視するといわれるが、沖縄の風水もまた福建学派の風水であり方位を重要視していた。

2）起源

「石敢當」の読みは沖縄では「いしがんとう」、漢和辞典などでは「せきかんとう」という事も多い。多くは石碑で、碑面に「石敢當」と刻まれている、中国伝来の魔除けである。

八世紀後半、唐の時代、福建省に厭禳（まじないで悪魔・悪霊を抑え，災厄を除き払う）・民生の安定のために立てられた石敢當が源流と見なされている。琉球には遅くとも十五世紀半ばころまでにはこの習俗が伝わり、十七世紀初めには琉球から薩摩に伝わって，薩摩藩の領域（鹿児島と宮崎県の南部）に濃密に普及したものと考えられる。今日でもこれらの地域には古い石敢當が数多く残っている。

しかしながら石敢當は、沖縄と南九州だけに存在するのでなく、数は少ないが、現在、全国二十九都道府県に散在している。新しい石敢當の設置については、沖縄の人が他地域に移り住んで設置したり、旅行で購入した石敢當を自宅に設置した等が考えられる。

3）設置場所

石敢當は、風水でいう“気の流れが当たる”場所に、敷地の人間が自主的に設置する。例えばT字路の突き当たりや、直交していない交差点で風が吹き抜けるときに障害となる位置になどである。風水の思想では、魔物は道を直進し、ぶつかった処にたむろし、防禦策なき家に侵入するため、これを石に敢えて當（当）ててうち砕き、災厄を防ぐのだ。祭祀の対象にはならないが、慣習的に設置するものとして捉えられている。

このように石敢當は単に「魔除け」といわれるのが一般的だが、台風の多い沖縄で吹き抜ける強風を弱める効果として、交差点軸をずらし、石敢當には強風を弱めるように願いをこめたとみる説もある（図8）。

4）種類

石材で表札の形をしているものが多いが、規格はなく、大きさ、形、素材は様々ある（表５）。コンクリート製、プラスチック製、板に墨で書くものもある。必ずしも石材にこだわらないのは、石のもつマナ、呪力に期待する気持が希薄で、「石敢當」という文言に呪力を期待していることになる。

石敢當は石材店、日曜大工のような建築材販売店や、スーパーで売っているところもある。壺屋の焼き物製作所でも、大小さまざまの素焼きの石敢當や、シーサーと合体したものを売っている。

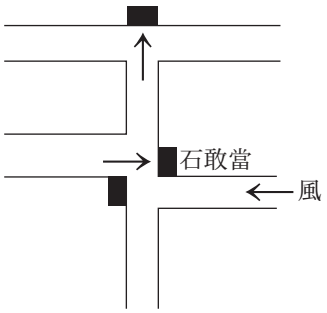


図12　石敢當の設置所

最近では各ホテルの売店でも10cm程度の石敢當も売られており、このような石敢當が旅行客により各地へと広まっていると考えられる。

表5　石敢當の種類

大きさ	高さ×幅×厚さ	重さ	価格
小	20cm×9cm×2cm	約1kg	5,250円（税込）
中	25cm×12cm×2cm	約1.7kg	8,400円（税込）
大	30cm×13cm×2.3cm	約2.5kg	10,500円（税込）
特大1	35cm×15cm×2.3cm	約3.4kg	15,750円（税込）
特大2	45cm×20cm×2.3cm	約5.8kg	23,600円（税込）
特大3	60cm×25cm×2.3cm	約9.6kg	36,750円（税込）

＊石の種類は大～特大３は黒ミカゲ、青石のみ。他の石敢當小、中は白大理石、黒ミカゲ、赤ミカゲ、青石（深海）、万年青（緑色）。tiger skin yellow（虎皮黄）あり。
石敢當と表札の相和石材　http://www.ishigantou.com/より

写真1　石敢當 N0.1

写真2　石敢當 N0.2

写真3　石敢當 N0.11

写真4　石敢當 N0.37

※今泊における石敢當
写真Noは図13と対応

（２）今泊の石敢當調査結果

１）石敢當の分布（図13）

調査前には大通りに面しているほど石敢當が大きい、今帰仁と親泊では先に集落が移動した親泊の方に設置数が多い等の予測を立てていたが、現地調査ではそれらの差異は見当たらず大きさ、分布ともにほぼ均一であった。

しかし、石敢當に対する個人意識の違いは垣間見る事ができた。本来なら石敢當が設置されるべきであるＴ字路の突き当たり48ヶ所中であるが、石敢當を設置しているのは15カ所であった。一方で、駐車場の窪みやわずかな突き当りにさえも石敢當を設置している家が見られた。これは突き当りであろうとも風水思想を意識しない住民と、明確に認識している住民との意識の差が表れているといえるだろう。

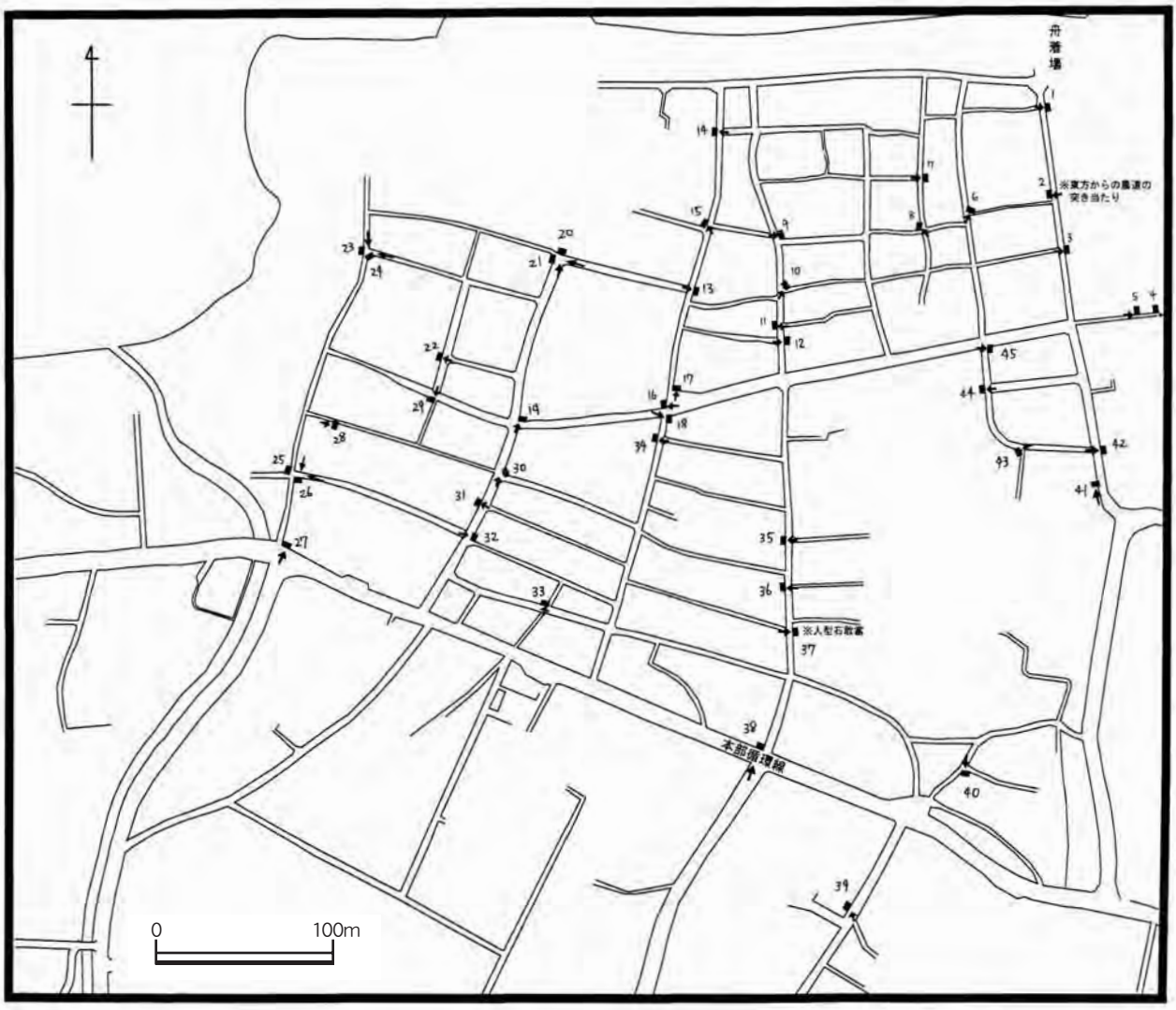


図13　今泊における石敢當の分布

表6　石敢當調査

No	材質	大きさ（cm）		古さ	形状	地表から石敢當の下辺までの高さ（cm）	「石敢當」の書体　※2
		横	縦				
1	石　質	9.7	20.0	新しい	表札型	28.0	楷　書
2	石　質	19.5	23.5	新しい	表札型	0.0	行　書
3	石　質	8.5	20.0	新しい	表札型	46.0	楷　書
4	石　質	9.0	20.0	新しい	表札型	16.0	楷　書
5	石　質	12.8	24.4	新しい	表札型	30.0	行　書
6	石　質	10.2	20.2	新しい	表札型	17.3	行　書
7	石　質	10.9	26.1	新しい	表札型	47.3	行　書
8	石　質	10.0	19.7	新しい	表札型	37.4	楷　書
9	石　質	37.0	37.0	新しい	石　型	0.0	な　し
10	石　質	38.7	29.0	古　い	石　型	0.0	な　し
11	プラスチック	12.8	24.6	新しい	表札型	35.7	行　書
12	石　質	11.7	25.3	新しい	表札型	30.2	行　書
13	プラスチック	13.0	24.4	新しい	表札型	20.9	行　書
14	石　質	10.0	20.0	新しい	表札型	34.4	行　書
15	プラスチック	12.8	24.4	新しい	表札型	32.7	行　書
16	石　質	13.0	24.4	新しい	表札型	21.3	行　書
17	石　質	12.2	24.7	新しい	表札型	33.5	行　書
18	石　質	11.8	25.1	新しい	表札型	40.9	楷　書
19	石　質	10.0	20.2	新しい	表札型	50.0	楷　書
20	石　質	9.2	20.0	新しい	表札型	0.0	行　書
21	プラスチック	12.7	24.4	新しい	表札型	46.4	行　書
22	石　質	9.2	20.1	新しい	表札型	15.0	行　書
23	石　質	9.0	26.9	新しい	表札型	102.0	行　書
24	石　質	13.3	30.0	新しい	表札型	23.7	行　書
25	石　質	9.1	20.0	新しい	表札型	56.2	行　書
26	石　質	9.0	20.2	新しい	表札型	40.0	楷　書
27	プラスチック	12.8	24.3	新しい	表札型	33.4	行　書
28	石　質	10.3	20.2	新しい	表札型	40.7	行　書
29	石　質	9.2	20.0	新しい	表札型	46.7	楷　書
30	石　質	9.9	20.3	新しい	表札型	24.0	行　書
31	石　質	9.5	19.7	新しい	表札型	41.4	行　書
32	プラスチック	13.0	24.6	新しい	表札型	27.7	行　書
33	石　質	40.0	58.5	新しい	石　型	0.0	楷　書
34	プラスチック	13.8	25.1	新しい	表札型	74.6	行　書
35	石　質	10.1	25.0	新しい	表札型	16.6	行　書
36	石　質	9.0	19.0	新しい	表札型	38.4	楷　書
37	石　質	69.0	131.0	古　い	人　型	0.0	な　し
38	石　質	9.0	20.0	新しい	表札型	55.6	行　書
39	石　質	9.0	20.0	新しい	表札型	3.0	行　書
40	石　質	12.1	30.0	新しい	表札型	22.4	楷　書
41	プラスチック	12.8	14.5	新しい	表札型	39.0	行　書
42	石　質	12.8	24.9	新しい	表札型	24.3	行　書
43	石　質	8.4	19.8	新しい	表札型	22.5	楷　書
44	石　質	12.7	24.4	新しい	表札型	27.2	行　書
45	石　質	10.2	20.0	新しい	表札型	44.6	行　書

※１：０cm：地面に設置しているもの
※２：「奉山石敢當」、「石敢當」などの表記はなく、「石敢當」のみだった

表7　石敢當の数

地　域	調査年	石敢當の数	集落世帯数÷石敢當数
石垣市　新川	平成10年3月	82基	25.1世帯に1基
石垣市　大川	平成10年3月	43基	35.3世帯に1基
宮古島　平良市	平成10年7月	486基	25.4世帯に1基
知念村　知念	平成10年7月	46基	5.4世帯に1基
知念村　知名	平成10年7月	81基	2.8世帯に1基
伊平屋村（全集落）	平成10年9月	98基	5.2世帯に1基
今帰仁村（19集落）	昭和55年9月	75基	36.4世帯に1基
西原町（15集落）	昭和62年3月	267基	20.7世帯に1基

（小玉正任『民俗信仰　日本の石敢當』慶友社、2004.12、p175の記述より作成）

２）石敢當の種類と形態

a 設置数

今泊では390世帯の集落に45基、8.7世帯に1基という割合で設置されていた。ちなみに沖縄県にはどのくらいの数の石敢當があるのか、全市町村で悉皆調査をしたデータは存在しないが、ごく限られた地域のデータをあげると表７のようになる。このデータを基に、仮に40世帯に1基の割合で石敢當があるとすれば、沖縄県の全世帯数は平成10年5月現在で44万4940世帯なので、県全域では1万基を上廻ることになると換算することができる。

b 材質（グラフＡ）

石質82％、プラスチック18％と、石質が大半を占めた。

c 大きさ，形状（グラフＢ）

表札型40基（89％）、石型4基（9％）、人型1基（2％）と、表札型が多い。

１基しかない珍しいものである。

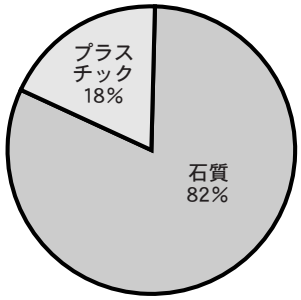
d 地表から石敢當の下辺までの高さ（グラフＣ）

地面設置型を除いた高さの平均は35.6cmで、膝よりも少し低い高さである。

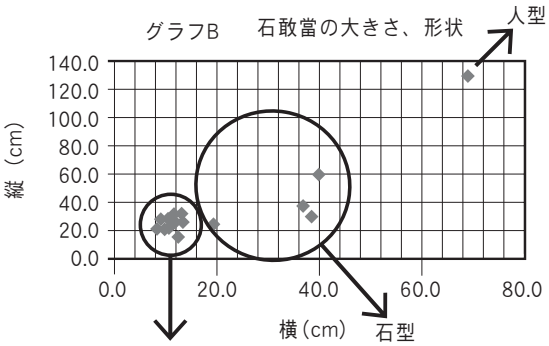
e「石敢當」の書体（グラフＤ）

楷書12基（27％）、行書30基（67％）、表記なし3基（6％）だった。

グラフA　石敢當の材質

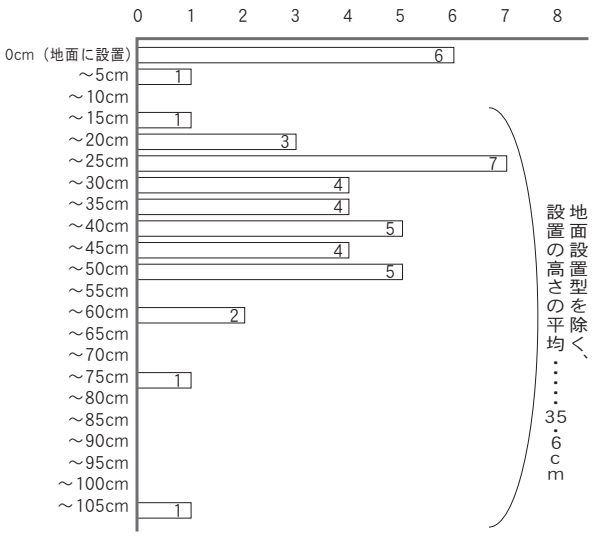


グラフB　石敢當の大きさ、形状

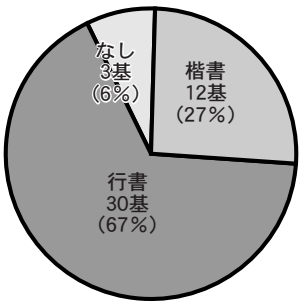


表札型の平均：横10.9cm、縦22.4cm

グラフC　地面から石敢當の下辺までの高さ（単位：基）



グラフD　「石敢當」の書体（単位：基）



（3）まとめ

今回の調査では時間の制約上、分布調査が中心となり聞き取り調査が不足している面も残った。しかし、わずかな聞き取りではあるが調査中に「石敢當は信じない」という年配の方に出会ったり、「石敢當はあるのが当たり前で普段の生活で目に入っても特別に意識することはない」という話を聞いたりする事ができた。また，那覇で出会った50代程度の男性は、「山や村で迷ったら、石敢當と書いてある方の道を進めば太い道へ出られると子供のころ教えられた」と話していた。分布図だけを見れば石敢當が道しるべとしての機能を有していないのは明らかであるが、地蔵や小さな社と同様に石敢當が邪気を払うという性格から人びとに安心感を与える役割を持っていたとも考えられる。まさに石敢當は意識の有無はあるが沖縄の人々の生活に根ざした風習であるといえるだろう。

第５節　今泊におけるフクギ分布の変化

沖縄県今帰仁村字今泊は、海岸に近く標高4～5mの平坦地にある集落である。海岸は砂地であり、常に集落に向け風が吹いている。このような場所に家を建てる時に注意される点は,「防風、防砂、防潮」の３点であろう。今泊集落はこの問題点を、植物を植えること、つまり屋敷林を形成することで乗り越えてきた。今泊集落を概観すれば、集落全体が植物群に包まれており、場所によっては「森の中に家を建築した」と思われるほど家の周囲は植物群で覆われている。

写真5　今泊集落のフクギ

この集落全体を包んでいる植物はオトギリソウ科の一種である「フクギ（福木)」である。このフクギが，泊集落の屋敷林として重宝されているのである。フクギの植生に関して若干述べると、フクギは琉球で広く一般に植栽され、街路樹、防風林として用いられることが多い。フィリピン原産とされるが、台湾（本島南部・ラン島）にも野生する。また、石垣島および西表に植生する一部のフクギも野生である可能性がある。

今泊集落では、高さ十数m、胸高周囲2mを超える大木や樹齢200～300年になろうかと推定される古木も存在する。

（2）フクギの利用

フクギは季節の花としても沖縄の人々になじみ深い。花の咲く季節は、5～6月の梅雨期で、大きくて濃い緑葉に隠れて余り目立たないが、無数の黄白色の小花が咲く。この花は落花し、樹の下を一面に覆うが、やがて梅雨の時の雨で押し流されていく。これはプゥクギヌパァナナガーミ、ナガラシアミ(福木の花長雨、流し雨)などといわれている。フクギはこのように季節を感じさせてくれる一面も併せ持つ。また、フクギの皮は,鮮やかな黄色の染料として、沖縄の伝統的な模様染めである紅型（びんがた）に用いられてきた。

フクギ利用の欠かせない点として防火林（延火予防）としての利用も挙げられる。材質的にとても火がつきにくく、隣の家が火事になったとしても（1m程度の距離でも）延焼を防ぐといわれる。

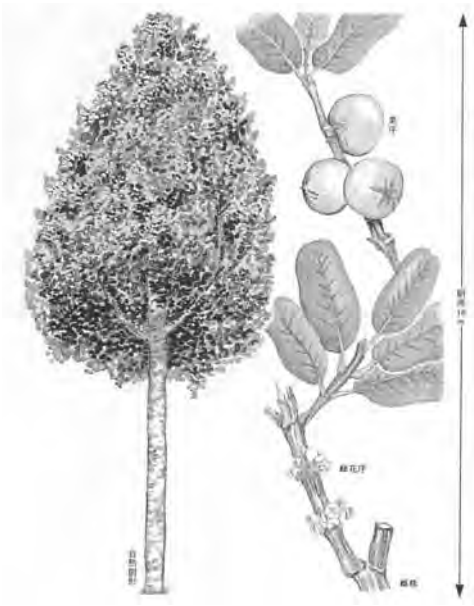


図14　フクギのスケッチ図
（原色樹木大図鑑p.194より引用）

（3）フクギの問題点

上記のようにフクギの利用点は様々であるが、欠点もいくつか存在する。

フクギは上へとまっすぐに伸び、放置すれば延々と伸び続ける性質をもつ。沖縄は台風が多い地域であるために背の高い植物があれば強風によって折れ危険である。それを避けるためには適時枝を切り落とす必要がある。

また、フクギは密生し防風林としての効力を高めている。しかし、外から中への空気の流れを遮断することは、中から外への流れも遮断しているということになり空気の循環が滞ることになる。さらにフクギの葉は大きくて分厚いために暗がりができ湿気がこもりやすくなる面もある。他にも9～10月頃になると果実が悪臭を放つという問題点もある。

フクギはこのような欠点も併せ持ち、実際にフクギを切る家も存在した。ある程度まで成長するとフクギを切ることにより、バランスを調整しているといえる。

写真6　切られたフクギ

写真7　フクギの果実

図15　2004年フクギ分布（渡具知2004より引用）

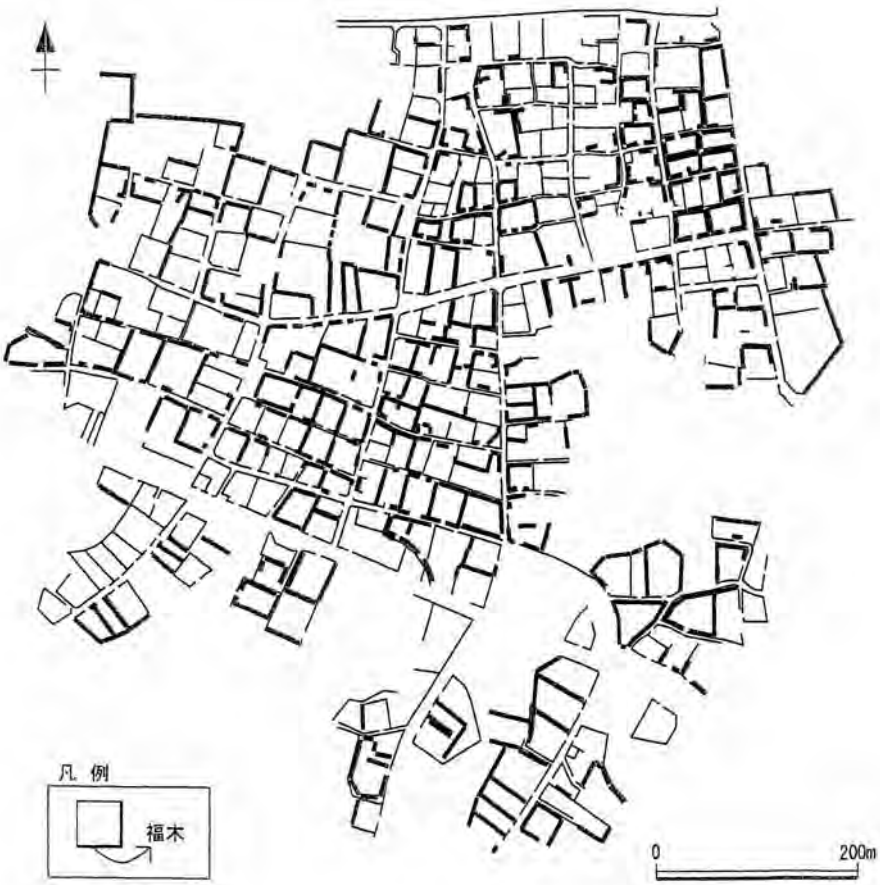


図16　2007年フクギ分布

（4）フクギ景観の変遷

今泊のフクギについては渡具知が2004年に調査を行い分布図の作成を行なっている。多くの屋敷地においてフクギが植えられており、松との混合植栽も海岸部において見られる。渡具知は今泊集落東側の親泊原においては西側の今帰仁原に比べ古いフクギが多く見られることを指摘しており、この両地域の景観の違いに関して集落形成時期の差異と捉え、親泊原において早く集落が形成されたためであるとした。

さらに親泊原東側ではフクギが鬱蒼としていることから集落の周囲を林や森林で取り囲む「風水思想」が親泊にも当てはまる可能性を指摘する一方で、今帰仁原西側では木々が存在しないことからも親泊集落の形成以後に今帰仁集落が形成されたと推察している。

2004年時のフクギは概ね集落全体に分布している。今回の調査でも全体的には集落一面に分布しているが、フクギの増減が著しい場所も見られた。増加が見られる地域としてはⅠ地区があげられる。2004年時には４面をフクギに囲まれた宅地が11箇所存在したのに対して2007年時にはフクギ地帯が増加し15箇所確認できた。

Ⅱ地区には比較的新しい住居が立地しているが、これらの住居においてもフクギの植栽が見られる。特に住居の北側にフクギが用いられ防風林としての役割を担っていると考えられる。古い住居のみならず新しい住居にもフクギの植栽が見られることから、住居の新旧によらずフクギは防風効果を期待して利用されているといえる。

2004年と2007年では集落としてフクギの大幅な増減は見られなかった。しかし、一部の場所によっては増加および新たな植栽が見られた。聞き取りではフクギの問題点が聞かれる一方で、新たな植栽や増加はフクギの防風、防砂、煙害防止などの機能を現在も利用していることを示している。

（5）まとめ

以上のように、フクギというのは、今泊の人々の生活の中に自然に溶け込んでいる。フクギに関して、調査前には「実が臭いから嫌われていて、近年では伐採されつつある」と聞いていた。しかし、調査の結果、実際にはそんなことはなく、過去も現在も今泊の人々はフクギを大切にしていることが明らかになった。

そしてこれらのフクギ群のおかげで、多くの鳥類や昆虫（特に蝶々）などが見られ、住人は都会では感じることのできない潤いを得ているものと思われる。今泊の人々にとって，フクギは、家の一部でありかつ、生活の一部にもなっており、集落住人にとって欠かせない存在であることは間違いないであろう。

第６節　今泊の景観保全

現在、今帰仁城跡は「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として首里城跡等とともに世界遺産に登録されている。しかし、今帰仁城跡が世界遺産として注目を集めるのに対して、城下集落ともいえる今泊集落は今帰仁城跡ほど名が知られていないのが現状であろう。今泊集落は今帰仁城の城下集落的性格を持つ旧今帰仁集落と、外港的性格を持つ旧親泊集落が合併した歴史的意義を有する集落である上に今回の調査では触れることができなかったが、今泊集落は「今帰仁上り」に見られるように沖縄の祭祀関係の上でも非常に重要な地でもある。また、今泊集落から親川、ハンタ道を通り今帰仁城跡へと続く道は単に集落から城跡までの道のりであるだけでなく、周囲一帯には旧今帰仁集落の遺構や未だ実態が解明されていない石積み遺構など歴史的遺構が散在する。

しかし、残念ながらこのような歴史的空間を一体的・面的に保存・活用しているとは言いがたいのが現状である。城跡は整備され観光ガイドも利用できるなど観光地化が進んでいるのに対して、ハンタ道はその道程が示されてはいるものの気軽に利用できるほどには整備が進んでいない。さらに石積み遺構においては遺構に行くことさえ困難なほど道悪である。遺構の保存のため一般に開放するのは困難な面もあるかもしれないが、城跡を見た後に遺構を見学できればより今帰仁城および旧今帰仁集落の時代に思いをはせることも可能であろう。

本章では今泊集落の景観要素である(石敢當，フクギ，家屋)について悉皆調査をし，分布図の作成，分析をおこなった。これを踏まえ今泊集落に対して外部の視点から次ぎの２つの提言を挙げたい。

（１）道路の角ごとに当たり前のように出会う石敢當は沖縄独自の風景の一部である。設置当初にこめていた意味や思いが忘れられ、軽んじられ消えてゆく文化が多い中にあって、石敢當やシーサーが残っているだけでなく新たに設置されている沖縄に豊かな精神文化を垣間見れる。今後も石敢當やシーサーに見られる精神文化を大切に受け継いでいくことが望まれる。

（２）今泊の屋敷地はフクギ並木で有名な備瀬集落とは違い観光地化されておらず、フクギと住人が共生する空間が残存しているといえよう。しかし、住居とフクギが調和する屋敷地がある一方、屋敷を囲うフクギに対してさらにトタンを貼り付ける住居も目についた。トタンの囲いを持つ住居は全体から見れば少ないかもしれないが、トタンという異質な景観構成物はフクギ並木の中では際立っている。このようなトタン囲いを外すことによりフクギ景観の整備が進む事が望まれる。

今泊集落では「観光地化することによる弊害」を心配する声も聞かれた。「観光地化」すれば観光客の増大により現在の生活が変化することは確かであろう。しかし、「観光地化」を目指さずとも今泊集落から今帰仁城一帯にかけての面的整備・保存は必要であろう。今帰仁城跡の整備は進んでいることから、今後は今泊集落の歴史的意義を意識した整備が望まれる。

本調査は2007年10月3日～5日の日程で関西大学地理学教室の実習調査として行われた。調査体制は以下の通りである。
調査組織：関西大学地理学教室
指導教員：高橋誠一（関西大学文学部教授）
現地調査：（大学院生）松井幸一・松井僚平

本調査にあたっては高橋誠一、松井幸一、松井僚平の他に関西大学文学部地理学・地域環境学専修の船瀬奈月、山田小紅美、山本健一の協力を得た。

《参考文献》

今泊誌編集委員会（1996）『今泊誌』今帰仁村字今泊公民館

石野裕子（2004）「今帰仁グスクが抱えたムラ－今帰仁ムラ・親泊ムラ・志慶真ムラの移動について－」、今帰仁村教育委員会編『グスク文化を考える－世界遺産国際シンポジウム＜東アジアの城郭遺跡を比較して＞の記録』菅 英志

上間政春（1990）「今泊の福木とアダン」、『すくみち』第13号、今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史資料館準備室（今帰仁村歴史資料館準備室（1992）『なきじん研究2』、今帰仁村教育委員会に収録、p.176-177）

上間政春（1991）「身近な自然の花木（一）」『すくみち』第20号，今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史資料館準備室（今帰仁村歴史文化センター準備室（1994）『なきじん研究4』、今帰仁村教育委員会に収録，p.87）

漆原和子、乙幡康之（2007）「沖縄県渡名喜島における屋敷囲いの特色とその変遷」、季刊地理学59巻、p99-110

沖縄県庁ホームページ　沖縄県統計資料閲覧室　平成7年国勢調査町丁・字別集計結果第4表年齢(各歳)、男女別人口(外国人-特掲)（http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/pc/1995/pc1995_0_04_306.xls）

沖縄県庁ホームページ　沖縄県統計資料閲覧室　平成17年国勢調査町丁・字別集計結果第2表世帯の種類（2区分）、世帯人数（4区分）別世帯数及び世帯人員（http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/pc/2005/dai1/05_02nakijin.xls）

小玉正任（2004）『民俗信仰　日本の石敢當』、慶友社、p473

坂本巌雄（1989）『沖縄の集落景観』九州大学出版会、354頁

佐竹義輔、原寛、亘理俊次、冨成忠夫（1989）『日本の野生植物　大木Ⅰ』平凡社

高橋誠一（2003）「琉球今帰仁城周辺の集落とその移動」関西大学　東西学術研究所紀要　第36輯

高橋誠一（2006）「琉球における集落景観と伝統的地理観」南島史学第68号

渡具知彩（2004）「沖縄県今帰仁村における集落景観の特徴－宅地と道路の配列からの一考察－」琉球大学教員養成課程社会教育専修・地理学コース西岡ゼミ所属，卒業論文

仲原弘哲（1990）「今帰仁のムラや集落の移動」『すくみち』13号、今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史資料準備室、（今帰仁村歴史資料資料館準備室『なきじん研究2』今帰仁村教育委員会、1992に収録、p.169-174）

今帰仁村役場ホームページ（http://www.nakijin.jp/）

今帰仁村役場（2005）『2005年版　今帰仁村勢要覧』

今帰仁村教育委員会（2007、3月）『今帰仁村文化財調査報告書第24集　今帰仁城跡周辺遺跡」』文進印刷株式会社 p.164

今帰仁村教育委員会（2007）『今帰仁城跡周辺遺跡」－村内発掘調査報告－』今帰仁村教育委員会

今帰仁村歴史資料準備室編（1990）『なきじん研究1』今帰仁村教育委員会歴史資料館準備室、228頁

林弥栄、古里和夫、中村恒雄（1985）『原色樹木大圖鑑』北隆館

堀田満代表（1989）『世界有用植物事典』平凡社

第Ⅶ章　総括

これまで今帰仁城跡（城外西地区・屋敷地５）の発掘調査の成果を紹介してきた。最後に若干のまとめをして結びとする。

先ず、当該地点について今帰仁城跡との位置関係を確認する。当該地点は今帰仁城跡の北側防御線にあたる外郭石垣の外側に位置しており、この点では今帰仁城跡の史跡地域内ではあるが、城壁の外側に位置していることを強調しておきたい。しかし、一方で今帰仁城跡の外郭に入城する際、城門があったと想定される部分に接している場所であり、単に城外といっても、最も城に近い城外ということが言える場所である。この前提を踏まえ、以下に今帰仁城跡と今帰仁城跡周辺遺跡として調査が実施されてきた両者の成果を含めて概述する。

先ず、使用年代と遺構について考えてみたい。今帰仁城跡周辺遺跡のこれまでの調査では層位関係の上下によって異なる遺物群を回収できた事例はほとんど無い。しかし、今回検出されたⅡ層とⅣ層からは若干の時期差を見ることができる。残念ながらⅣ層の調査は試掘トレンチの一部において実施されたのみであるため、詳細はなお検討を要するものの、Ⅲ層の造成層の年代を考える上で示唆的な出土状況が観察された。即ちⅣ層からはカムィヤキ（第17図-6）や白磁（第20図-102）が出土しており、これらの陶磁器の年代観は13世紀以前と想定される。上層の文化層であるⅡ層及びⅠ層から回収された遺物は、これまで今帰仁城跡周辺遺跡（今帰仁ムラ跡西区）屋敷地１・２・３・４の年代と同様、14世紀後半から16世紀代のものであることが分かる。これは今帰仁城に山北王が居住し、その後の監守が派遣された時代に比定される。14世紀前半を遡る資料も皆無ではなく同安窯系の青磁碗胴部片、カムィヤキやグスク土器等の遺物も散見されるが、先に紹介したⅢ層（造成層）形成以前のⅣ層に帰属する遺物群である蓋然性が高い。今帰仁城跡主郭の第Ⅸ層・第Ⅶ層のように層を成して遺跡を形成し、明確な遺構を確認できるような状況にはなかったが、Ⅳ層（＝Ⅲ層造成層下）における、古手の遺物群の出土は今回の調査成果の一つとしてあげておきたい。併せてこれまでの調査同様17世紀以降の遺物は極めて少なく、やはり近世の段階での当該地域一帯の恒常的生活の廃絶を追認するものである。以上の状況からⅢ層上面で確認できたピット等の遺構群は、回収された遺物と下層の遺物群との関係から、ほぼ今帰仁城跡主郭第Ⅲ・Ⅳ期並行、即ち年代的には14世紀後半から17世紀初頭に限定されるものであると指摘することができる。

次に、遺構の詳細であるが、当該地点は全体を俯瞰するとR-24に柱穴が集中する。また北側は屋敷地３と接し、土留め石積みを配置する。なおかつ南側は今帰仁城跡の外郭石積みがあり、東西は柱穴の分布がほとんど見られなくなることを考えると、R-24一帯でみられる柱穴群を中心に建物が配置された一区画があり、柱穴群を残した人々の生活空間＝屋敷と想定される。屋敷の居住者がどのような人物で、どのような生活を行ったのかの具体的な姿は分からないが、他の屋敷地との比較を通して検討することが重要である。

さて遺構を個別に見ていきたい。今回検出された遺構のほとんどは柱穴だが、柱穴を結び建物プランを復元するには至らなかった。これは北側の大部分が攪乱され検討できなかったということも一因にあげられるが、柱穴が密集していたために調査時点において特定することができなかったことが要因である。柱穴以外では、土坑も多く見つかっているが用途等の特定には至っていない。しかし、今回報告をした礫を多く含む浅い土坑SK683は、鍛冶関係の遺物を多く含む状況が見られた。それは紹介した161・162の不明磁器質の製品を仮に坩堝と考え、209～211の板状の鉄製品を鉄滓、217の石器を金床石状の製品、218の焼土塊を炉跡等残欠として見ていくとSK683、もしくは本遺構の近傍において鍛冶などの生産作業の存在が断片的ながら見えてくるのである。しかし残念ながら遺物が少なく具体的な機能や遺構の詳細を検討が行えてないため、課題点を残す調査となった。

さて、出土遺物（人工遺物）であるが、これまでの城内外の調査例と同様その約９割以上が中国

陶磁で構成されている。中でも14世紀後半～16世紀の遺物が多いことは先に調査された志慶真門郭や主郭ともほぼ同様の出土傾向である。注目された中国陶磁器として元（様）青花（126～127）などの優品が多出している点や、青磁酒会壺（98～101）、瓶（90～92）などが他の周辺遺跡の調査に比して多いようにも見受けられた。遺物の多くはこれまでの城内外の調査において検出しているものであるが、138の黄釉陶器とした製品、153のタイ産の青磁と考えた資料、170・171の碁石などは今回の調査で初めて出土した遺物である。陶磁器以外の遺物では玉類、銭貨、金属製品、石製品が出土しているが、小異あるもののこれまでの城内外の調査例と同様の傾向と考える。

最後に食料残滓として推定される炭化米、麦などの植物遺体をフローテーション法によって検出することができた。具体的にはイネ（コメ）、アワ、キビ、コムギ、オオムギなどを得ることができた。脊椎動物骨の分析からは、屋敷地２との類似性が高く、他の屋敷地に比べてやや主郭に近い様相が認められるとして、食材利用の面から今帰仁ムラ跡の中では主郭の支配者層とのつながりが深い集団であった可能性が指摘されている。このような屋敷地間における階層的な上下関係の指摘は、植物遺体において他の屋敷地に比較してイネ（コメ）の比率がやや高い状況、遺物構成として優品として想定される元青花や青磁酒会壺・瓶などの出土が目立っている点と考えあわせて、調和的な結果であると考えられる。

本調査地点は現在今帰仁城跡の1/100模型が設置されガイダンス広場として利用されている。地下にはそのまま遺構が埋め戻し保存される格好となっている。本報告書をご活用いただき、今後も今帰仁城跡の保存修理を行うことで今帰仁城跡を含む沖縄の歴史解明の一助になれば幸いである。

《参考文献》

田中克子　2001年「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その１）－博多出土の薄胎施釉陶器（茶入）－」『博多研究会誌』博多研究会

栗建安　2004年「福州地区における「薄胎醤釉器」の発見と研究」『野村美術館紀要』第13号　野村美術館

瀬戸哲也・ほか　2007年「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編

永井久美男編　2002年『中世出土銭の分類図版』高志書院

高宮広土　1996「古代民族植物学からみた那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡発掘調査報告書』那覇市教育委員会

高宮広土　1997「用見崎遺跡におけるフローテーション法の導入とその成果について」『考古学研究室報告第33集』　熊本大学考古学研究室

高宮広土　2004　「第Ｖ章シイナグスク出土の植物遺体」『シイナグスク－範囲確認調査報告－』今帰仁村教育委員会

今帰仁村教育委員会　1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ－志慶真門郭の調査－』今帰仁村文化財調査報告書第９集

今帰仁村教育委員会　1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ－主郭（俗称本丸）の調査－』今帰仁村文化財調査報告書第14集

今帰仁村教育委員会　1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集

今帰仁村教育委員会　2005年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ－今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第20集

今帰仁村教育委員会　2007年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ－村内遺跡発掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第24集　今帰仁村教育委員会

第7表　屋敷地５（1次外郭・11次今周）出土遺物集計表

種別	器種	分類	文様等	部位	破片数 Ⅰ層	Ⅱ層	遺構内	Ⅳ層	破片数計	推定個体数
青磁	碗	同安窯系Ⅰ類	櫛描文	口縁	3	1			4	2
		龍泉窯系Ⅰ類	劃花文	口縁	3	1	1		5	2
		龍泉窯系Ⅱ類	鎬蓮弁	口縁	2	4	1		7	6
				底部	2				2	
		龍泉窯系Ⅲ類	砧手	底部	1				1	1
		龍泉窯系Ⅳ類	無鎬蓮弁	口縁		1			1	1
				底部	1				1	
			不明	底部		1			1	1
		龍泉窯系Ⅴ類	蓮弁文	口縁	7	8	5		20	14
				底部	2	1			3	
			雷文帯	口縁	37	39	10		86	27
				底部	2	1			3	
			無文外反	口縁	92	58	32		182	37
				底部	2	4	1		7	
			無文直口	口縁	80	33	8		121	36
				底部			1		1	
			不明	底部	1	2	1		4	2
		龍泉窯系Ⅵ類	細蓮弁文	完形	1				1	36
				口縁	85	61	8		154	
				底部	5	2	2		9	
			無文直口	口縁	10	4			14	11
			不明	底部	5	2	1		8	7
		龍泉窯系Ⅶ類	細蓮弁文	口縁	11	6	1		18	7
				底部	5	1	1		7	
		龍泉窯系Ⅳ-Ⅴ類	束口碗	口縁	1				1	1
		倣龍泉	粗製碗	口縁	4	1			5	3
				底部	2	1			3	
	皿	同安窯系Ⅰ類	櫛描文	口縁	4				4	3
		龍泉窯系Ⅲ類	口折皿	口縁	1	1	1		3	2
		龍泉窯系Ⅳ類	口折皿	口縁	6	4			10	4
		龍泉窯系Ⅴ類	口折皿	完形	1	1			2	7
				口縁	4	4	2		10	
				底部		1	1		2	
			腰折稜花	完形	1				1	7
				口縁	4	6			10	
				底部	1				1	
			腰折無文	完形	1				1	5
				口縁	3	1			4	
				底部	5				5	
			直口有文	口縁	1				1	2
				底部	1	1			2	
			直口無文	口縁	1	1			2	3
				底部	2	1			3	
			無文外反	口縁	8	6	2		16	7
				底部	9	3			12	
		龍泉窯系Ⅵ類	腰折稜花	口縁	3	3			6	2
			腰折無文	口縁	2	4			6	6
				底部	2	1	1		4	
			直口有文	口縁	1		1		2	1
			直口無文	完形		1			1	11
				口縁	17	4	2		23	
				底部	8	1			9	
		龍泉窯系Ⅶ類	腰折無文	口縁		2			2	1
				底部	1				1	
		分類不明	皿	底部	5	4	1		10	0
	盤			口縁	13	13	3		29	15
				底部	13				13	
	瓶			口縁	1				1	1
	杯			口縁	1				1	1
	置物			口縁	1				1	1
	擂鉢			口縁	1				1	1
	鉢			底部	1				1	1
	酒会壺			口縁		2			2	2
				蓋	7	10	2		19	3
白磁	碗	大宰府分類Ⅷ類		口縁				1	1	1
		白磁	A群(口禿)	口縁		1			1	1
				底部	1	1			2	
		福建浦口窯	F(今帰仁)	底部	5				5	2
		福建閩清窯	C(ﾋﾞﾛｰｽｸ)	口縁	2	1			3	2
		福建閩清窯	C(無文外反)	口縁	11	3			14	6
				底部	3				3	
		景徳鎮窯系	E群	口縁			1		1	1
					1				1	
		福建庄辺窯	G群	底部	1	1			2	1
		福建邵武窯	D(内底無釉)	口縁	5				5	3
				底部	4	2	1		7	
	皿	景徳鎮窯系	A（口禿）	口縁	4	2			6	3
				底部	3		1		4	
		景徳鎮窯系	E群	口縁	13	2			15	9
				底部	8	1			9	
		福建邵武窯	D群	口縁	16	8	4		28	10
				底部	3	3			6	
		福建庄辺窯	G群	完形		1			1	2
				口縁		1	1		2	
		燈明皿	D(燈明皿)	口縁	1				1	1
	杯	福建庄辺窯	D(八角杯)	口縁	1	1			2	2
		景徳鎮窯系	E群	完形	1				1	2
				底部	2				2	
	壺			口縁	1				1	1
	瓶			口縁	3				3	3
				底部	1				1	
	器種不明			口縁	4	1			5	—
				底部	9				9	

種別	器種	分類	文様等	部位	破片数 Ⅰ層	Ⅱ層	遺構内	Ⅳ層	破片数計	推定個体数
青花	元	青花盤		口縁			1		1	1
				胴部			1		1	
	碗	Ⅱ類	外反	口縁	3	2	4		9	4
				底部	1				1	
		Ⅲ類	蓮子	口縁	4				4	5
				底部	5	1			6	
		Ⅳ類	口折	口縁	5				5	3
		Ⅴ類	腰折れ	口縁	1				1	8
				底部	10	1			11	
		Ⅵ類	饅頭	口縁	8				8	4
				底部	2				2	
		Ⅶ類	外反	口縁	1	1			2	2
				底部	2				2	
		不明		口縁	25		1		26	
	鉢	粗製鉢		底部		1			1	1
	皿	Ⅰ類	外反	口縁	7				7	4
				底部	7	1			8	
		Ⅱ類	碁笥底	完形	1				1	5
				口縁	9				9	
				底部	3				3	
		Ⅲ類	外反	口縁	13				13	5
				底部	6				6	
	小杯	Ⅰ類	直口	底部	1				1	1
		Ⅲ類	外反	口縁	2				2	3
				底部	1		1		2	
	杯	Ⅰ類	筒型	底部	2				2	2
		Ⅲ類	外反	底部	2				2	2
	瓶			口縁	1				1	1
褐釉陶器	茶入れ			口縁	1	1			2	2
	水注身	身		口縁	2				2	1
		蓋		口縁	1				1	1
	壺	中型		口縁	5	7			12	8
				底部	4	3			7	
	壺	大型		口縁	5				5	2
				底部	2	1	1		4	
	擂り鉢	擂り鉢		口縁	1				1	1
	鉢	鉢		口縁	1	1			2	1
不明焼締め陶器		鉢		口縁	1				1	1
				底部	1	1	1		3	
赤絵				口縁		1	1		2	1
青白磁		皿		底部	1				1	1
黄釉		皿		底部	1				1	1
翡翠釉		不明		胴部	1	1			2	2
緑釉		袋物		胴部	1				1	1
瑠璃釉		碗		口縁	3				3	1
		瓶		口縁	3	1			4	2
褐釉磁器		碗		胴部	1				1	1
タイ陶磁	半練土器		蓋	口縁	1	7	3		11	4
	褐釉陶器	シーサッチャナライ窯系	大型壺	口縁	1	1	1		3	2
		ノイ川窯系	大型壺	口縁	1	3			4	2
			中型壺	口縁	4	3	1		8	3
		不明	大型壺	底部	5	1			6	4
			中小型	底部	2				2	1
	青磁	袋物		胴部	1		1		2	1
備前		擂鉢		胴部	2				2	
南西諸島	徳之島産	カムィヤキ	A群	胴部	1			1	2	1
			B群壺	口縁	1	1			2	1
	湧田窯	瓦質土器	鉢	口縁	1				1	1
	グスク土器	壺？		口縁	1				1	4
		器種不明		胴部	1	1	2		4	
					776	377	116	2	1,271	432

種別	器種等	Ⅰ層	Ⅱ層	遺構	Ⅳ	計
玉類	勾玉			1		1
	管玉			1		1
	小玉	2	1	2		5
小計		2	1	4	0	7

遊具	碁石	1	1			2
	円盤状製品	1		2		3
小計		2	1	2	0	5

銭貨	中国銭		8	3		11

金属製品	銅製品	簪		1			1
		座金具		1			1
		目釘		1			1
		覆輪		1			1
		湯玉状製品		2			2
		不明	2	7	6		15
		煙管	1				1
	鉄製品	刀子	1	1	1		3
		鉄鏃		1			1
		鉄釘	8	18	5		31
		不明	5	6	3		14
小計			17	39	15	0	71

石器	磨石		2				2
	凹石			1	2		3
	砥石				1		1
	石器片		2	1	1		4
小計			4	2	4	0	10

写 真 図 版

平成16年度　発掘調査作業員

図版1　屋敷地5の発掘調査（1）

1．屋敷地5　完掘（北東から南西）

2．屋敷地5　完掘（北西から南東）

図版2　屋敷地5の発掘調査（2）

1．屋敷地5着手前（西から東）

2．道路下客土除去状況

3．道路下保護砂による埋め戻し

4．屋嘉地5（北側セクション）

5．SR1　検出作業状況

6．SR1　検出状況（北東から南西）

7．SR1　検出状況（南西から北東）

1．SK521　堆積状況（半裁セクション）

3．SK628　遺構検出状況

2．SK521　完掘状況

4．SK628　堆積状況（半裁セクション）

5．SK354　　堆積状況（半裁セクション）

図版4　屋敷地5の発掘調査（遺物出土状況）

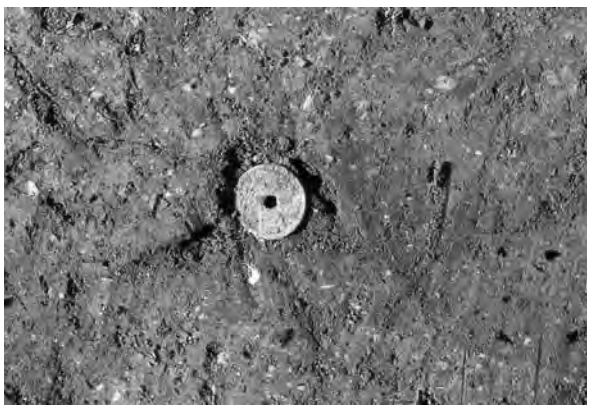
1．青磁皿出土（ pit428より出土　dot.190）

2．青花瓶出土（ dot.122）

3．褐釉陶器壺出土（ pit534より出土　dot.213）

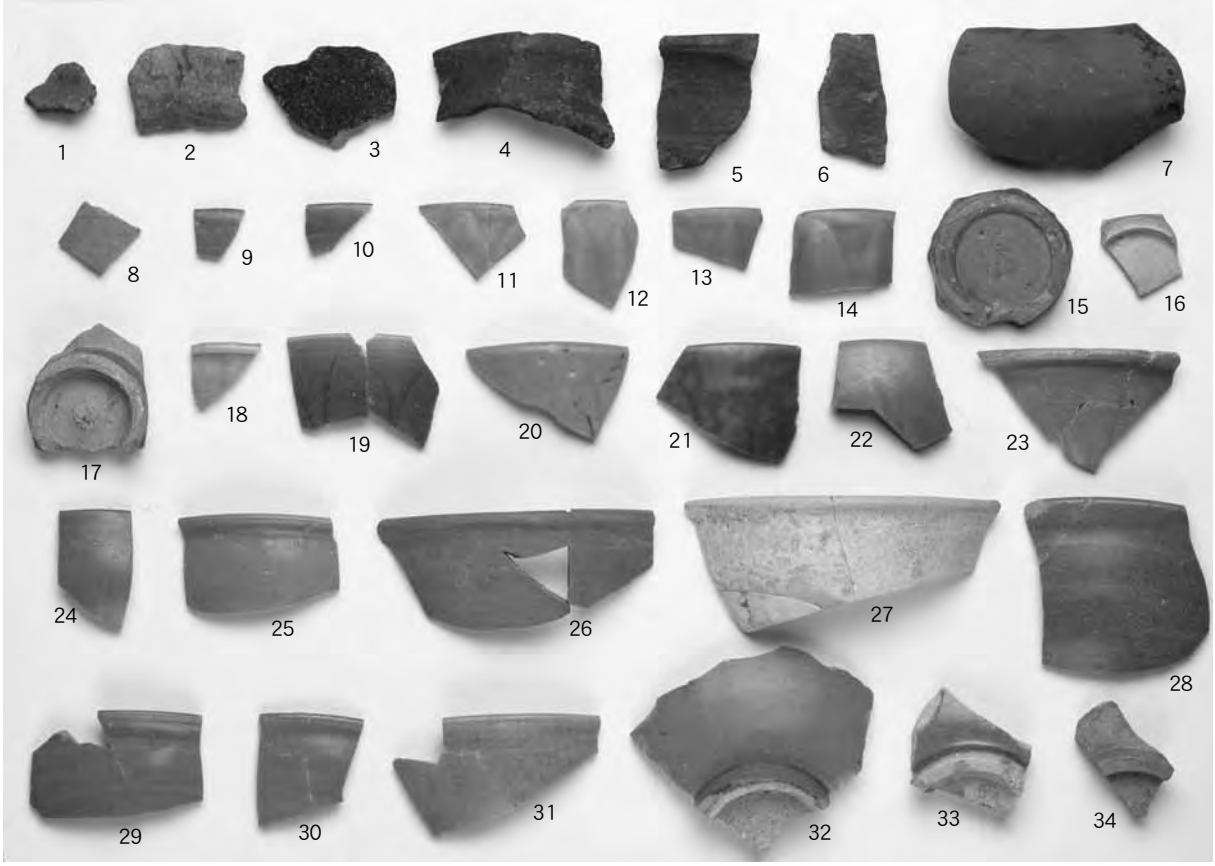
4．半練土器出土（ pit473より出土　dot.200）

5．青磁皿出土（ pit74より出土　dot.65）


6．古銭出土（dot.39）

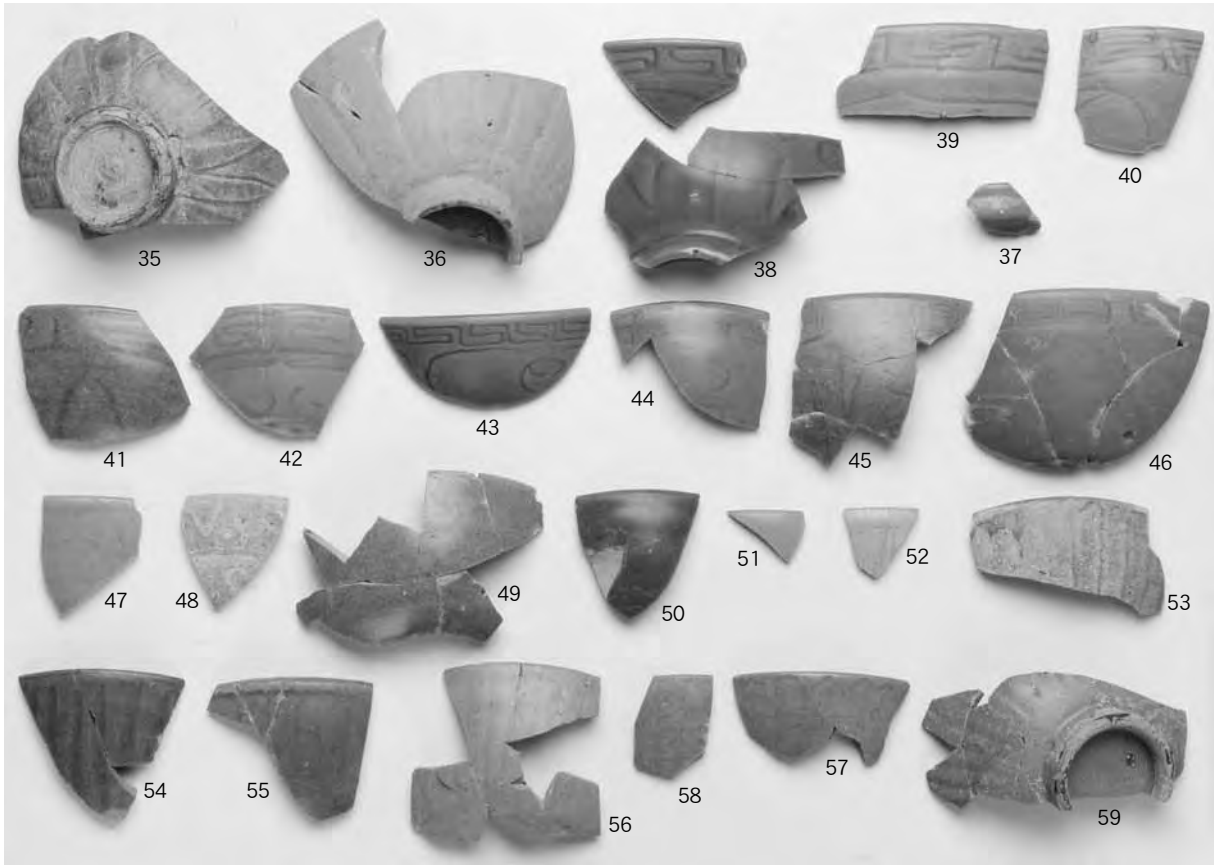
7．勾玉出土（ pit108より出土　dot.92）

8．碁石出土（dot.44）

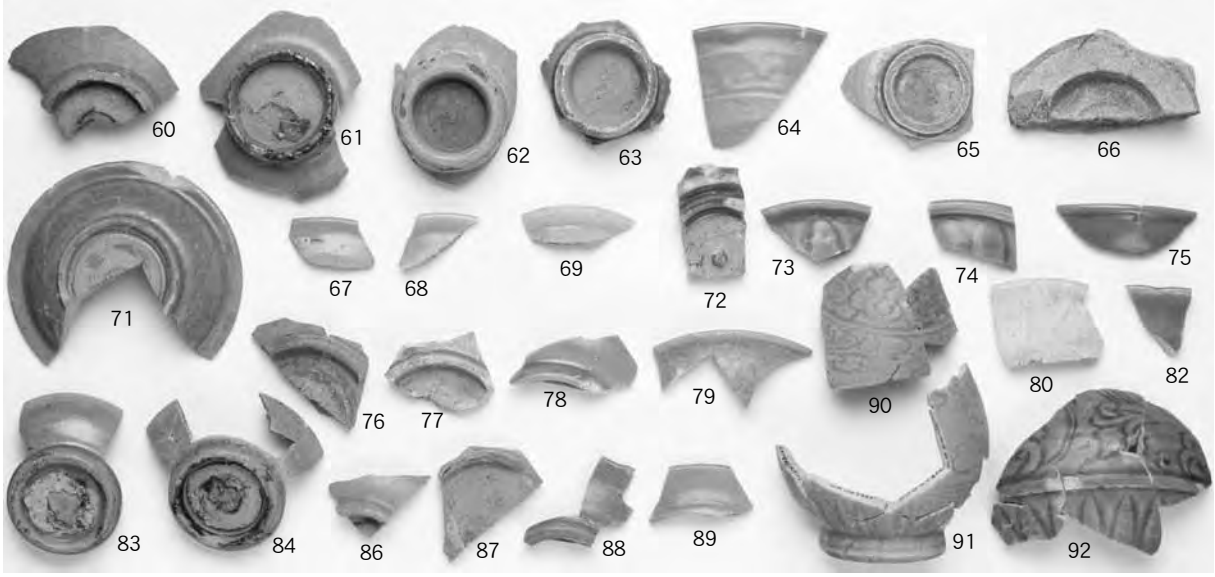

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

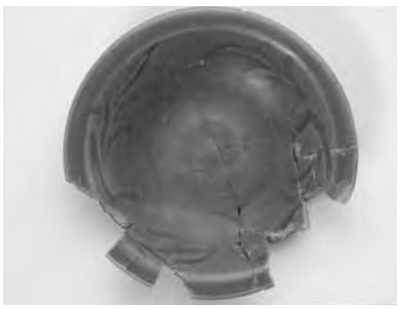
出土遺物（1）

図版6　屋敷地5



出土遺物（2）


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
82
83
84
86
87
88
89
90
91
92

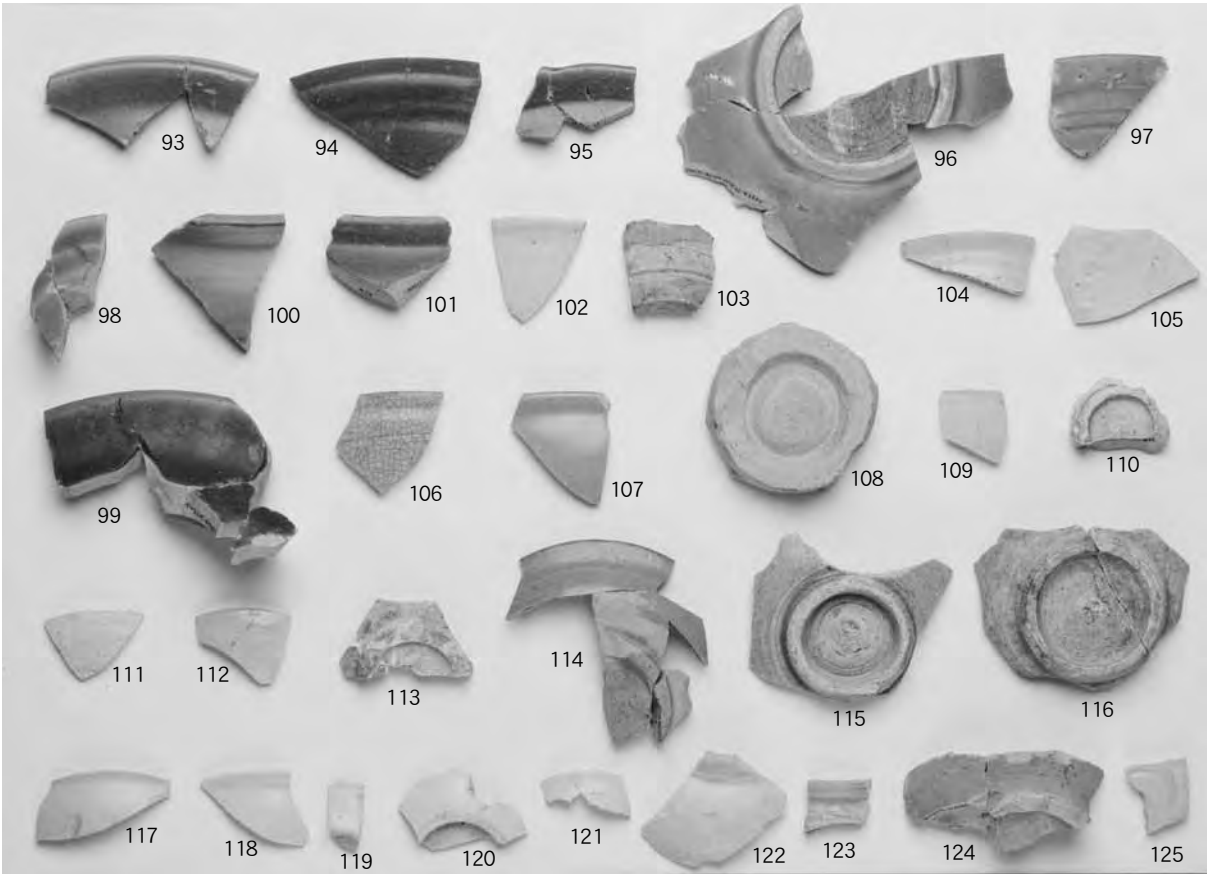


70

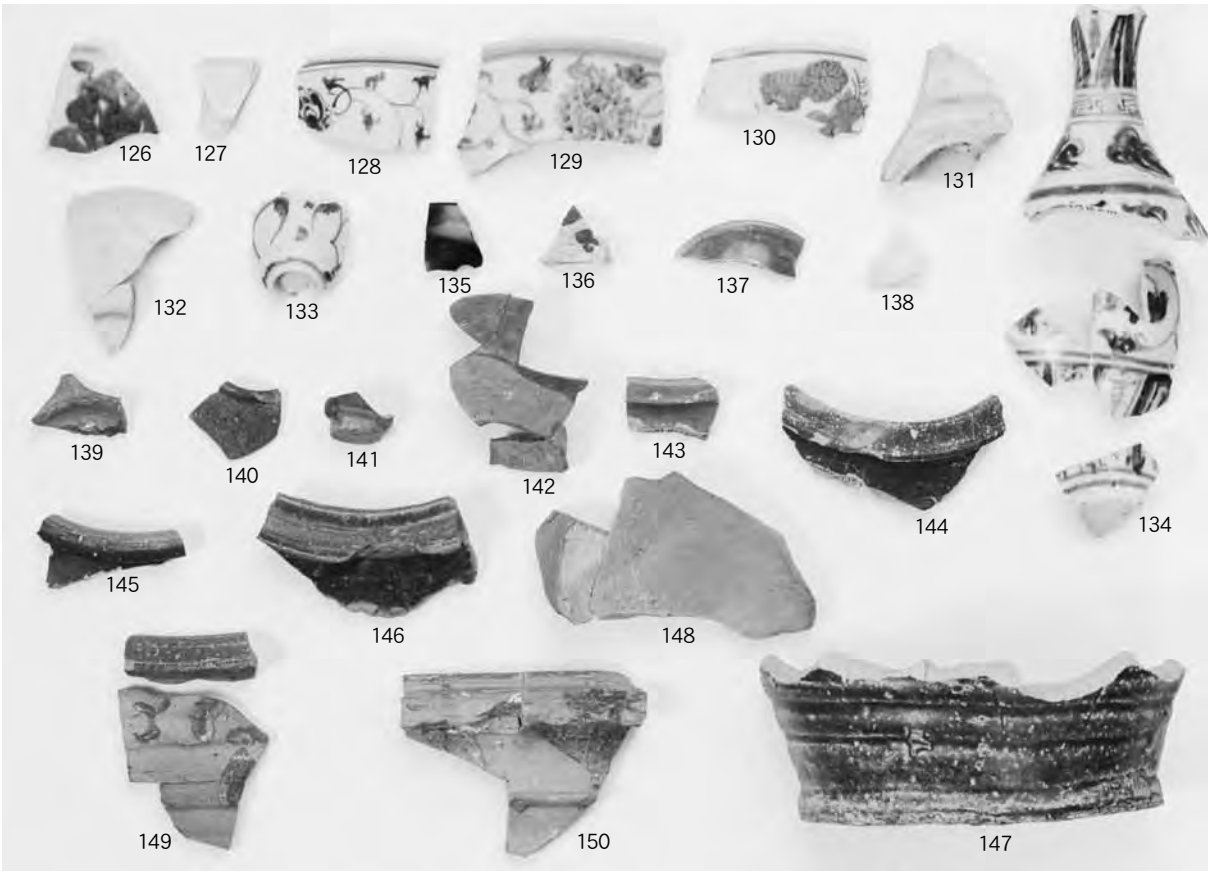
81

85

出土遺物（3）

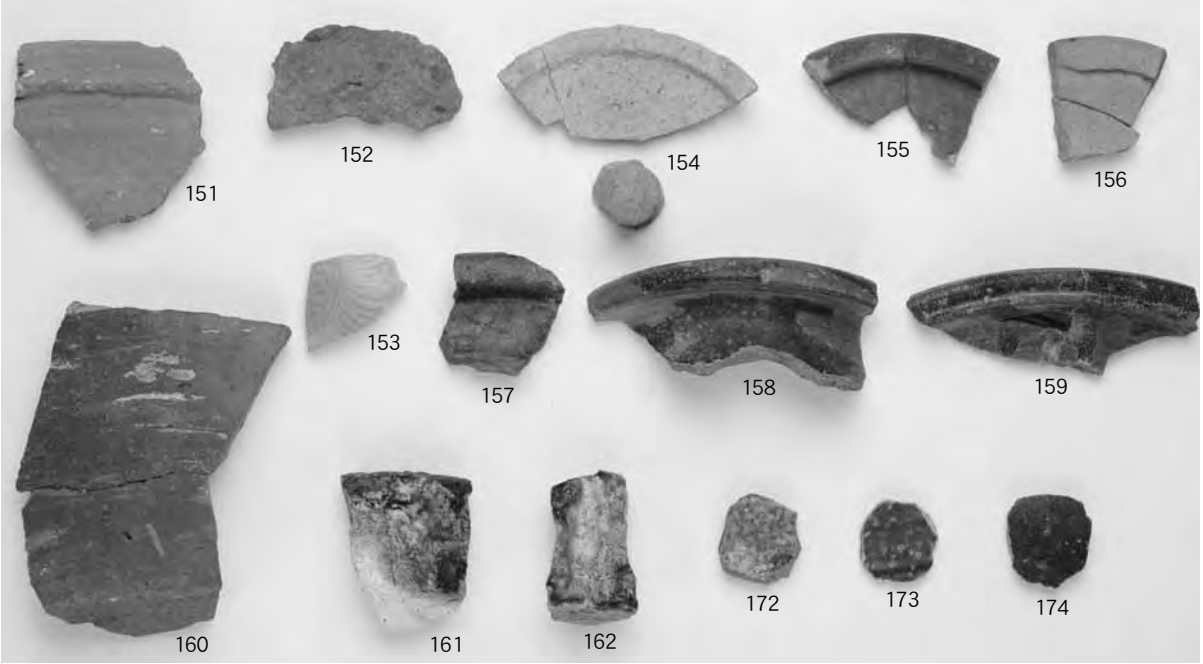

93
94
95
96
97
98
100
101
102
103
104
105
99
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125

出土遺物（4）


126
127
128
129
130
131
132
133
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
134
145
146
148
149
150
147

出土遺物（5）

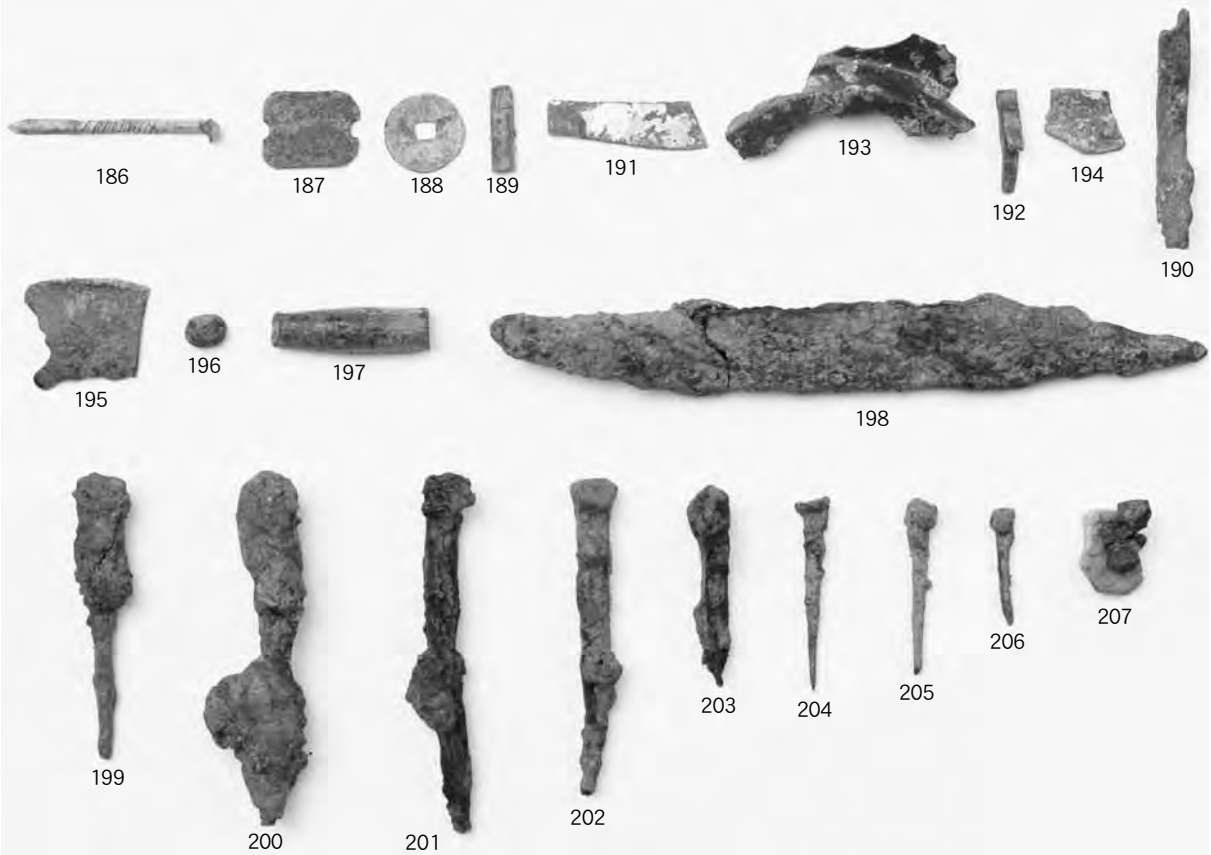
図版10　屋敷地5



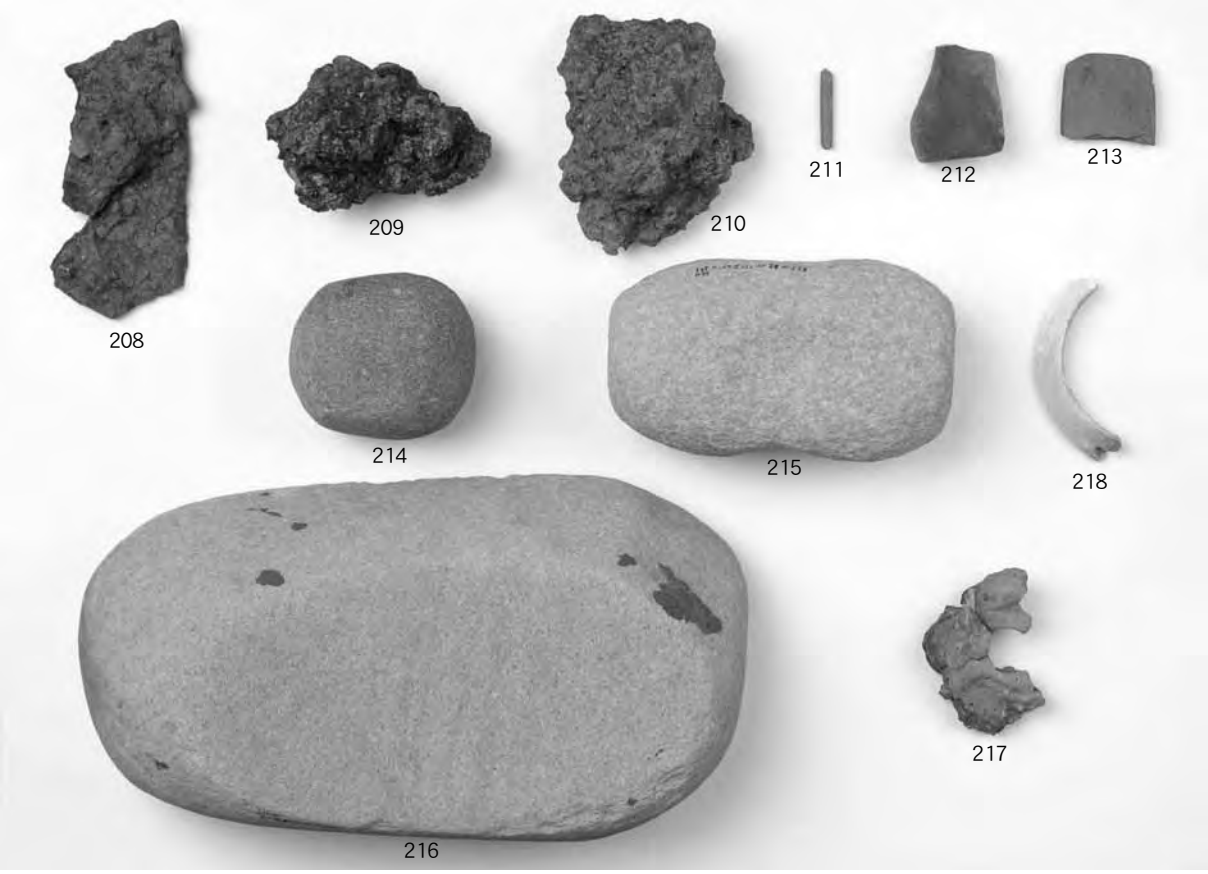
出土遺物（6）

出土遺物（7）

図版12　屋敷地5



出土遺物（8）



出土遺物（9）

図版14　屋敷地5（1次外部出土の植物遺存体）

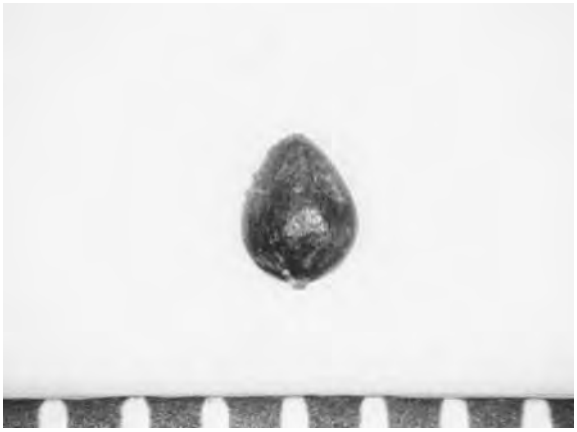
イネ

同左

コムギ

同左

オオムギ


カヤツリグサ科

アワ

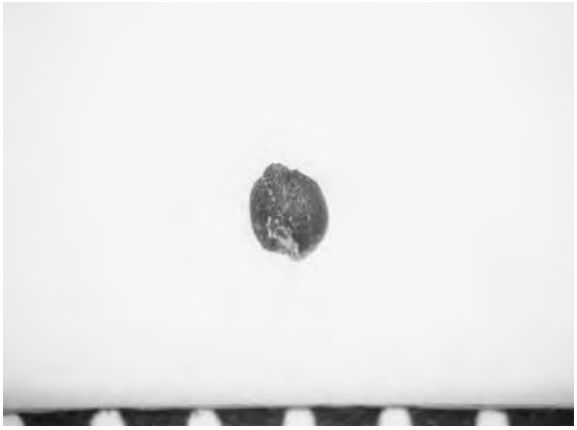
アワ

炭化植物遺存体（1）

図版15　屋敷地5（1次外部出土の植物遺存体）

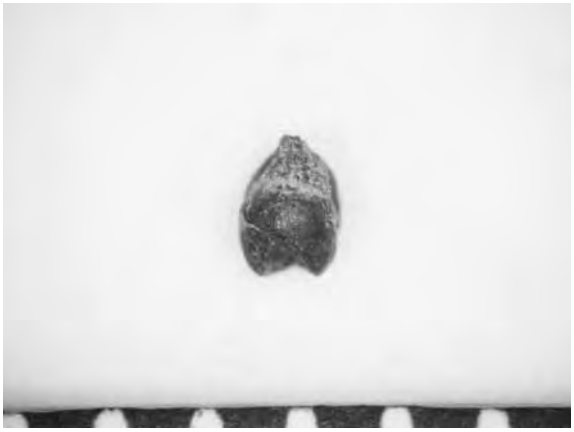
不明A

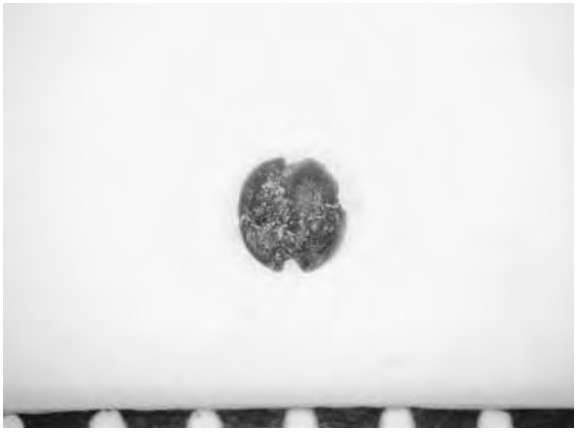
不明B

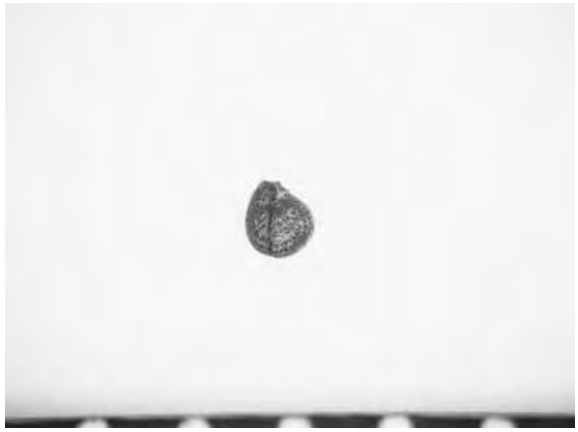

不明C

不明D

不明E


不明F


不明G


不明H

炭化植物遺存体（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	なきじんじょうせきはっくつちょうさほうこくしょ 3
書名	今帰仁城跡発掘調査報告書 Ⅲ
副書名	今帰仁ムラ跡　西区屋敷地5の調査
巻次	
シリーズ名	今帰仁村文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	宮城弘樹・玉城靖・金武正紀・与那嶺俊・樋泉岳二・具志堅亮 赤嶺信哉・喜名政英・高橋誠一・松井幸一・松井僚平
発行機関	今帰仁村教育委員会
所在地	〒905-0592　沖縄県今帰仁村字仲宗根232　　TEL0980-56-3201
発行年日	西暦2008年3月31日（平成20年）

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m²	
今帰仁城跡（なきじんじょうせき） （今帰仁ムラ跡）	今帰仁村（なきじん） 字今泊（いまどまり）	473065		26°41′34″	127°55′41″	16年度 2004.4.21 ～ 2005.3.31	500m²	今帰仁城跡史跡整備事業に係る発掘調査
						16年度 2005.1.20 ～ 2005.3.31	100m²	村内遺構発掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今帰仁城跡 ・今帰仁ムラ跡	集落	グスク時代 （13世紀から 16世紀）	柱穴 土坑 溝 土留石積み ほか	グスク土器 カムィヤキ 中国陶磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 瑠璃釉 タイ陶磁 褐釉陶器 備前 玉類 銭貨 金属製品 石製品 骨製品	今帰仁城跡の北側に所在する城下町的な集落遺跡を確認。今帰仁城跡の史跡整備を実施

今帰仁村文化財調査報告書第25集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ

発行　2008年３月31日
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL　0980－56－3201

印刷　沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL　098－889－5513